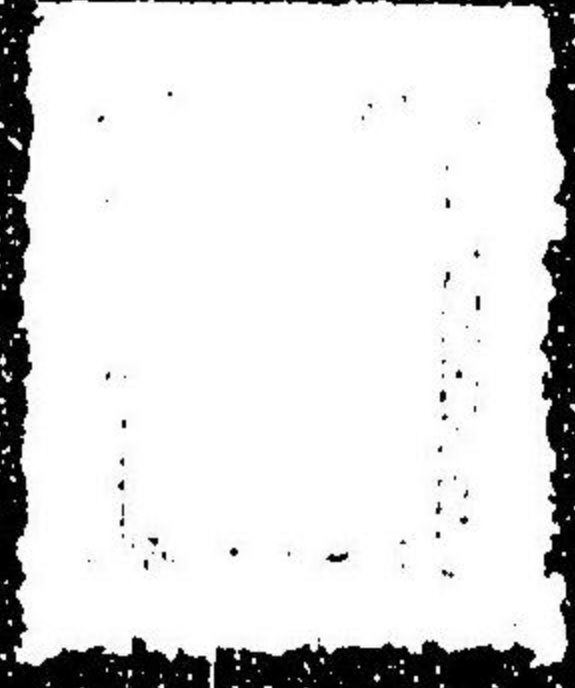
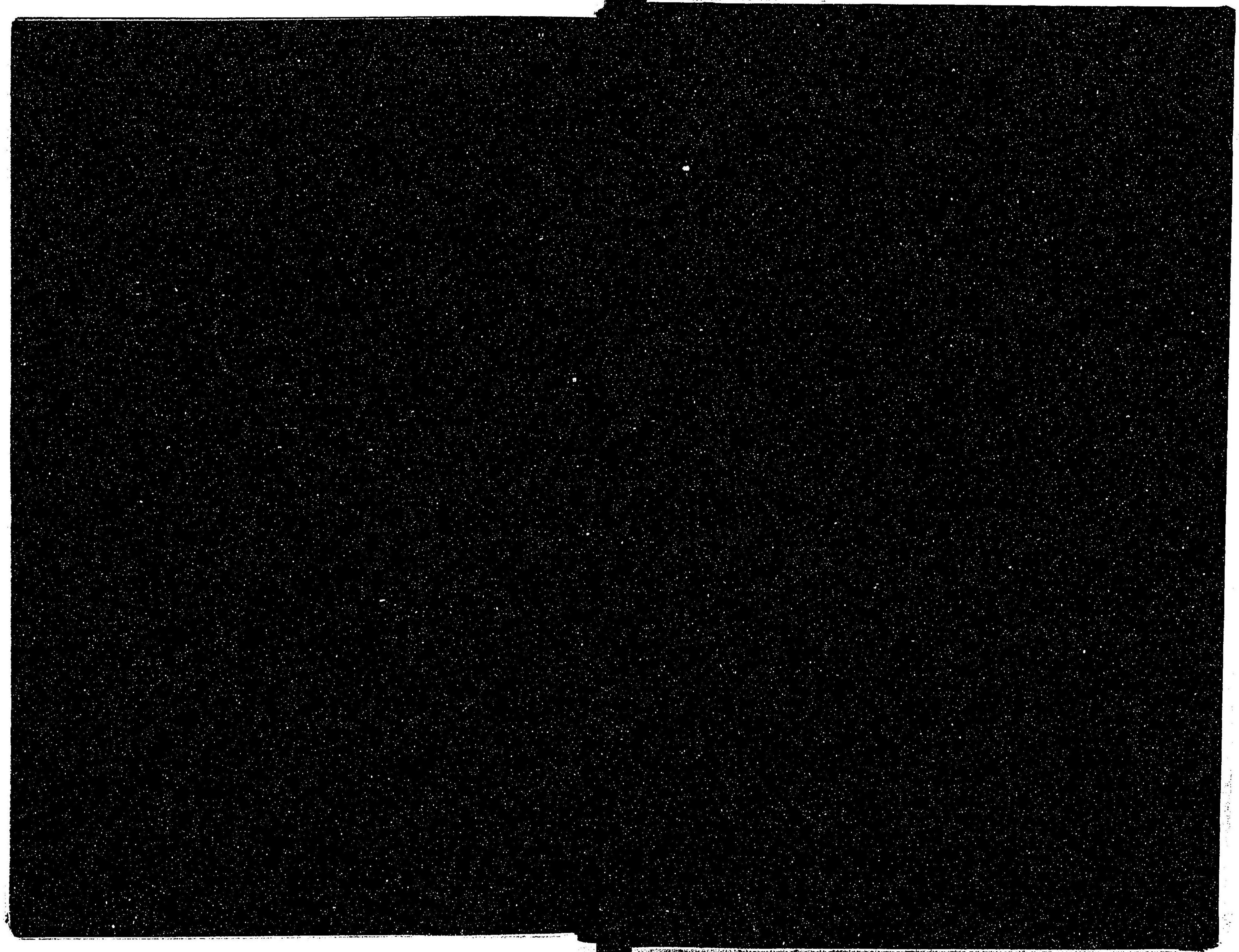
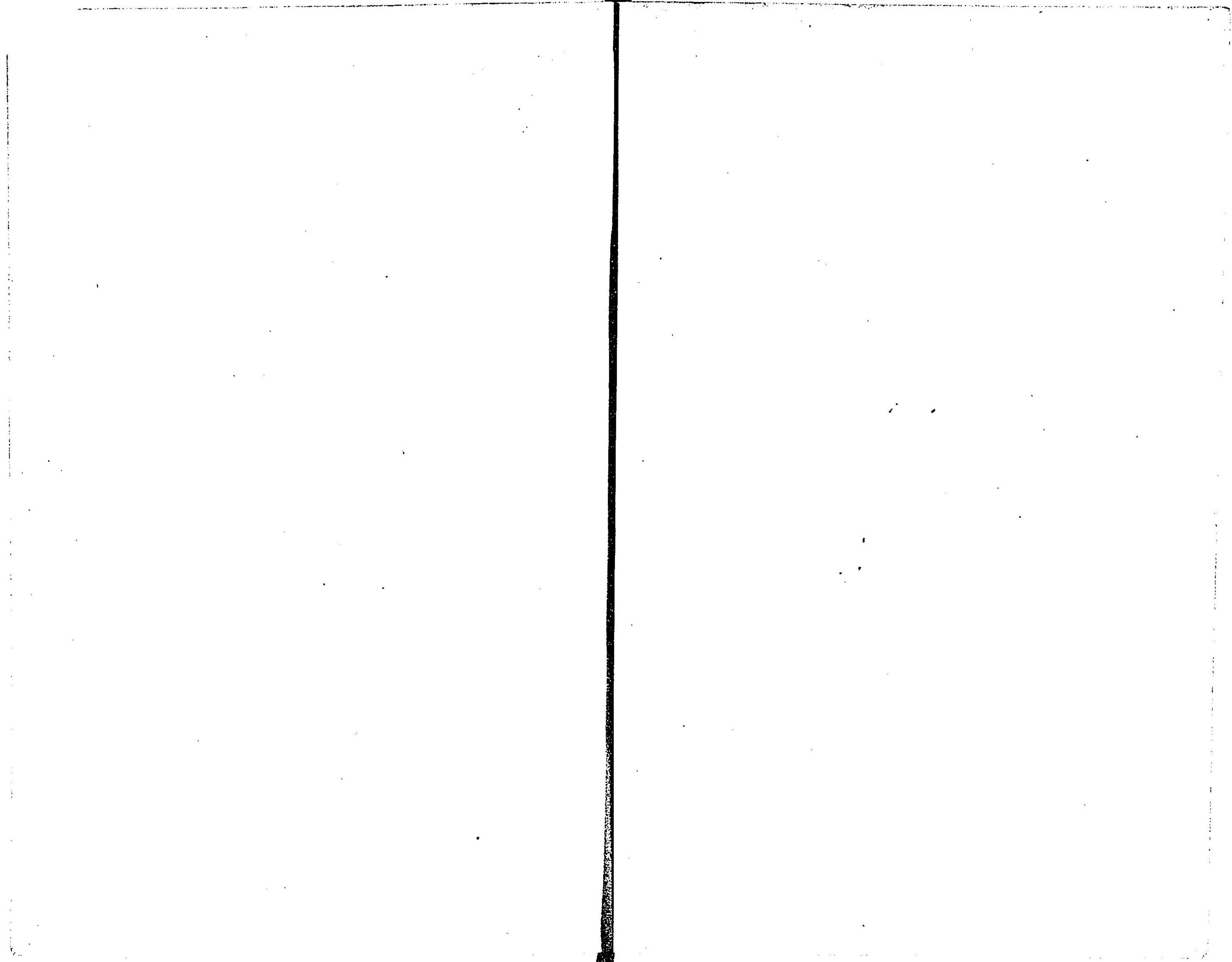


防長志









防長志要



防長志要

緒言

一、本書は山口縣管内の沿革、地理、名所舊蹟等の大要を記したるものにして、簡約を主として編纂せり。

一、本書と同時に編纂したる縣勢要覽及び防長名蹟に載する所のものは、本書には之を省けり。

明治四十年十月

防長志要

目次

緒言

第一編	沿革	一
第一章	總說	一
第二章	先史時代	五
第三章	上古時代	七
第四章	鎌倉時代	九
第五章	大内氏	一一

目次

目次

第六章	毛利氏	二六
第七章	明治維新と防長二州	四一
第八章	維新後の防長	五一
第九章	文教の沿革	五五
第十章	武術の沿革	八五
第十一章	美術工藝の沿革	八八

第二編 地理

第一章	總説	一〇一
第二章	面積及戸口	一〇一
第三章	地勢	一〇三
第四章	地質	一一一
第五章	鑛泉	一一六

第六章	氣象	一二七
-----	----	-----

第三編 名所舊蹟

(甲)周防	一二一
第一章	吉敷郡	一二一
第二章	佐波郡	一五三
第三章	都濃郡	一六六
第四章	熊毛郡	一七四
第五章	玖珂郡	一八〇
第六章	大島郡	一九六
(乙)長門	一九九
第七章	阿武郡	一九九
第八章	大津郡	二二〇

目次

三

第九章	美禰郡	二二八
第十章	厚狹郡	二二三
第十一章	豊浦郡	二四六
第十二章	下關市	二五九

挿圖目次

- 一、豊浦郡豊東村石器時代遺跡圖
- 一、大内時代山口市街圖
- 一、沿革圖二葉
- 一、外國艦隊下關砲撃地圖
- 一、外寫眞貳拾餘種

目次終

防長志要

第一編 沿革

第一章 總説

山口縣は周防長門の二箇國を管し、本州の最西端に位す。此の地古來國郡の制一ならず上古に在りては今の周防の地は三箇國を立つ、大島國、周芳國、都怒國是なり、國ありしが如し、今更かならず、天武天皇の頃合せて一とし、周防といふ國名の起源に就きては種々の説ありて一定せざれども、熊毛郡の郷名周防より起りたる者ならんとの説眞に近し、郡に周防村あり、和名抄には須波宇と記せれば其の頃は既に「スハウ」と呼びたるは確かなれども、古くは「スハ」と呼び

明治二年朝廷封建を廢し藩知事を置きて各藩の地を治めしむ此の時防長二州に山口、徳山、岩國、豊浦、清末の五藩知事あり明治四年藩を廢して縣とするに及び防長二國を合せて山口の一縣を置き以つて現時に至れり。

明治二年以來、現山口縣内に長官たりし人を列擧すれば次の如し。

山口藩	知事	毛利廣封
徳山藩	知事	毛利元蕃
岩國藩	知事	吉川經健
豊浦藩	知事	毛利元敏
清末藩	知事	毛利元純
權令 <small>後縣</small>		中野梧一
縣令		關口隆吉
縣令 <small>後知</small>		原保太郎
知事		大浦兼武

至自全全	至自全全	至自全全	至自全全	至自全全	至自全全
現任	廿六年六月	廿五年二月	廿二年一月	廿年十二月	廿年十二月
知事	知事	知事	知事	知事	知事
	渡邊融	武田千代三郎	古澤滋	秋山恕卿	安樂兼道

第二章 先史時代

石器時代の遺跡に就きて、本縣にては今日迄に發見せられたる者甚だ少く、唯僅かに

- 玖珂郡麻里布村大字室木 石鏃
- 吉敷郡大内村大字長野 石鏃
- 全郡井關村字引野 貝塚、土器、石器、等破片
- 美禰郡大嶺村字笠島 磨製石斧

豊浦郡豊東村字上ノ原 石器時代遺物包含地、石斧、砥石、土器數十個
全上 磨製石斧

全郡黒井村字黒井 磨製石斧

全郡鬼ヶ城山半腹 磨製石斧

全郡神田下村字附野、高坪山 磨製石斧、全出刃形石斧、全弓状石斧、石鎗、

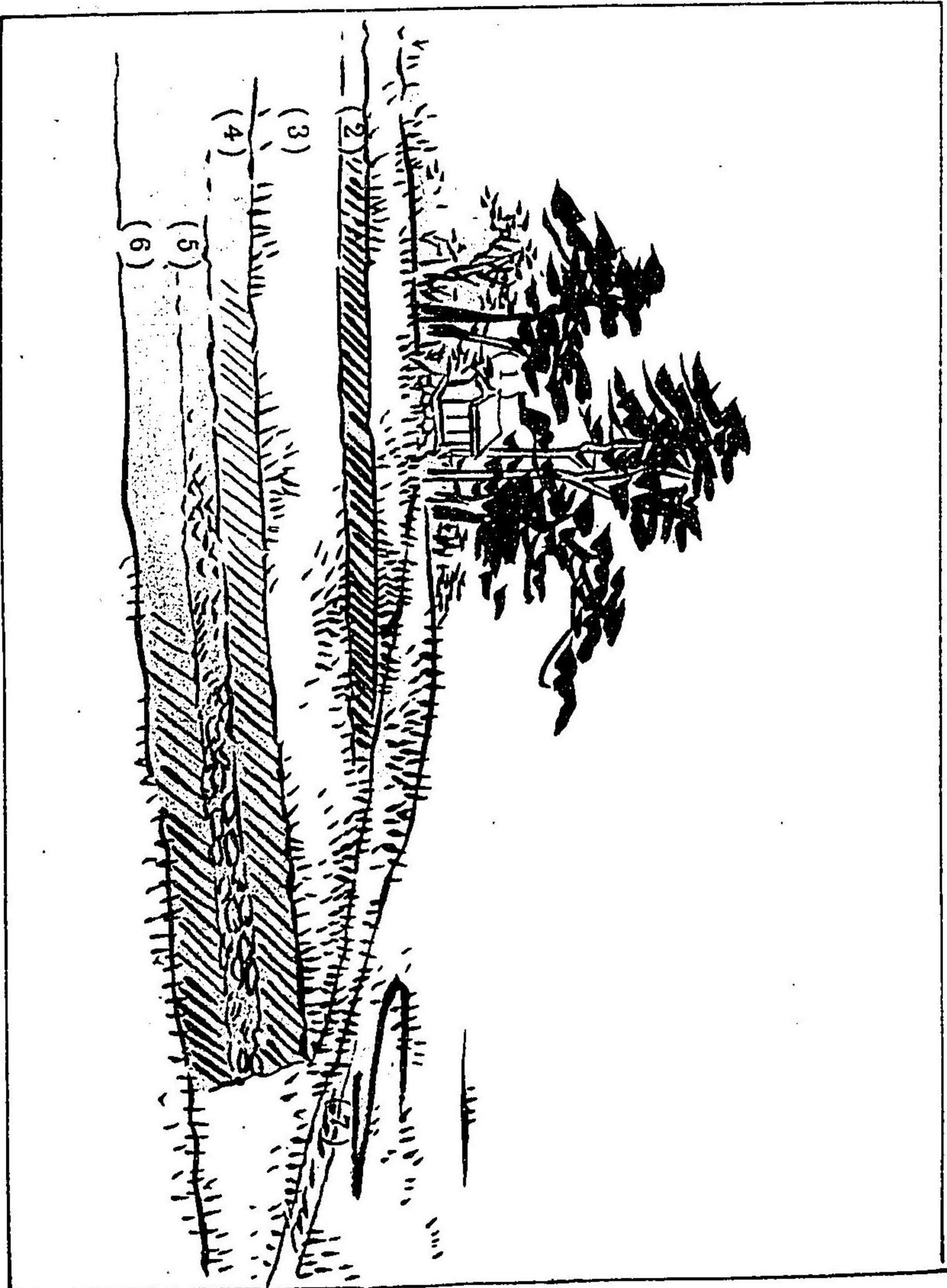
石棒、粗製石斧等數十點

全郡粟野村大字大浦、山野 半磨製石斧數點

等の數處あるに過ぎず。

右の内井關村の貝塚は、土俗貝殻を轉じてカングラ山といへり。豊東村の遺跡は地下七八尺の處に於いて約二尺の地層をなし、中に土器、石器を混ざる事夥しく、殊に土器累累として土中に混交せり。蓋し石器時代遺物包含地として實に有數の者に屬す。

- (1) 西舍人墓
- (2) 地層横断面、約三尺
- (3) 平面
- (4) 約四尺
- (5) 約二尺(石器、土器等包含)
- (6) 地層横断面
- (7) 道路



豊浦郡豊東村上ノ原石器時代遺物包含地

第三章 上古時代

上古周防は大島周芳都怒の三箇國に、長門は阿武穴門の二箇國に分れたる事前述の如し、大島國は今の大島郡に當り、都怒國は後の都濃佐波吉敷の三郡に當る、從つて周芳國は専ら玖珂熊毛の地を指し、を知るべし、阿武國は今の阿武郡にして、穴門國は今の厚狹、豐浦、美禰、大津の四郡に相當せり、景行紀に、十二年秋七月、熊襲反之不朝貢^(中)、九月甲子、朔戊辰、到周芳、娑磨時、天皇南望之、詔群臣曰、於南方煙氣多起、必賊將在留之、云々と見え、仲哀紀に、天皇於是將討熊襲國、則自德勒津發之、浮海而幸穴門^(中)、九月、興宮室于穴戶而居之、是謂穴門豐浦宮、と見ゆ、これ、周防長門の地名の國史に出てたる最初とす、其の上代の國々を合せて、今の如く周防長門の二國とせしは、大化以後に屬し、周防に大島、玖珂、熊毛、都濃、佐波、吉敷の六郡を置き、長門に厚狹、豐浦、美禰、大津、阿武の五郡を置く、周防の國府は、佐波郡佐波^{今防府町東佐波}に置き、長門の國府は、豐浦郡豐浦^{今長府村}に置き、

に置かれ、守介、掾、目等こゝに居りて國政を掌れり。是より先、長門は外國交通の衝に當るを以つて、早くより臨海館を今の下關の地に置き、蕃客の接待に備へ、後、太宰府に次ぐ邊要の地なるを以つて、長門城を築き、長門關をも設けて、益々防備を固くす。館關の址、城墟と共に今詳ならず。天武天皇以後、國司を任ずるにも、長門は畿内陸奥と同じく、大抵大山位以上の人を以つてして、自餘の諸國と異にし、清和天皇の時、國司に帶劔を賜ひ、其後、郡司以下にも帶仗を許せり。當時兩國の守若しくは權守たりし人々の史に散見する者、一々擧げ難し。雖、周防の國守に大伴東人、多治比黑麿、權守に春澄、善繩、菅原輔正、大江匡房等の名見え、長門の國守に大伴男人、巨勢公成、權守に菅原爲長、藤原家宣等の名見えたり。治承四年、源平二氏の亂起り、壽永二年、平家安徳天皇を奉じて九州に奔るや、周防長門は毎に其の交戰の區となる。此の時、長門は平知盛の所領なりしを以つて、目代紀光季なる者、大船百餘艘を點進す。平家これに移りて屋島に赴き、遂に山陽南海を徇へ、一ノ谷に城きてこれに據る。周防介某、長門の厚東某等赴き援

ふ。一ノ谷陥りて平家再び西に奔り、四年三月、長門の埴浦に泊し、二十四日大に源氏と海上に戦ひて平軍敗れ、天皇崩じ給ひ、平家一族こゝに滅ぶ。

第四章 鎌倉時代

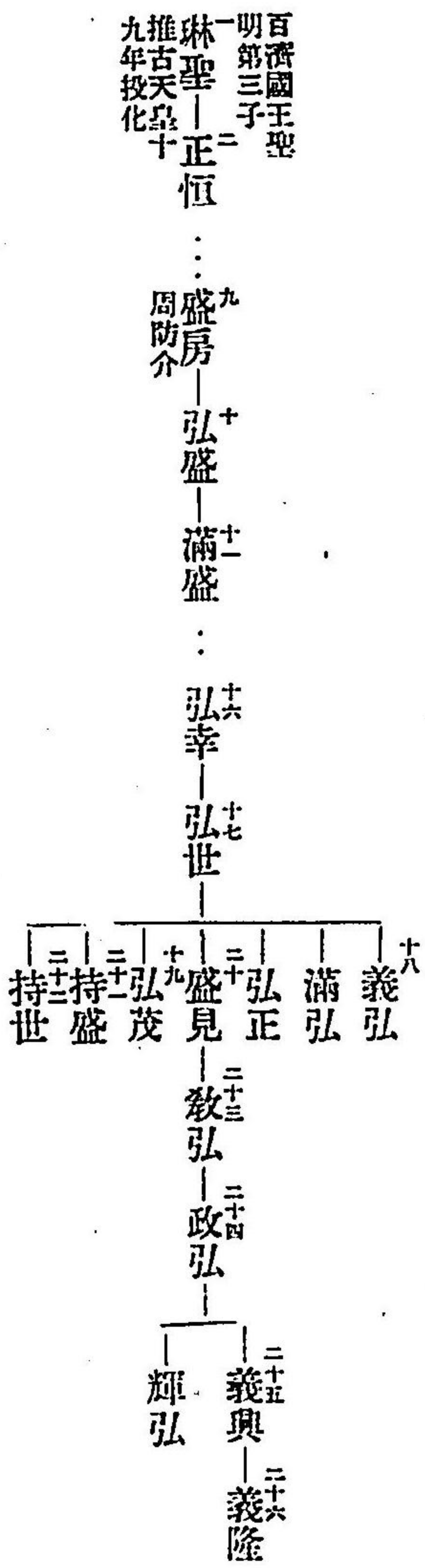
源頼朝平氏を滅ぼすや、奏請して諸國に守護地頭を置き、補するに家人を以つてす。これより政權武門に歸し、王制地を拂ふ。此の時に當り、後白河法皇、さきに兵燹に罹れる東大寺の再建を圖り給ひ、周防國を以つて造營の料に充て、文治二年、大勸進俊乗坊重源を其の國司に補す。時に周防は源平の争亂を経て、堵を失ふ者道路にみつ、重源これを救恤し、今に及びて民其の德を慕ふ。然れども、これより周防の國司は釋氏相つぎてこれに任じ、武人國應を輕侮して、官人を凌辱し、國府の威權益々衰へ、遂に南北朝分争の際に至り、大内氏の掌握する所となる。文治年間以後、長門は佐々木高綱、貞綱、天野義景等守護たりしが、北條氏執權たるに及び、建治元年、特に長門探題を置き、一族北條宗頼を以つてこれに任

ぜり。これ北條氏、竊に王朝の制度を考へ、又豫め蒙古入寇に備ふる所ありて設置せしに外ならず。此の年四月、元使杜世忠等三人國書を齎して豊浦郡室津に着す。是を鎌倉に送致し龍口に斬る。五月幕府、周防安藝備後に令して長門の軍額を補ひ、結番して要害の地を守らしむ。弘安四年、蒙古の舟師十萬、太宰府に襲來して悉く敗虜す。この時長門沿海の地も亦虜患を被る。事、正史に見えずと雖、遺跡口碑の存するによりて略ぼ分明なり。其の後、長門探題は、北條氏世々一族の人を以つてこれに任ず。或は其の代官を置き、事務を攝し、これを守護代と稱す。守護、守護代は、この後防長二國共に存して大内氏の末葉に及べり。元弘三年、後醍醐天皇隱岐より伯耆に還幸し、繪旨を諸國に下して王事に勤めしむ。厚東武實、豊田胤藤等兵を擧げ、探題北條時直を撃つてこれを走らす。建武元年、武實の功を賞して長門守護職を賜ふ。因つて入府して國事を見る。武實は其の先物部氏、守屋に出づ。守屋の遠孫武基、厚狭郡に居り、始めて厚東氏を稱す。其の玄孫武晴が子武光、城を柳井の霜降山に築きてこれに居る。武實は其の七世の孫

なり。厚東氏系豊田氏は、其の先詳ならず、中古の頃より今の豊浦郡の北部、別に豊田郡あり、豊田氏蓋し其の郡司の家なり。建武中興の業成るに垂んとして天下復亂れ、南北兩朝の分争となるや、周防の大内弘世、長門を略し、豊田氏等皆其の破る所となりて亡ぶ。獨り武實の曾孫義武、これに抗して、干戈止む時なかりしが、亦終に其の滅ぼす所となれり。

第五章 大内氏

大内氏略系



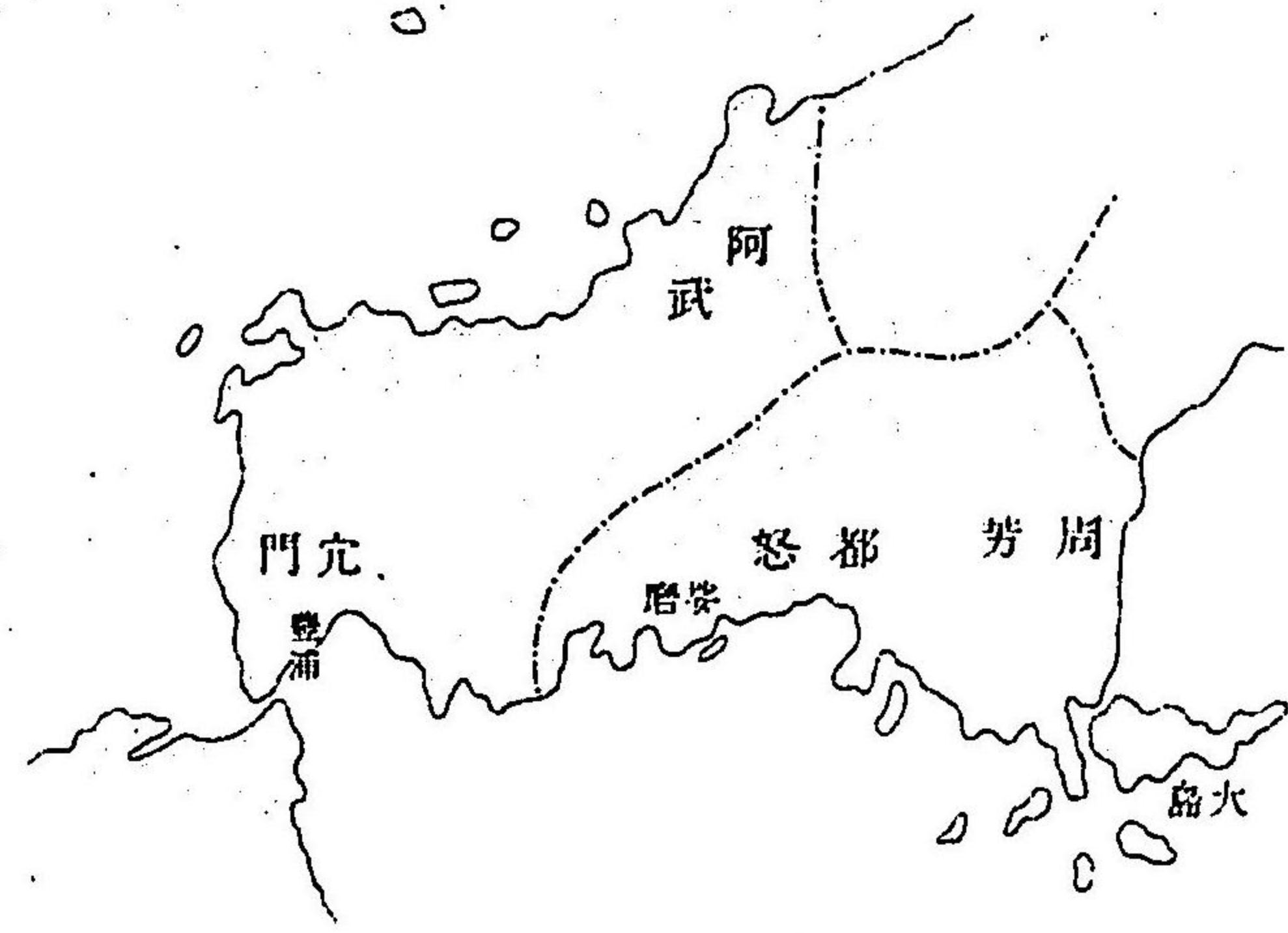
大内氏の興亡

大内氏は、其の先百濟王聖明の三子琳聖に出づ。琳聖の名正史に見え琳聖推古天皇の十九年歸化して周防の多々良濱に泊す。入朝の後、復周防に下りて大内縣今吉敷郡に居る。琳聖の子正恒、始めて多々良氏を賜ひ、子孫世々多々良を稱せしが、後地名に因りて大内氏と稱せり。九世盛房に至り、周防介に任ぜらる。是より周防介、或は周防權介を世襲し、大内介と稱す。傳へて琳聖十六世の裔弘幸に至る。時方に南北朝分争の際にして、弘幸、初め足利氏に屬せしが、後、南朝に歸順す。其の子大内介弘世、父の後を襲ぎて、屢々周防の北軍と戦ひてこれを敗り、又舊族山口氏を滅ぼして初めて居を山口に移す。これ山口繁榮の濫觴にして、これより大内氏の威勢漸く強大なり。弘世既に國內を略ぼ平定せしかば、これに於いて兵を長門に出し、正平十四年、舊族厚東氏、豊田氏を攻めて遂にこれを倒し、悉く其の地を併す。かくて有力なる宮方なりしが、後、款を足利氏に納れて

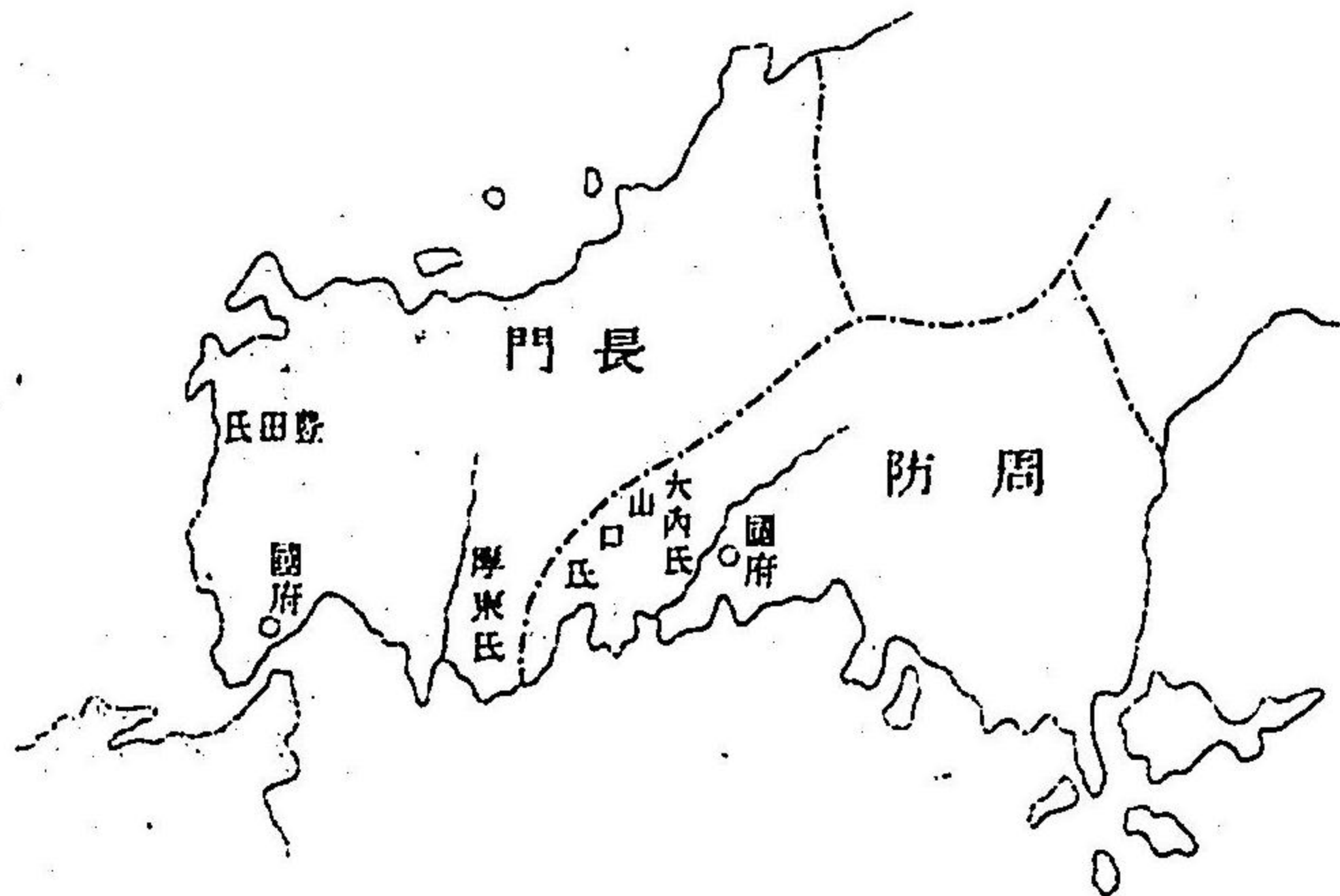
周防長門兩國の守護職となり、又石見の守護を兼ね、祝髮して道階と號す。其の長子義弘、年甫めて十六、應安四年、探題今川貞世に隨つて九州に下り、菊地、松浦諸族と戦ふこと大小數十度、未だ嘗て不覺を取らず。當時無双の驍將と聞ゆ。會々將軍義滿九州下向の歸途、扈從して京都に上り、明德二年、山名氏清の亂、義弘先陣を承りて益々武名を輝かし、功に由つて山名の舊領、紀伊、和泉を賜ひ、防長、豊石と合せて六箇國の守護職となる。又南北兩朝の合一に周旋し、足利氏が明朝鮮との交通、勘合をも與り行ひ、九州探題にも補せられしかば、驕傲の心を生じ、且つ三管領四職等と相忌みて自ら安んぜず、終に關東の足利滿兼と結び、兵を擧げて義滿に抗す。應永六年、城を堺に築きてこれに據り、將軍家の討手を引き受け奮闘せしが、克たずして死す。其の弟に盛見、弘茂、持盛、持世あり。弘茂、兄に隨つて堺城を守りしが、城陥りて、足利氏に降り、義弘の舊領より四州を削りて防長二國を賜ひ、家名をつぎて本國に下る。此の時、盛見は、義弘の遺命によりて分國を堅守す。弘茂、下向するを以つて一時、銳を豊後に避け、還つて共に長門下

山に戦ひてこれを敗り、弘茂戦歿す。盛見家督を受け亦武勇の名將なりしが、永享三年、小貳と筑前に戦ひてこれに死す。弟持盛相續して亦豊後に戦歿し、持世其の後をつぎ、防長豊筑の守護となりしが、嘉吉の亂、重創を被りて死せり。是に於いて盛見の子教弘嗣ぐ、教弘左京大夫より大膳大夫に進み、始めて山口に築山館を造營す、因つて世に築山殿と稱す。其の子政弘は、應仁の亂、山名方に參陣して武名天下に隠れなく、亂止みし後も將軍の信任淺からず。政弘の子義興に至りては、國富み兵強く、關西一の大名なりければ、明暦九年、將軍義植、細川政元に逐はれて來奔し、偏に大内氏の忠勤を頼めり。義興これを翼戴して久しく時機を窺ひしが、永正五年、京都亂るゝと聞き、中國、四國、九州の兵を催し、義植を奉じて東上するに、細川高國先驅して忽ち京都を復す。義植入洛して再び將軍に任じ、義興管領代となる。三管以外の家にして此の職に補せらるゝこと實に異數とす。義興防長、藝石、豊筑、六國の守護職として左京大夫、從三位に進み、享祿元年、山口の居館に薨ず。其の子は則ち大貳、義隆なり。

上古時代



中古兩時代



大内氏極盛時代



義隆の時、大内氏は方に全盛の極に達し、所領の六州に備後を合せて七箇國の守護職を兼ね、富強よく双ぶものなし。加之、當時亂世にて群雄迭に起り、京都屢々兵禍の巷となる。獨り山口は小康を保ちたれば、一時内外人輻輳して、繁華云はん方なし。其の頃皇室の式微は實に甚だしく、後奈良天皇、大永六年に登極し給ひしかども、財政調はざりければ、大禮を行ふこと能はず。義隆これを嘆きて、其の資用を献じ、天文五年、其の大禮を擧げさせ給へり。功に由りて、義隆太宰大貳に任じ、九國を管掌す。又昇殿をも許され、勅使山口に下向して、旨を傳ふ。後累進して兵部卿に至り、從二位に進む。然れども、義隆人となり、文弱にして、戰國武將の器に乏しく、且つ累世の積威に乘じ、意滿ち心怠り、漸く華奢逸樂に流れて、政事武備を顧みず、嬖幸多く進み、禍内に生じて、終に家宰陶晴賢の滅ぼす所となれり。

陶氏はもと大内氏より分れたる巨族にして、其の祖弘賢、周防の陶を領し、因つて氏とす。子政弘、徙つて同國富田の夜市に居り、子孫世々周防の守護代となる。

興房に至り、國主義興を翼けて功最も多く、其の子則ち晴賢初名を隆といふ隆にして義隆に仕へ出頭たり、時に杉重矩と云ふ者深く晴賢を惡み、晴賢反逆の志ありと告ぐ。義隆大に警戒し、晴賢も亦頻りに其の冤を陳ず。既にして浮説大に起り、晴賢も困りて防備せしが、種々の難陳和解ありて事漸く静まれり。此の年晴賢遂に辭して富田に還り、若山城を修理し、密に反を謀る。義隆措いて問はず。中國治亂記に、この間の事を記して

然れども義隆は陶謀反とある事を實説とは思ひ給はざりけるにや會て討手の沙汰もなく、明る天文二十年亥の八月まで朝暮詩歌茶の會管絃亂舞にて公家衆と延年の御遊のみなり、

といふもの、蓋し真相ならむ。翌二十年八月義隆大友氏の使者を饜し能を興行す。夜に入り宴散じて忽ち注進あり、云ふ、晴賢謀反し、徳地防府兩道より攻め入ると、館内仰天し、狼狽名狀すべからず、將士群集するに、杉重矩、長門守護代内藤興盛、晴賢に通じて出頭せず、義隆遽に屋形を棄て、法泉寺に退く、隨ふ兵多く

逃亡す、賊兵來り攻むるに及びて支へず、義隆間道を長門に走り、仙崎より船に乗りて九州に赴かんとせしが、風浪起るに遭ひ、還つて深川の大寧寺に入る、賊追躡して來り攻め、義隆自殺す。冷泉隆豊、岡部隆景等これに殉す。公卿二條關白尹房、其の子左中將良豊、三條前左大臣公頼、持明院中納言基規等も、亦この難に遭うて害せらる。時に天文二十年九月朔日なり。是に於いて、晴賢、義隆の猶子豊後の大友晴英を迎へて主とし、名を義長と改む。次いで杉重矩の姦を覺りてこれを殺し、削髮して自ら全蓋と稱せしが、弘治元年九月大舉して毛利氏の嚴島宮尾城を攻め、元就の襲撃する所となりて敗死す。元就これより周防に入りて岩國、須々萬、若山諸城を取り、遂に山口に迫る。これより先弘治二年、山口は内亂ありて、其の兵燹に市街悉く焼土となり、居館も此の時焼失したれば、義長因つて鴻峯に築きて籠城せしが、要害全からず、且つ兵糧乏しきを以つて守ること能はず。終に長門府中に走つて自殺す。時に弘治三年四月三日なり。こゝに於いて、防長二國悉く毛利氏の有となる。

大内時代の文明

治所

大内氏の盛時に當り、其の治所たる山口は、京都に亞ぐ大都會にして、

其の名遠く海外に聞え、海東諸國記、日本國記、海國事略などいふ明代の諸書に

も見えたり、中國治亂記に

其頃京都亂にて帝位もをだやかならぬとて周防山口に内裏を建立し天子

も此方へ移し奉るべき由、大内殿けつこうありければ二條殿轉法輪三條殿

持明院中納言殿其外の公家衆皆山口へ下向あり花洛と申とも争が爰にま

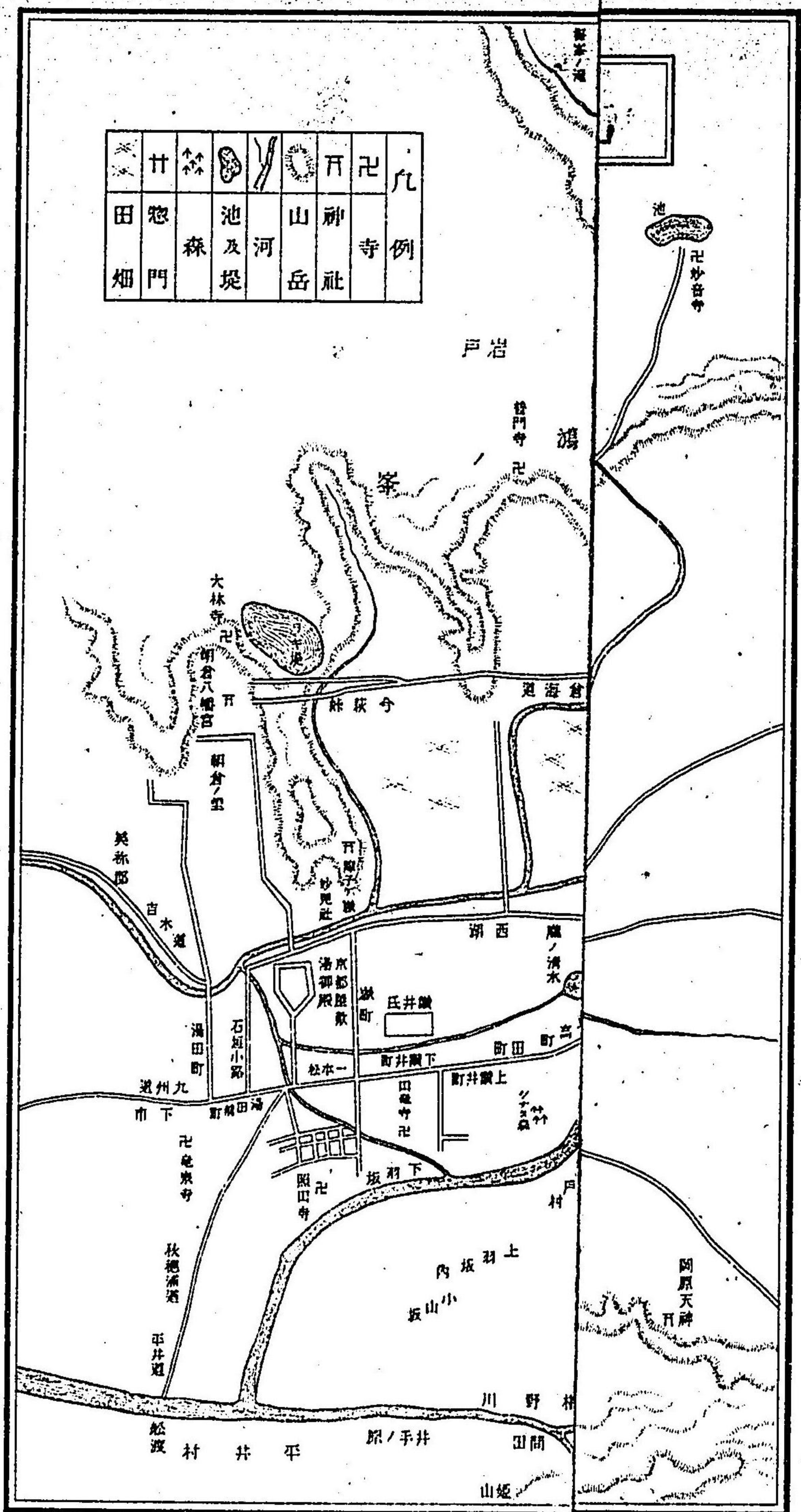
さるべき云々

とあるも、以つて當時を想見すべし、其の頃山口の戸口は如何程ありしか、陰徳

太平記に戸數二萬ありしといひ、天文年間こゝに滞在したる宣教師ザビエル

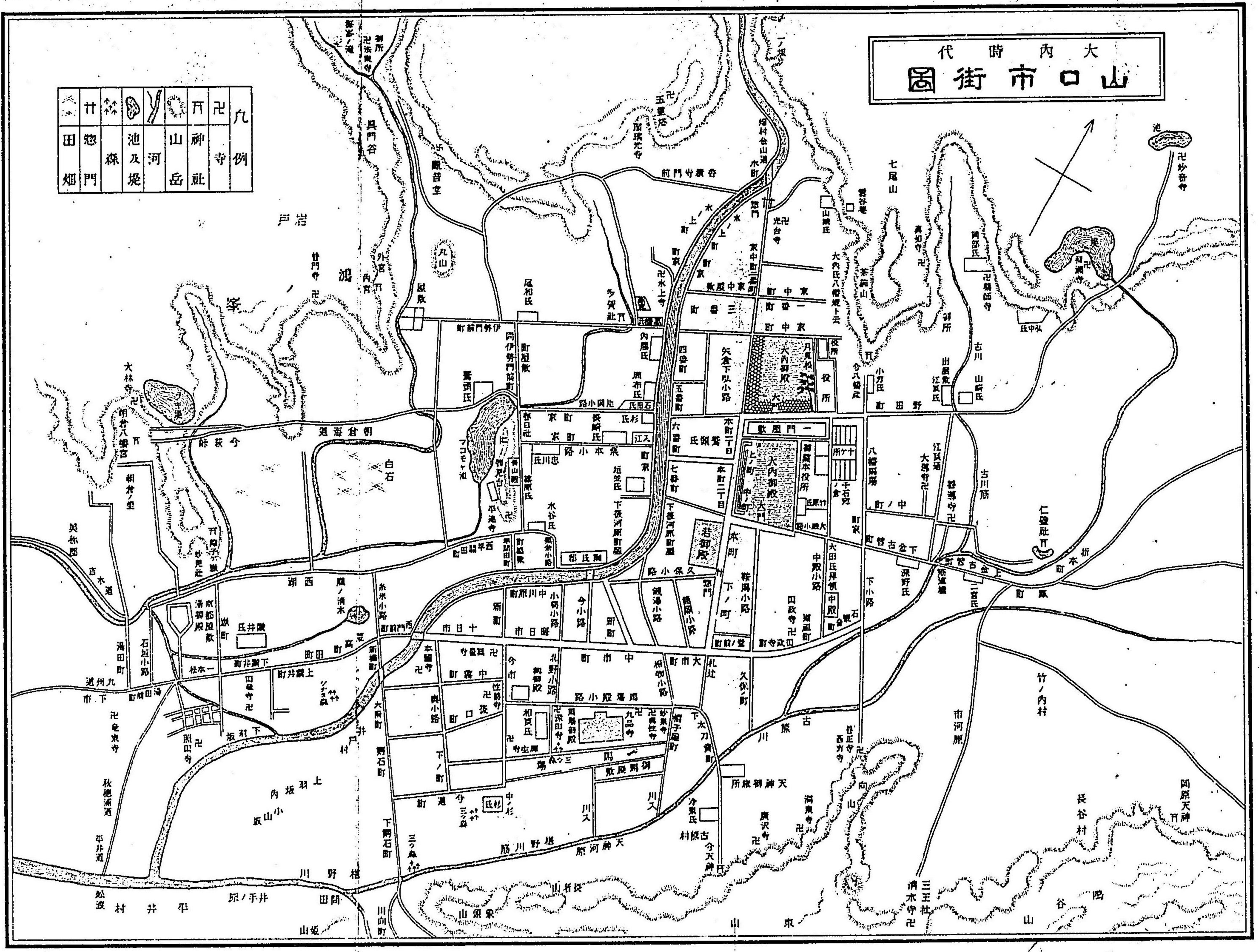
が書翰には一萬餘軒と記せり、其のいづれか是なるを知らずと雖、現時の戸數

に比して、遙に多數なりしこと亦疑ふ可からず、現存町筋の裏面には田島多く



大内時代
山口市街圖

九	記	山	池	田	竹
例	寺	岳	及堤	窓	田
				門	畑



相連なれるが、これ皆昔時人家稠密の地なりしなり。而して山口の町坊の専ら京都を摸したるものなるは、今猶ほ歴々證すべし。憶ふに、曠昔の山口はさながら小京都にして、月卿雲客も來り集ひ、文學技藝も一時盛に興りて、戰國の世ながら、此所には靜なる春秋を送りたり。

文學

大内氏は其の主世々文事の嗜み深く、又甚だ修禪の功を積める。盛見の如き者あり、勝りて和歌を詠みしは、義弘、持世、教弘、政弘、義隆等にて、義弘、持世は共に新續古今集の作者に列す。教弘は和歌を兵部卿師成親王南朝の島胤に山口に下向し法泉寺にて落飾し給ふに學び、殊に連歌を善くして、新撰菟玖波集の作者に入り、政弘最も志を歌道によせて、秀逸の作抄からず、其の頃連歌の名家、宗祇、宗長等も屢々山口に訪ひ來て、國主の雅筵に陪せり。宗長が宇津山記に

西國へも宗祇同宿して、大内古左京兆のあたりに一とせばかりありてそのつゝ、豊浦神功皇后の宮赤間が關隼人のわたりして云々と見え、永正六年に書きし東路の津登にも

宗祇周防の國より太宰府へ相伴ひて長門の國の山路を越え侍りしは神無月の始めなり

といへり。宗祇の筑紫道記には

文明十二の年水無月の初め周防國山口といふ所に下りぬ木高き一本頼むしるしありて陰の草木の露のなさけも茂くなりて云々
といひ伊勢物語山口抄の跋に、

此一冊者延徳之初防州山口にして此物語之講釋之後初心之輩所望之間書之然ハ形見之やうなる事共なるべし下略

宗祇在列

とあるを見れば宗祇の山口に來りしは文明延徳の兩度にして曾て宗長とも伴ひ、いづれも政弘の治世に來り訪へり。老葉集に、西國にくだりし時大内京兆築山にて云々、或は大内京兆の亭にてなど前書せる宗祇の發句、數多見ゆ、其の築山の屋形、京兆の亭は築山館のことにて、京兆は固より政弘を指せるなり、政弘も亦連歌に巧にして、宗祇が新撰菟玖波集は政弘のすゝめによりての撰なり

りと云ふ。

義隆に至りては尤も文學を好み、詞才に富み、其の事蹟傳ふべきもの甚だ多し。義隆、清原頼賢、小槻伊治を師とし、屢々京客僧侶と講筵を開きて經書を輪講す。又近習小座敷の者に四書五經を講釋し、或は頼賢の祖父環翠軒宣賢の四書五經諺解を、錢五萬匹を贈つて借寫せしことあり。天文三年使を朝鮮に遣はして五經正義を求め、同七年には更に朱子新註五經、一切經、並びに更漏器を求む。此の時朝鮮未だ朱子新註を傳へざりしが、程傳易、胡傳春秋等の書及び更漏器を得てかへれり。又嘗て紙を明國に送り、彼の地にて諸種の書籍を印刷せしめ、大内本又は山口本と稱して世に流布したるのみならず、大内家藏板の書籍も幾何かありしと見え、その三韻一覽は今残りてこれに天文八年三月義隆の序文あり、曰く

三韻一覽實於世之書也、凡遊藝工於詞之士、未嘗無取焉、信乎開卷三聲之字條、次於一紙之上、平仄之異、粲然於一目之中、古之人五行俱下、十行並下、之說未必

有論此不亦快乎余平素有意於勸人蓄之故不待其桐梓之朽腐乃復命工新其刊矣庶爲是州應本乎然而小其字於舊板冊子亦短其紙蓋所以備於勤于熟覽者之藏於巾箱携於袖間也若夫與舊本同施敷於世光飾藝苑潤色詞林則所謂徑寸之珠不失寶於其形之小者也矣

義隆又種々の娛樂を催し屢々犬追物猿樂能等を興行し一般士人にも觀覽せしめたりその他恒例節會の盛大なりしは氷上山二月會の儀式を見るも明かなり當時山口は學者の淵藪となり一面には外國人の來往もありて絶えず新智識を輸入したれば人民の生活も亦のづから高尚優美に赴きしならむ

工藝 當時山口の工業頗る發達し就中機織の如きは幾ど天下に比類なかりき蓋し正平年間大内弘世織業を治所に興さんと欲し京都の織工を招き下し糸米小路に工舎を建て絹布綾羅を織らしめしに起るその後應仁の亂京都の大舍人町兵燹に罹りて荒蕪の地となり工人四方に流離して其の業遂に中絶せるに唯山口は堺と共に機業益々盛なり彼の精好絹の如きは山口堺の織

工先づこれを製せし由工藝志料に見ゆ古文書に山口茜染紫染結鹿子等の名目見ゆるも亦技術の發達と趣向とを想像せしむ義隆又明國に託し家紋を織り出したる金襴其の他の物をも將來せしこと夥だしく大内桐金襴大内菱金襴義隆金襴などの稱あるものこれなり其の他陶器漆器等の製造も亦盛に行はれたり

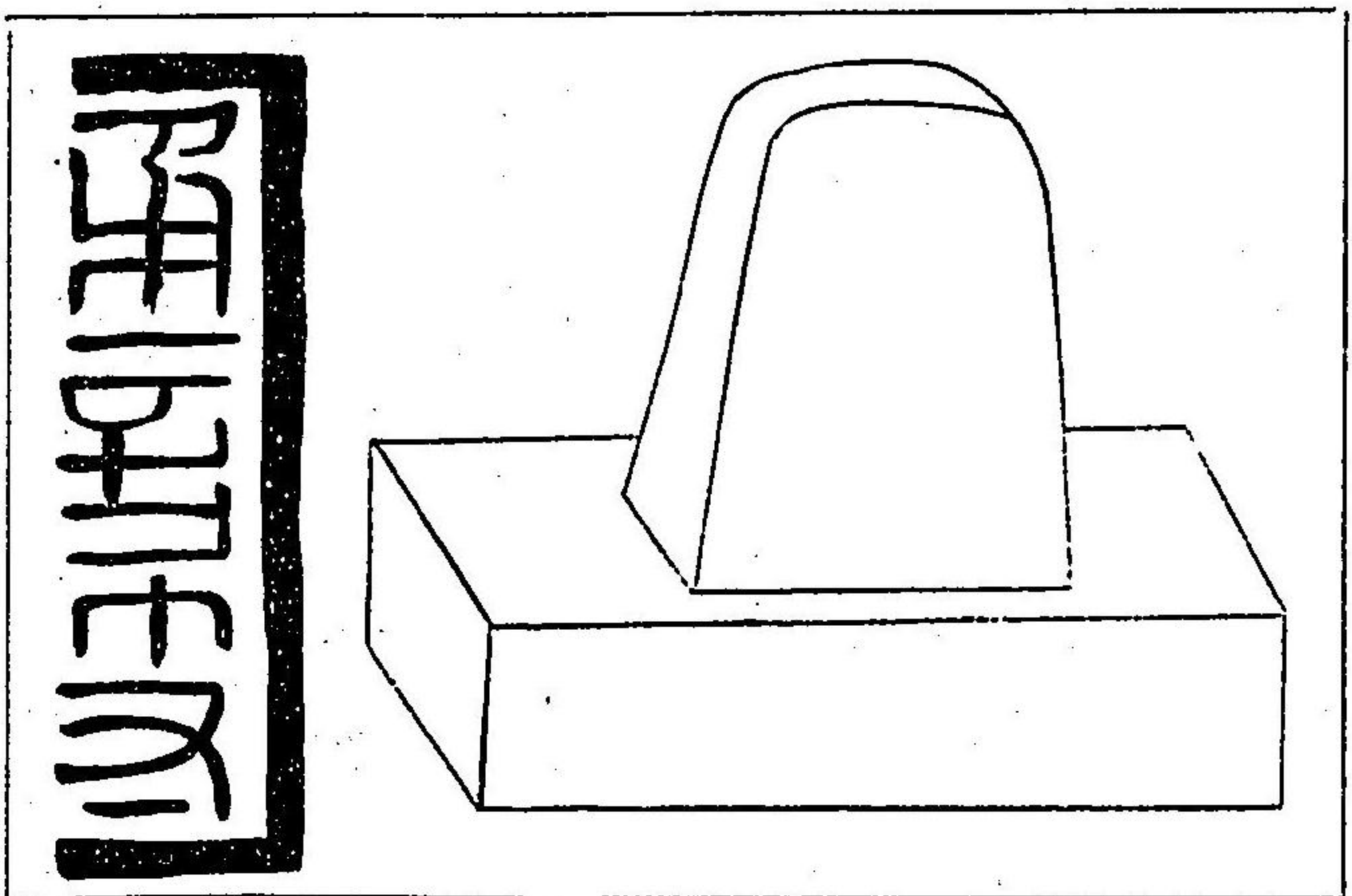
貿易 足利義滿明に臣事し其の貿易を開始するや明成祖勘合百道を與へ十年一貢とすこれより彼我の通交盛に行はれ又朝鮮との貿易もその頃より開けぬ義滿大内氏をして勘合渡船の事を主宰せしむ應仁前後に至り交通の路塞がりて倭寇復蜂起し勘合もその手中に剽奪せらる大内政弘これを獲て爾來運りに明朝鮮へ商船を渡すに及びて彼我の交通再び開けたり海東諸國記に曰く

大内殿多々良氏世居州大内縣山口後訓也管周防長門豊前筑前四州兵最强
略中世號大内殿至持世無子以姪教弘爲嗣教弘死子政弘嗣大内兵強九州以下

無敢違其令以係出百濟最親於我云々。

知るべし當時大内氏の勢力が夙に明國の認むる所となりて、最も親交せしことを、義隆の時に及んでは、國力の充實前代の比にあらず、こゝを以つて、獨りわれより貢船を渡すのみならず、彼國商人も亦た多く、渡來して互市を營み、海驛今の嘉川村深溝その一といふ、圖書編に翁哥里澳と録す即ち小郡港なり。居留地當時山口に唐人小路ありて、そのに外客館存せしといひ傳ふ。賑ひはいふも更なり、異邦の珍産奇物も、盛に外人によりて將來せらるゝに至れり。義隆記にいふ

都督在世の間より石見國大田の郡には銀山の出來つゝ寶の山となりければ異朝よりは是を聞唐土天竺高麗の船を數々渡しつゝ天竺仁の送物様々の其中に十二時を司るに依る晝の長短をちがへず響鐘の聲と十三の翠の絲ひかざるに五調子十二調子を吟ずると老眼のあざやかに見ゆる鏡のかけなれば程遠けれ共くもりなき鏡も二面候へばかゝる不思議の重寶五さま送けるとかや唐人の進上は數を盡して見えにけり云々

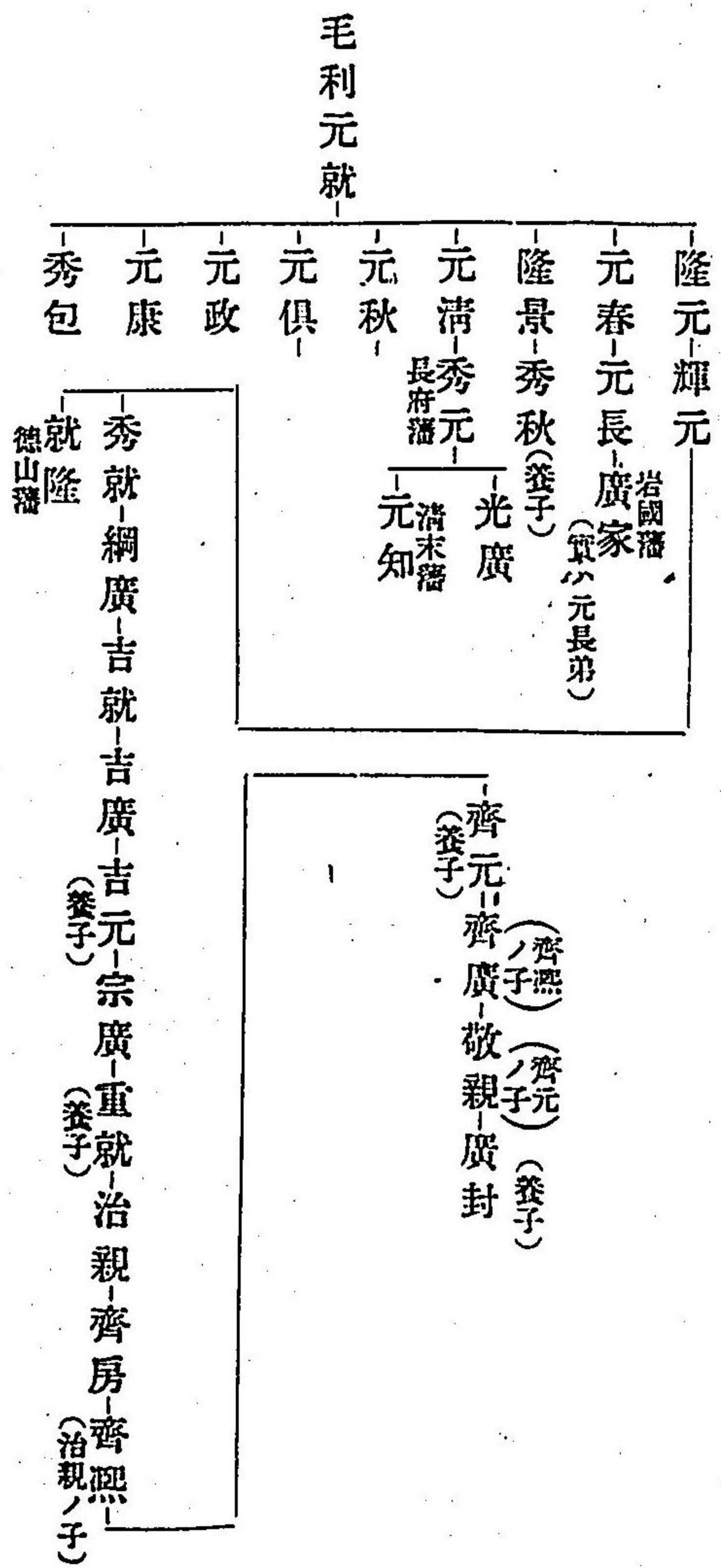


この所謂天竺人の送物といへるは、天文二十年に再び山口に來訪したる、宣教師フランシス・ザビエルが大内居館に伺候して、義隆に贈呈したる洋琴、時計などの類を指せること、其の書翰記に徴して又疑ふ可からず、唯幾何かの年數に差誤あるが如くなれども、亂世の時の傳聞として五年十年の相違あるは怪むに足らず、かくまで振ひし明との交通貿易も、陶氏の亂後は全く止みて又昔日の盛事なし、而してその勘合印の行方如何、蓋し登壇必究に、陶殿之亂、宮殿勘合俱燒、金印亦損一角、不知所歸とあるが如くなるべし、但し朝鮮の勘合印のみはなほ存して今毛利家に藏せらる。銅印、蓋材

四十三大内殿通信右符景泰四年七月各旁を刻し、側面に朝鮮國賜大内殿通信右符景泰四年七月各旁を刻し、側面に朝

第六章 毛利氏

毛利氏略系



毛利氏は、其の先平城天皇の皇子阿保親王に出づ。親王の長子音人、始めて大江
姓を冒す。子孫世々文學を以つて朝廷に仕へ盛名あり。七世匡房に至り、博覽多



藝を以つて聞え、嘗て源
義家に輔略を授く。匡房
の曾孫廣元一世の俊傑
にして、源頼朝を佐けて
天下を定む。其の子季光、
相模國毛利庄を食み、始
めて毛利氏と稱す。季光
の孫時親に至り、移つて
安藝の吉田に居る。時親
十世の孫を元就とす。元就は弘元の次子にして、兄興元、本宗を襲ぎたるを以つ
て、出でて多治比猿懸城主となる。幼にして器量あり。偶々興元歿し、其の子又天

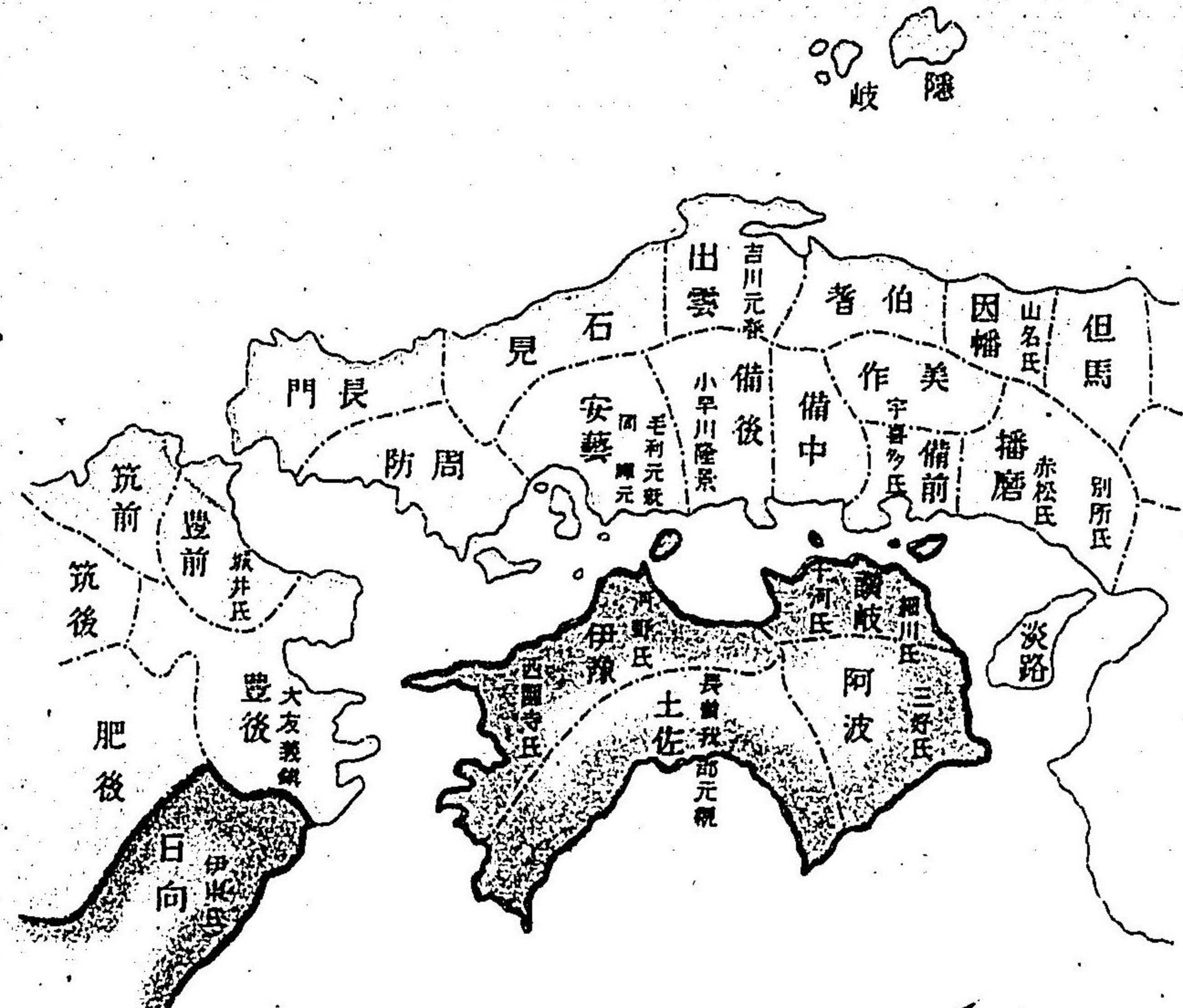
毛 利 元 就 竹 像

折せしかば、大永三年、元就吉田の郡山城に入りて、毛利氏の本宗を繼ぐ。時に年二十六。此の時に當り、周防に大内氏あり、出雲に尼子氏あり、兩者勢力共に強大にして相下らず。而して藝備の兩國は、豪族割據して統一なく、大内、尼子二氏の互に争ふ所となる。元就其の間に、漸次藝備の諸豪族を壓服せり。元就の次子元春出でて、吉川家を嗣ぎ、三子隆景、小早川家を嗣ぎ、共に毛利氏の羽翼となる。元春豪爽にして、善く兵を用ひ、隆景沈毅にして、謀慮あり、皆其の父に類す。こゝに於いて、毛利氏の兵鋒益々鋭し。

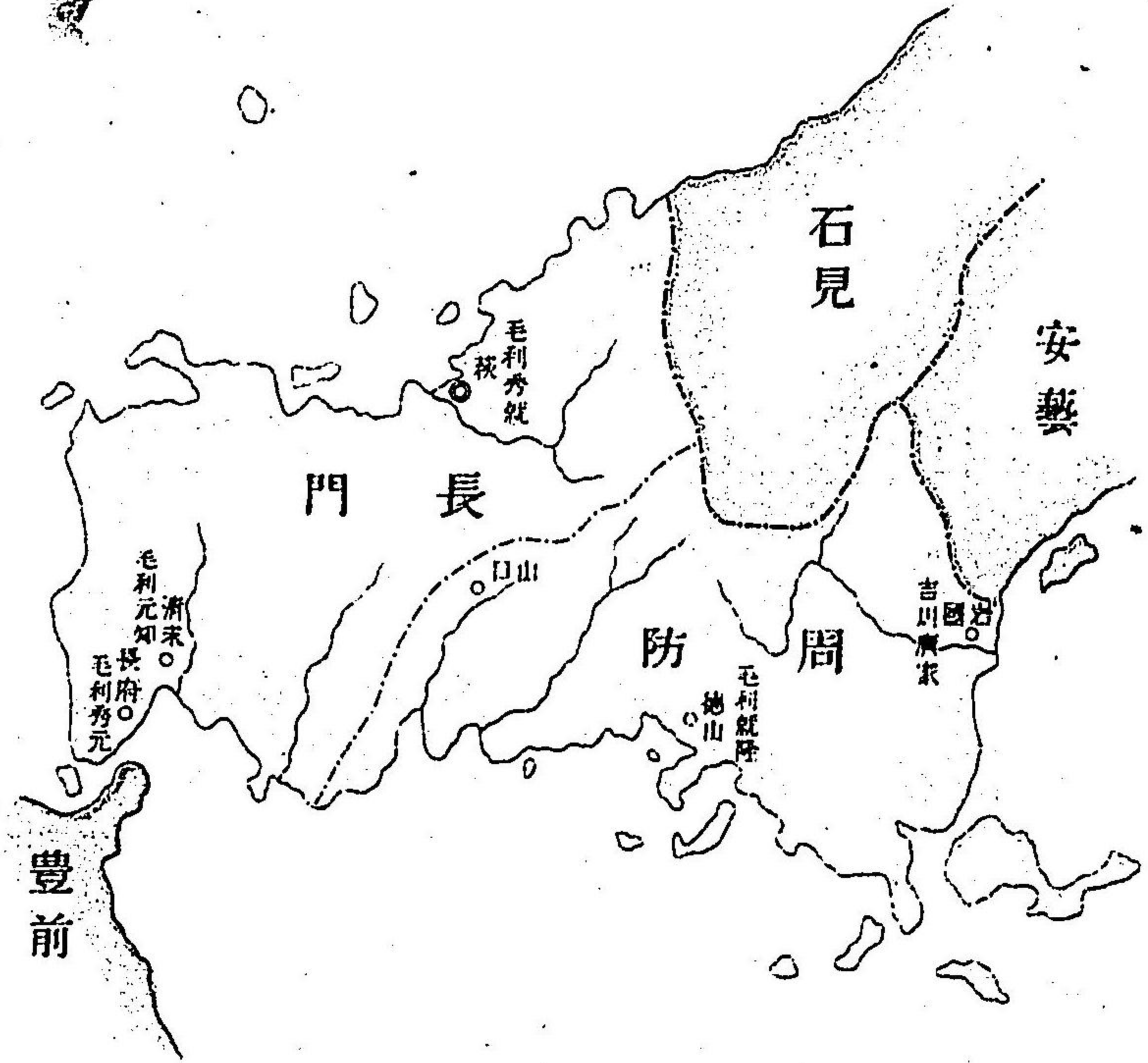
天文二十年、陶晴賢其の主義隆を弑するや、頻りに元就の來屬を促したれども、元就應ぜず。同二十三年、元就義兵を擧げて、陶氏を伐つ。晴賢乃ち防、長、石、豊筑の諸國に檄して、大兵を擧げ、弘治元年九月、自ら將として來り、侵す。是より先、元就城を嚴島有浦の宮尾に築き、反間を放つて、晴賢を誘致す。晴賢その謀を覺らず、海を渡つて、宮尾城を攻む。十月朔、元就襲ふて、大にこれを破り、晴賢自殺す。是に於いて、元就の威勢、關西に震ふ。大内義長、援を豊後大友氏に乞ひしが、大友氏應

ぜず。二年元就周防に入りて諸城を下し、三年山口に迫る。義長家宰内藤隆世と
 走つて長門の勝山城を保ちしが、毛利氏の兵追尾してこれを攻め、義長隆世自
 殺す。元就山口に入りて、弊政を除き、諸將を賞し、成を鴻峯、下關等に置き、凱旋
 す。かくて元就盡く大内氏の地を併せ、遂にこれより尼子氏を圖る。尼子晴久此
 の時叔父國久を疑ひて、其の精悍なる部下を併せてこれを殺戮し、兵力自ら衰
 弱せり。こゝに於いて、元就、元春をして石見を攻畧せしめ、永祿五年遂に全く之
 れを平定す。元就時に年六十六。七月元春、隆景等と共に大舉して尼子氏討滅の
 途に上り、行く々々諸城を下し、翌六年十月洗合山に城きて本營となし、諸軍を
 集めて尼子氏の富田月山城を包圍し、四方の糧道を絶ち、持久の策を設く。蓋し
 月山城は、山陰天嶮の名城にして、絶壁數百仞、急にこれを陥れんとすれば、徒に
 兵を損するを以つてなり。圍むこと二年、永祿八年城中漸く困弊の色あるを見
 るや、元就軍を分ちて三とし、三道より期を刻して突進し、戰激甚を極む。翌九年
 十一月、敵兵食共に盡きて、困苦益々迫り、尼子義久身を以つて降を乞ふ。元就こ

毛利氏版圖最大時代



元和以後 防長二國



れを許し、悉く城中の兵を出さしめ、義久兄弟を藝州に移す。元就富田を圍む。こ
と前後七年にしてこれを降し、全く出雲を定む。是より先、因幡山名氏、伯耆南條
氏、備前浮田氏、皆毛利氏に來屬せしを以つて、毛利氏勢力の及ぶ所、山陰山陽の
十三州に及べり。元就乃ち元春に命じて、山陰を掌り、隆景をして山陽を掌らし
む。この時に當り、南海に長曾我部氏、宇都宮氏、河野氏等あり。西海に大友、島津、龍
造寺諸氏あり。永祿十一年、伊豫亂る。元就河野通直の請を容れ、元春、隆景をして
四國に入らしめ、通直を援けて伊豫を定む。これより先、筑前の豪族高橋、秋月諸
氏、大友氏に叛きて、欸を毛利氏に納る。この年、元就、また元春、隆景をして兵を將
ゐて、豊前に入らしめ、十二年進んで立花城を圍み、大友義鎮の援軍と相拒ぐ。元
就、孫輝元を携へ、長門に往きて、聲援を與ふ。會々、故尼子氏の遺臣山中幸盛等、尼
子勝久を奉じて出雲に入る。大内義興、庶弟輝弘、亦兵を大友氏に借りて、秋穂よ
り山口に亂入す。元就乃ち二子をして師を班へさしめ、兵を遣はし、輝弘を逐ふ
てこれを殺す。翌元龜元年、元春、隆景共に輝元を輔けて出雲に入り、勝久を攻め

て、連日、その諸城を陥る。會々元就病に罹り、輝元隆景歸つてこれを省す。元就病漸く篤く、二年六月十四日、七十五歳にして郡山城中に卒す。元就武勇にして實戦に長じ、最も籌略に富みて變化神の如く、大小二百二十餘戰、未だ嘗て敗を取らず。是を以つて僅かに吉田三千貫の地より崛起して、四近の群雄を凌駕し、嶄然として覇を中國に稱するに至れり。平生心を治國に用ひて、士民を愛撫し、又文學を好みて詠歌をも能くせり。その生前子孫に訓ゆる所、詢々として至情を盡す。以つて其の人となりを想ふべし。殊に勤王の志深く、永祿年間正親町天皇御即位の資料を獻納し、其の後も屢々金銀山莊を獻じたり。是を以つて、救して元就及子隆元の官位を昇進せられ、菊桐御紋章をも賜はりぬ。元就の訃音傳はるや、尼子氏の兵勢頓に振ひ、四出抄略す。元春曰く、葬送の事隆景あり、我は殘賊を殛して以つて先考の靈を慰せんのみと、奮戰頗る力む。勝久支ふる能はず、城を棄て、京師に奔る。是に於いて雲伯の地、復平定せしが、勝久なほ織田氏の後援を得て、屢々因、但の地を窺へり。天正五年、信長、羽柴秀吉を播磨に封じて、山

陰山陽を圖らしむるや、勝久、山中幸盛と上月城に據りて、秀吉の前鋒となる。元春、隆景、浮田氏の兵を合せて上月を圍む。秀吉來りて救ひしが、力爭すべからざるを知り、城を措いて去る。上月城陥り、勝久自殺す。幸盛出でて、降り次いで殺さる。尼子氏の族遂に滅ぶ。十年、秀吉大軍を率ゐて備中に入り、高松城を圍み、河邊川の水を引き、これに注ぐ。城將清水宗治、舟を造つて出戦す。輝元、元春、隆景と赴き、援ひ兩軍相持して未だ戰はず。而して高松の落城、旦夕に逼る。毛利氏、信長の自ら來ると聞き、これに先ちて一戰せんとす。安國寺惠瓊、これを憂ひ、兩軍の間に奔走して和議を謀り、自ら城中に入りて宗治に諭す。宗治曰く、我れ一死以つて和を計るべしと。城を出て、舟中に自殺す。毛利氏爲めに哀を發す。遂に盟約を結び、和を講じ、南は河邊川を以つて、北は伯耆の八橋川を以つて界と爲し、質を交換して、東軍解け去る。偶々京師の變報至り、秀吉これを毛利氏に告ぐ。元春の子元長等追撃せんと欲す。隆景獨りこれを不可として止み、和遂に成を告ぐ。秀吉深くこれを徳とす。

天正十四年秀吉島津氏を伐つや、毛利氏をして豊前より軍を進めしむ。元春、隆景と小倉城を抜き、香春岳に逼る。偶々元春痘を病みて、この年十一月小倉陣營に卒す。年五十七。元春幼より元就に従ひて兵馬に習ひ、攻城野戦七十餘度、多くは全勝を得たり。人となり剛直、人の下風に立つを恥づ。秀吉其の勇を重んじ、島津氏を伐つに當り、元春に請うて先鋒となす。曰く、事成らば封ずるに筑前を以つてせんと。元春固より秀吉の驅使する所となるを羞ぢ肯んぜず。秀吉黒田孝高をして強ひてこれを促さしむ。輝元隆景亦切に慫慂す。元春已むを得ず、怏々としてこれに従ふ。卒するに臨み、後事を二子元長廣家に遺囑し、言私に及ばず。廣家喪事を奉じて安藝に還る。元長、隆景と共に香春を襲ふて之を下す。翌十五年、羽柴秀長豊後より薩摩に向ふ。隆景、元長これに従ひて、轉戦頗る功あり。次に秀吉至り、島津氏和を請うて九州悉く平定す。これより先き、秀吉、元長を筑後に封ぜんとして未だ發せず。元長病に罹り、六月俄に日向に卒す。歳四十一。元長武勇能く家聲を繼ぎ、又好んで書を讀み、佛籍に通じ、兼て和歌を善くせり。この

年秀吉、大に功を論じ、隆景に與ふるに筑前一國と筑紫氏の舊領とを以つてす。隆景乃ち入りて名島に治す。力めて窮乏を恤み、禁令を寛にし、治教を修む。筑前の士民始めて化に嚮へり。かつて饑饉を名島の城中に興し、士庶をして入つて學ばしむ。時に亂離日久しく、殺伐俗を爲せしが、こゝに於いて、邊土始めて絃誦の聲を聞き、德化風を移したりといふ。

天正十六年、輝元從四位上に叙し、參議に任ず。ついで從三位權中納言に至れり。十九年居を已斐城に移し、名を更めて廣島といふ。文祿元年、征韓の役起る。輝元、浮田秀家と總督となり、隆景、廣家等亦軍に従ひ、屢々殊功あり。二年碧蹄館の戰、隆景明將李如松が新勝の勢を挫きて、中外の眼を驚かせり。これより先、輝元子なし、叔父、穗田元清の子秀元を養ふて嗣子とす。この年輝元陣中に病む。秀吉乃ち秀元に命じて赴き代らしむ。時に年甫めて十四。翌年秀元釜山に着して師を督す。晋州の役功あり、秀吉賞して遙に感狀を授け、奏して從三位に叙し、參議に任ず。慶長二年秀元また征韓の命を受け、小早川秀秋と共に師を督す。

此の年六月、隆景薨す。これより先、文祿四年、隆景從三位に叙し、權中納言に任じ、清華に準ず。封を義子秀秋に譲りて、備後三原に退隱し、吟誦自適。こゝに至りて世を終ふ。年六十五。遺言して、輝元を誠め、慎みて四境を保ち、外事に關はること勿らしむ。隆景秀吉に重んぜられ、常に其の大計に參す。己れを持すること慎密にして、讒間嘗て入らず。その薨するや、秀吉歎じて曰く、われ國の鎮を失ふと。慶長三年、秀吉薨じ、子秀頼嗣ぐ。毛利氏、徳川、前田、上杉、浮田四氏と共に後事を託せられ、五大老と稱す。五年、關ヶ原の戰起るに及び、輝元、秀吉の遺命を奉じ、大阪城に入りて秀頼を輔佐す。關ヶ原の役後、家康、毛利氏の封を削りて、防長の二國三十六萬餘石を領せしむ。これより先、輝元既に秀元を養ふて子とせしが、後、秀就、就隆の二子生る。こゝに於いて秀就をして封を襲がしめ、自ら薙髮して宗瑞と號す。秀元退いて長府に居り、國政を攝りしが、後、政を秀就に還す。子孫世々長府に居り、五萬石を食む。吉川廣家は關ヶ原の役、宗家に盡す所あり。是に於いて、岩國六萬石に封ぜらる。後、秀就、其の弟、就隆に徳山五萬石の地を與へ、秀元亦、次

子元知に一萬石を分與して、清末に住せしむ。

慶長八年、輝元藝州より入國して、萩に至り、地を指月山に相して、城櫓を造營す。翌年十一月、指月山の牙城成る。輝元、山口より移つてこれに居る。寛永二年四月、輝元萩城に薨す。年七十三。輝元人となり、豪邁にして、夙に中國に覇たり。毛利氏が防長二州の主として、猶ほ永く一方に雄たりし所以は、元就の餘烈に因ると雖も、また輝元、晩年經營の勞多しといふ。この年、吉川廣家卒す。年六十五。慶安三年、秀元、江戸に卒す。年七十二。秀元、性穎敏、文武を兼ね、將軍家光、深く其の才を愛し、屢々召して古今の事蹟を談論せり。

慶安四年、秀就卒す。子綱廣嗣ぐ。綱廣、深く意を政治に注ぎ、榎本就時を任用す。就時、識量拔群、夙に毛利氏の式目規格、一定の書なきを憂ひ、舊制を參酌して、制法三十三箇條を定め、萬治元年、これを頒布せり。世にこれを萬治制法、或は萬治條目と稱す。實に毛利家一代の大典とす。爾來、每歲正月十一日、これを讀知せしむる例あり。これより先、藩の公廩頗る困迫して、不虞の準備なし。就時執政たるに

及び、財政その宜しきを得て、毎歲贏餘あり、これを内庫に納めて準備金とす、其の後世々これに倣ふ、天和二年綱廣、家督を吉就に譲りて隱居す、綱廣性果敢にして英氣あり、文武諸藝を好み、藩士の器局ある者は別に俸を與へ、一藝ある者はこれを擧用す、居常徳川氏の所置に平かならず、江戸に在るや、多く病に託して登營せず、幕府その越前中納言の女の出なるを以つて強ひて問はず、性酷だ牛を愛し、參勤交代にも駿牛を函薄中に従ふ、世人嘲りて長門牛と云ふ、蓋しこれに籍りて自ら韜晦せるなり、國老等幕府の間ふ所とならんことを虞り、相議して隱居を勸むるに至る、元祿二年江戸に卒す、この年吉就亦江戸に卒し、子吉廣嗣ぐ、吉廣寶永四年に卒し、養子吉元其の後を嗣ぐ、

吉元は長府藩主毛利綱元の子にして、母は池田光政の女なり、性學を好み、享保四年始めて明倫館を建設す、毛利氏の文學は吉元に至りてその基礎を成せり、享保十六年吉元卒し、子宗廣嗣ぐ、

宗廣亦幼より學を好み、教を山縣周南に受く、父の志を繼ぎて屢々學館に入り、

學生を獎勵す、明倫館の制この時に大成して、人材輩出せり、寶曆元年菽に卒す、子なし、長府藩主毛利匡敬入りて襲ぎ、名を重就と改む、

重就亦學を好みて器識明敏、文武を振興す、儉素自ら奉じ、富國を以つて志となし、治績大に擧る、就中寶曆十三年始めて撫育方を置き、不虞準備金を益々増殖せしめたるは、謀猷の尤も大なるものとす、手書して子孫及び有司を誡む、曰く、心ある者は言はずして余が此の擧を知らんと、後年に至り、毛利氏が天下に率先して國事に奔走し、而して財政に窮乏を感ぜざりし所以のもの、偶然にあらざるなり、寛政元年、重就三田尻に卒す、重就の後治親、齊房、齊熙、齊元を経て齊廣に至る、

齊廣、稟性聰明、幼より學を好む、年甫めて十七、貞觀政要の講義を聽き、太宗の政治を慕ひ、熟讀反覆せり、十九歳の時、大學頭林衡の門に入り、教を受く、衡、その學識を歎賞す、その卒するや、衡哀悼して天下の不幸といへり、天保七年卒す、歳二十三、著書に事斯語、貞觀政要章旨、與人論、儉吝論、述志錄、言志論等數多あり、敬親

その後を嗣ぐ。

敬親は齊元の一子にして、齊廣の嗣子と爲り、天保八年立つて封を襲ぐ。時に年僅かに十九、資性聰明にして忠誠。繼立の時既に齊熙、齊元、齊廣の喪事相繼ぎ、且つこれより先、凶荒の災、荐りに至る。敬親其の後を承けて、日夜焦思し、質素儉約の令を布き、勵精治を圖る。特に賢才を舉用して、大に文武を恢張す。天保十四年、羽賀臺に大閱して志氣を振興し、嘉永二年、明倫館を再造して、和漢洋各種の學科を設け、人材の陶冶を計る。海防の議起るに及び、要地に砲壘を築き、戍卒を増加して警備を嚴にせしむ。又製鐵所を設けて、大砲を鑄、船艦を造り、終に兵制を改革して、六十餘大隊の銳兵と、十餘隻の軍艦とを備ふるに至れり。かくて元治慶應の間、京師の變、馬關の擧、四境の役、その他多くの國難に當り、敬親忠誠を誓ひて終始渝らず。各藩に率先して勤王の大義を唱へ、皇政一新の鴻業を贊襄す。敬親子なし、徳山藩主毛利廣篤の弟廣封を養子とす。廣封、後、名を元徳と改む。國歩多難の際、父敬親を佐けて王事に盡瘁せり。

第七章 明治維新と防長二州

尊王攘夷

嘉永六年、合衆國の使節彼理、艦隊を率ゐて浦賀に入り、國書を呈し、通商を求む。次いで露、英、佛、蘭の諸國も來つて要求する所あり。時に昇平日久しく、幕府狼狽して急に沿海の兵備を修め、又勅准を待たずして互市を許し、條約を締結せり。是に於いて尊王攘夷の説大に起り、幕府の專横を憤慨する者東西に奔走して、海内紛擾す。幕府志士數十人を捕へて刑に處す。所謂安政の大獄これなり。長藩の士、吉田松陰も亦此の厄に遭ふ。而して幕府の威信漸く、人心を離る。萬延元年、櫻田の變後、幕府は皇妹和宮を將軍家茂に尙して、以つて公武の一致合牀を計れり。

この時に當り、藩主敬親、世子廣封と共に、至誠邦家に盡さんとし、諸臣を戒飾し、時艱に備ふ。嘉永癸丑、幕府諸藩に命じて、江戸灣を戍らしむ。敬親兵を武州大森

に派す、鎧仗鮮明、旗幟甚だ整ふ。諸藩其の備あるに服す。文久元年大に幕府に建言して時勢を論ず、曰く、將軍先づ朝旨を遵奉し、上下一心、衆議同決して以つて外國を待つべしと。此の年更に直目付長井雅樂を遣はして公武の間に周旋せしむ。幕府老中等雅樂を延いて事を謀る。雅樂曰く、方今の策は開港に在り、鎖國にあらずと。その見大に幕旨に合ふ。閣老等乃ち内旨を授けて京都に説かしむ。二年四月、雅樂京都に上り、書を大納言中山忠能に呈して持論を具陳す。此の時、諸藩慷慨の士、闕下に幅濶して、盛に尊攘の議を唱へ、交々雅樂を咎む。雅樂その言の容易に行はれざるを測り、命を待たずして東歸す。長藩少壯の志士、これを大津に要撃せんとして果さず。この月廣封、江戸より國に就かんとして、京都を過ぐ。朝旨留めて、釐下を鎮撫せしむ。且つ問ふに、雅樂が嘗て呈せし書中、朝議を誹謗するが如き辭あるを以つてす。蓋し敬親の意に出づるを疑ふなり。敬親大に驚き、雅樂が専恣を責めて歸國謹慎せしめ、尋いて入朝して衷情を分疏す。開港の議、固より敬親の意に出づるにあらざるを以つて、事即ち氷解す。然れども、

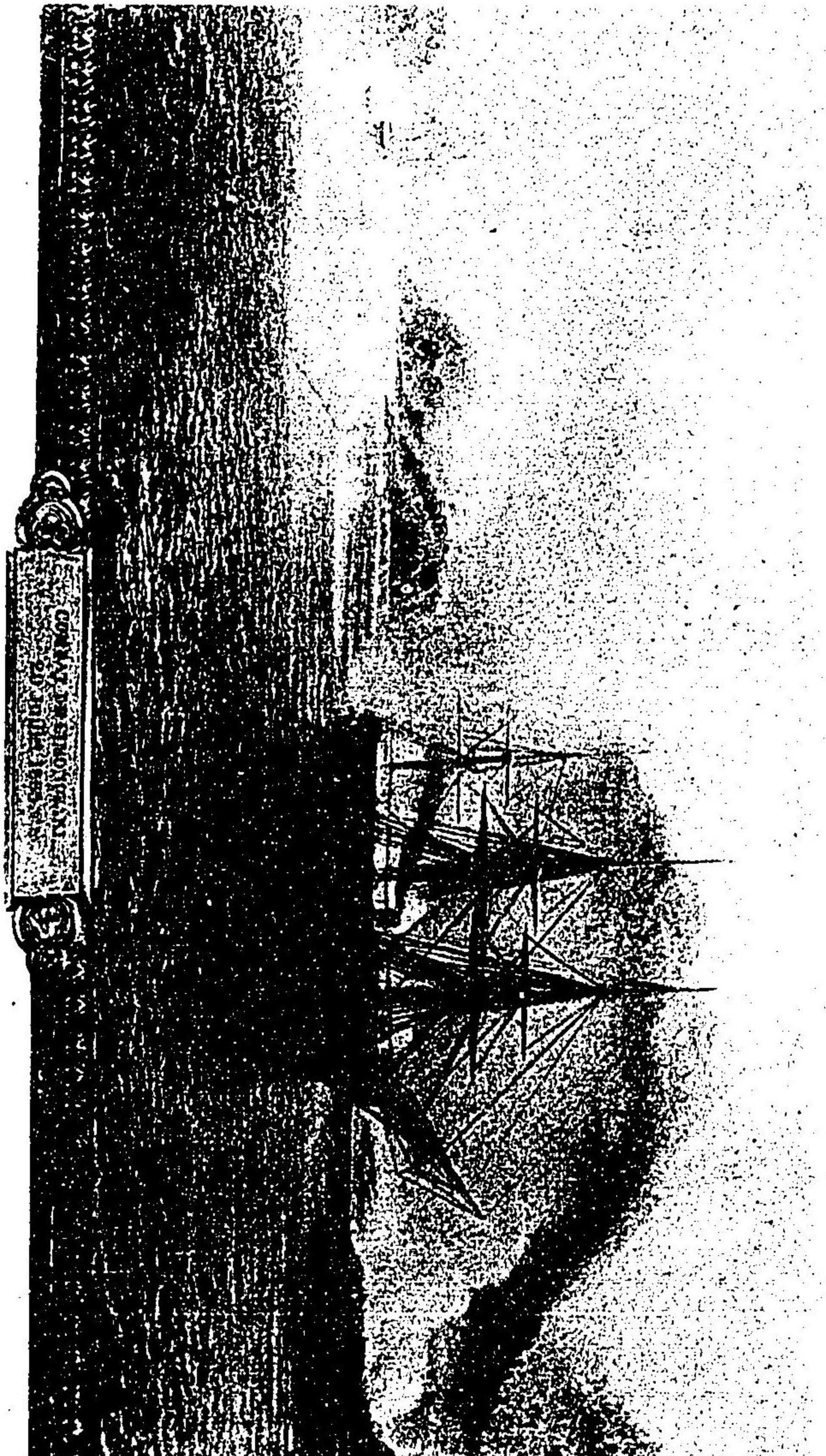
なほ雅樂に自盡を命じて、叡慮を惱まし、罪を謝せしむ。これより先、敬親父子公武の間に在りて力を周旋に竭すもの久し。こゝに於いて中山大納言等朝旨を傳へて曰く、父子力を皇國に盡す、深く誠意を感ず。父子の中一人は滯京し、一人は東上すべしと。八月廣封又江戸に赴き、閣老及び尾越土諸藩の間に往來し、又勅使三條、姉小路二卿と背ひ謀りて聖旨を幕府に傳ふ。翌文久三年三月、將軍家茂勅を受けて上洛す。廣封亦隨ひて京都に上る。

この年敬親治所を山口に移す。蓋し萩の地は二州の邊隅に在り、魚鹽の利ありと雖、山口の地の號令四達の便あるに若かざればなり。

此の時に當り、京都は尊攘の説益々勢を得。志士の徒、公武合體の不利なるを見て、慷慨激烈の行爲に出づる者多し。二月十一日、長藩士久坂玄瑞、寺島忠三郎、肥後入森武兵衛等、關白家に到りて鎖攘實行の期限を刻せんことを乞ふ。三月將軍家茂の入朝するや、朝廷志士また切りにこれに迫る。四月二十日、遂に勅あり、五月十日を以つて攘夷の期と定むと。因つて遍く列藩に布告す。

攘夷の期日定まるを以つて、此の月二十一日、廣封京都を發して西還戰備を修す。久坂玄瑞、入江九一、山田市之丞等三十餘人直ちに歸藩して下關に赴く。此の舉を聞きて會する者忽ちにして數千人。是に於いて本陣を細江光明寺に設けて、前田、壇浦、杉谷、龜山、細江等の諸砲臺を修め、海峽を扼して専ら開戦の準備を爲す。既にして五月十日、攘夷勅諭の期日となりぬ。長藩は海峽の崖上に奉勅の旗幟を掲げ、諸砲臺には數門の砲を備へ、且つ庚申、壬戌、癸亥の三艦を以つて沿海を警備せり。此の日、偶々米船ペンブローク號下關を通過す。庚申、癸亥の二艦夾撃してこれを走らす。これを攘夷の先驅となす。二十三日、佛國軍艦キヤンチヤン號西に通過す。諸砲臺及び軍艦合撃して損傷を與へ、其の小舸一隻を奪ふ。二十四日、蘭船メジユス號東に通過す。庚申、癸亥二艦これと應戦す。六月朔日、米艦ワイオミング號來襲し。庚申、壬戌兩艦の間に突入して之を砲撃す。庚申、其の破る所となりて沈没し。壬戌、暗礁に膠す。越えて五日、佛の水師提督ジョーレンの率ゐるタンクレ號、セミラミ號の二艦また來つて下關を襲ふ。砲臺これに應ず。

文 久 三 年 下 關 戰 争



佛入陸に上りて銃火を交へ、わが損傷少なからざりしが、長軍遂にこれを撃退せり。十五日、天皇勅書を敬親に賜ひて攘夷期限を愆らざるを嘉尚せらる。而して幕府は使を遣はしてこの舉を詰れり。此の數度の戰に於いて外人は何れも長藩砲手の技巧妙迅速なるに驚きしといふ。然れども此の役、諸砲臺多く破壊せられ、軍艦はその撃沈する所となりて善後の策頗る難し。是より先、高杉晋作、故ありて家に屏居す。敬親則ちこれを起して下關に赴かしむ。晋作建議して奇兵隊を編成し、又佐賀藩に交渉して大砲等を購ふの途を講ぜり。

七卿西下

長藩は幕府の逡巡して攘夷の約に違ふを非難し、この年六月十八日、敬親國老益田右衛門介を京都に遣はし、父子連名の書を齎して建白せしむ。其の書に曰く、

一、外夷へ對し既に兵端を開き候に付、乍恐御親征石清水へ出御し、諸國へ勅

を降し給ひ、勤王の兵を召集められ、御指揮を以て掃攘仰付られ、大樹公に於いても掃攘の事業在せられ度候事(以下略之)

と。朝議これを容れ、七月十三日大和に行幸し、畝傍山陵を拜して、親征を議せんと詔す。此の時會津藩主松平容保、専ら親征の不可を説き、諸侯これに和する者多く、島津氏の如き、これを以つて、長藩が浪士を煽動し禁闕を擾すものとせり。而して公卿中にも親征を悦ばざる者多かりしを以つて、朝議茲に一變し、長藩人の入京を禁じ、其の宿衛を罷む。この時攘夷の議に賛する公卿亦朝に安んずるを得ず、三條實美、三條西季知、東久世通禧、壬生基修、四條隆謨、錦小路頼徳、澤宜嘉の七卿皆長門に走る。時に文久三年八月なり。是に於いて攘夷論者は勢力を朝廷に失ひ、公武合躰の主義再び行はれんとす。浪士等これを見て憤激に堪へず、平野國臣等は、澤宜嘉を奉じて、但馬生野に兵を起す。長藩士もこれに加はる者ありしが、皆敗亡し、宜嘉復走つて長門に潜匿す。翌年春錦小路頼徳病んで下關に歿せり。

四境戦争、第二回外艦砲撃

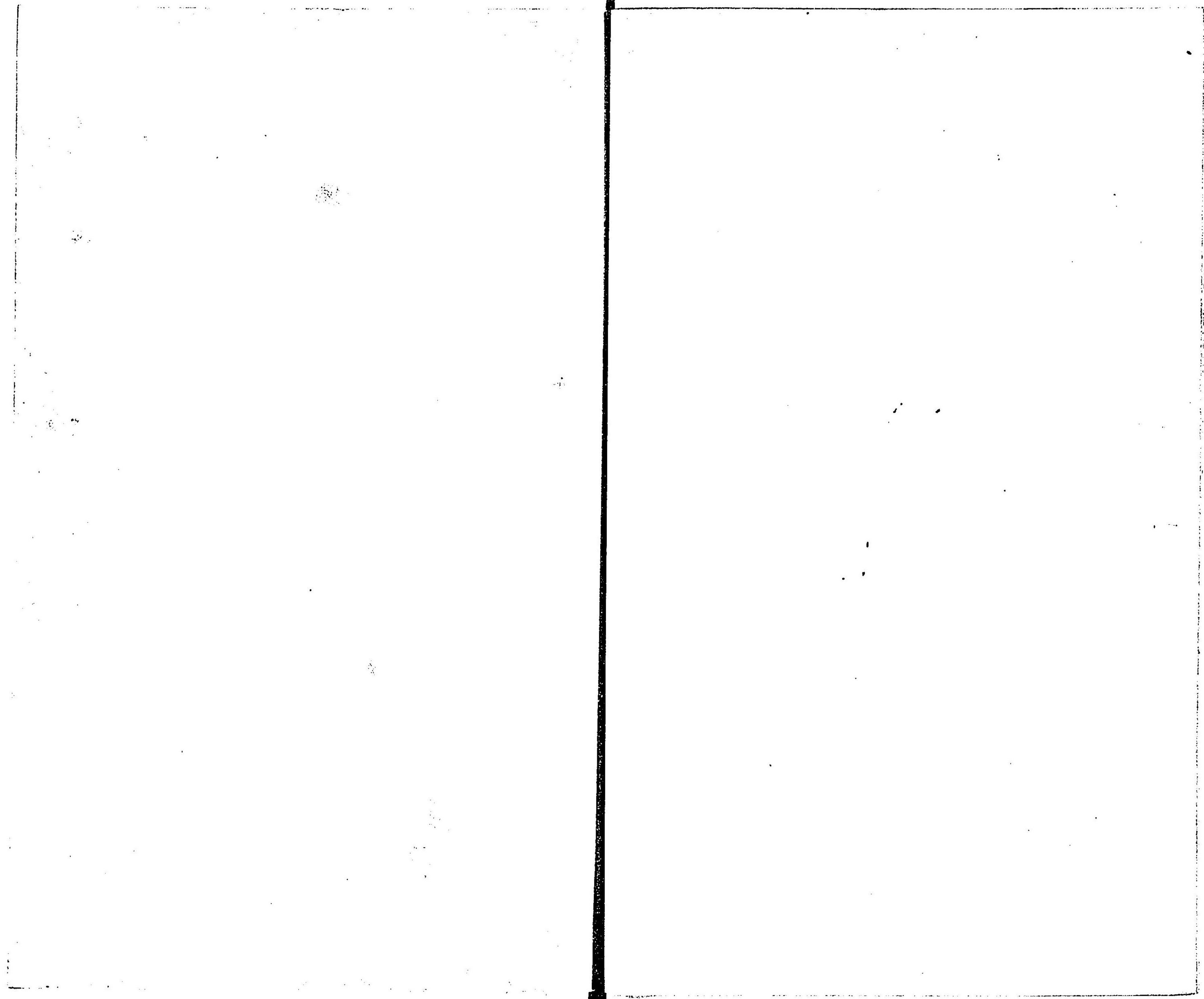
ささに朝議一變して、長藩は入京を禁ぜられしかば、敬親累、疏冤枉を哀訴す。皆省せられず、因つて藩士吉田年麻呂等數人、京都に入り、三條客舎に潜匿し、朝紳に游説して將に爲す所あらんとす。會藩の曉る所となりて、襲殺せらる。是に於いて久坂玄瑞、寺島忠三郎、來島又兵衛、入江九一等憤慨自ら禁ずる能はず、その部下を率ゐ、告げずして東上す。敬親その暴舉あらんを慮り、元治元年五月國司信濃を京都に遣はして鎮撫せしむ。既にして信濃の力或は足らざるを慮り、更に益田右衛門介を差遣す。次いで廣封自ら闕下に哀訴せんとて、七月三田尻を解纜せしが、讃岐に抵り京都の變を聞いて引き還る。これより先、久坂玄瑞等筑前人眞木和泉と三百人を以つて山崎天王山に陣し、來嶋又兵衛等七百人、嵯峨天龍寺に入り、益田右衛門介天王山に在りて鎮撫す。時に福原越後も亦命を帯び、江戸に赴かんとして伏見に在り、相議して哀訴の書を奉る。徳川慶喜越後を

召して藩内脱走の徒を悉く歸國せしめ、獨り越後は從者數人と伏見に滞在し、謹慎裁許を待つべきを命ず。是に於いて衆奮激し、一舉當路の壅塞を除かんと決す。三老、百方これを鎮むれども聽かず。終に右衛門介山崎を守り、越後官道より、一隊を率ゐて北上す。國司信濃天王山の兵を率ゐて中立賣門に向ひ、來島又兵衛蛤門に向ふ。蛤門の戦最も激烈にして、又兵衛奮闘會桑二藩の兵を破り、諸藩の兵披靡す。薩藩事の急なるを視て馳せ至り、横に長軍を撃つ。又兵衛終に丸に中りて殞る。諸軍遂に潰ゆ。久坂玄瑞等戦死し、三老等營を抜いて西歸罪を待つ。この戦は長藩、禁関に對して發砲せしことゝて、事態容易ならず、廷議長藩の罪を問ひ、敬親父子の官位を褫ひ、征長の勅を將軍家茂に下し賜ひき。

この年八月四日、英佛米蘭の聯合艦隊下關に來寇す。これ先年長藩が海峡通航の外船を砲撃せし所以を問はんが爲めなり。長軍砲火を開いて應戦す。聯合艦隊は總數十七隻、水兵凡三千人、陸兵二千人より成る。長藩よく戦ひしと雖、敵勢頗る熾んにして上陸砲臺を占領せり。偶々上國の變報荐りに至るを以つて、長

爭 戰 關 下 年 元 治 元





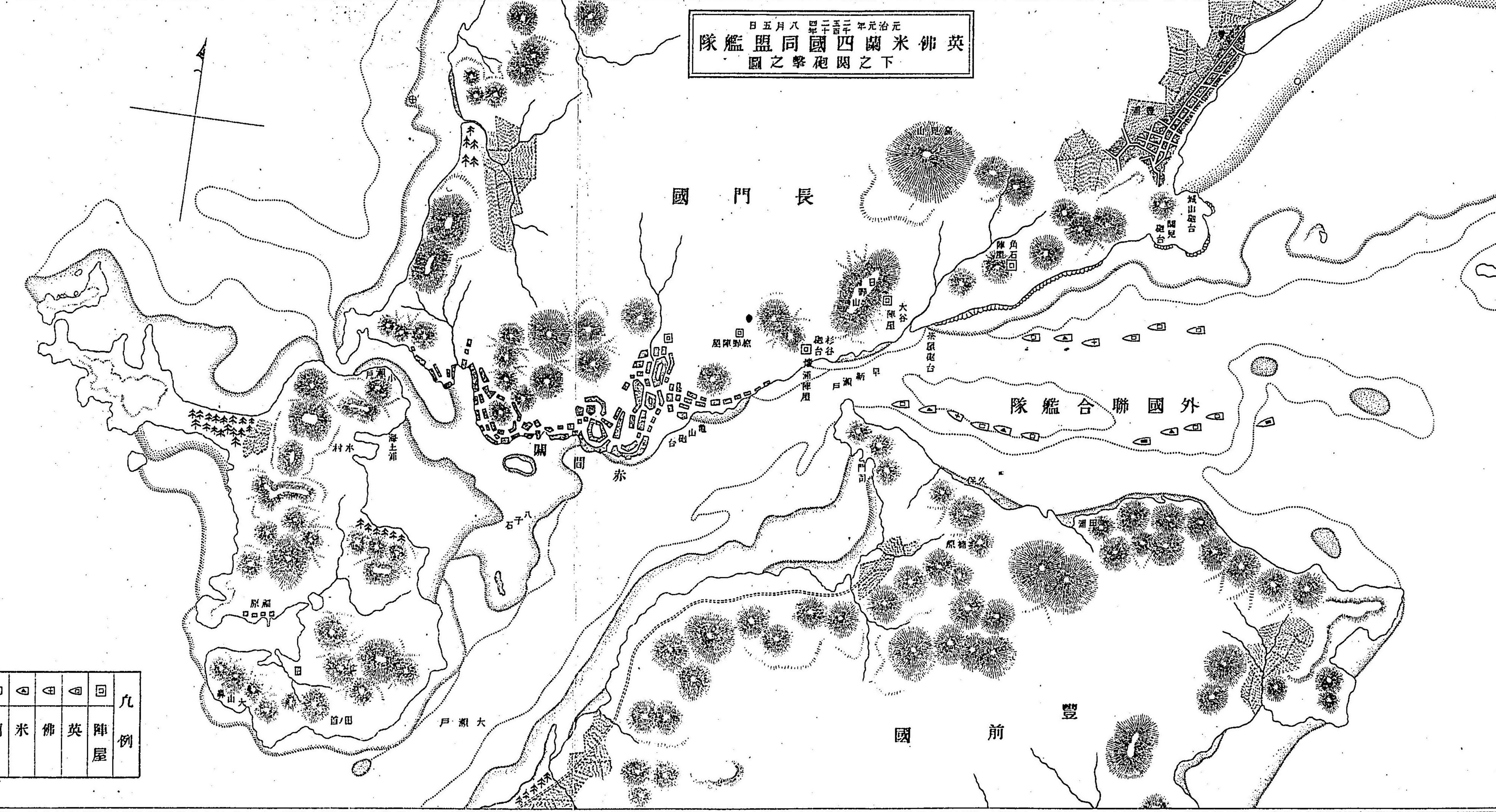


員組乗艦外るけ於に争戦關下年元治元



領占臺砲田前の艦外て於に争戦關下年元治元

日五月八年二十五年元治元
 隊艦盟同國四蘭米佛英
 國之擊砲閣之下



◁	◁	◁	◁	◁	凡例
蘭	米	佛	英	陣屋	

藩終に媾和を求め、八日戦を止め、次いで假條約書を交換せり。

此の媾和にて、外國との難は除去したれども、幕府徳川慶勝を征長總督とし、諸藩の兵を率ゐて十一月廣島に至りければ、長藩は曩に關下を擾したる三老臣等に自裁を命じ、その首級を送りて謝罪を表す。こゝに於いて敬親父子萩に退き、三條以下五卿を太宰府に徙すに決して、征長の兵を解けり。

此の時に當り、藩内黨論紛起し、當路者の妄りに事を生じ、國を誤るを責む、其の勢一時を撼かす、これを恭順黨となす。三老の首を斬りて罪を幕府に謝せしは、恭順黨の議に出づるなり。是に於いて周布政之助自殺し、清水清太郎死を賜ひ、毛利登人、前田孫右衛門、宍戸左馬之介、佐久間佐兵衛、山田亦助等の有司も皆恭順黨の殺す所となる。藩内の志士切齒扼腕、その怯懦を憤り、守戰の論を主張す、これを主戰派となす。而して政權は恭順黨の掌握する所となれり。

慶應元年、高杉晋作、筑前より馬關に歸り、同志を糾合して伊崎の官舎を襲ひ、檄を各郡に傳ふ。黨兵これを防ぎて連敗す、主戰派遂に勝を占め、恭順黨の主領、椋

梨藤太を斬に處し、國論を一定す。この年正月敬親萩より山口に遷る。將軍家茂かく長藩の動搖して謝罪謹慎のさま見えざるを以つて、再び征長の師を起す。諸侯幕臣の諫むる者あるも聽かず、進發して大阪に到る。六月幕軍四境に迫りしが長軍よく戦ひ、連戦皆克つ。八月に至り家茂大阪城に薨せしにより征長の兵罷む。この役幕府の軍は紀律敗類し、且つ舊制を墨守せしに、長軍は輕装銃煩を用ゐ、加ふるに多くの軍略家によりて行動せしかば、勝敗の數較せずして明かなりき。

此の年、孝明天皇崩御の事あり、而して國步極めて艱難なりければ、將軍慶喜政權を奉還してこゝに帝政復古を見るに至れり。

是に於いて、朝廷敬親父子の官位を復し、其の兵をして京都を宿衛せしむ。その後伏見鳥羽の戦となり、次いで奥羽の亂となるや、長藩は薩土諸藩と力を戮せて官軍の主腦となり、毎戦能く殊功を奏し、遂に争亂を戡定せり。

第八章 維新後の防長

廢藩置縣

徳川慶喜軍職を辭し、政權を奉還せしも、諸藩は尙ほ舊によりて各々その土地人民を私有せしかば、全國一統の政治を行ふこと能はず。この時に當り、木戸孝允參與の職に在り、藩主毛利敬親に説きて版籍奉還を勸め、更にこれを薩藩士大久保利通に謀りしに、また其の藩主に説きしかば、二藩主將にその封土を返上せんとす。佐賀、土佐兩藩主もこれに應じ、明治二年四藩主連署して上表し、その版籍を奉還し、以つて政令を一途に歸せんことを奏請せり。是に於いて諸藩も亦これに倣ふ。後又木戸孝允の議によりて、列藩を廢し縣となし、以つて實權を朝廷に收めたり。

明治の初代

維新の事業に最も力を效したるは薩長二州の人士なりき、殊に長藩は諸藩に

先ちて勤王の大義を唱へ、防長二州を塔して屢々奮闘盡瘁せり。其の功真に偉とすべし。明治四年三月敬親薨す、歳五十三、

天皇侍從堀川康隆を勅使とし、幣物を賜ひ、從一位を贈らる。其の詔に曰く、

首倡勤王回皇運于既衰誓期報効贊大政于更始維忠維義洵是國家柱石厥功厥績實爲藩翰儀型茲聞溘亡曷勝痛悼因贈從一位以彰勳

明治二十九年十二月元德薨す、歳五十八。政府特に國葬を以つてこれを葬る、天皇優渥なる勅語を賜ふ。其の勅に曰く、

諸藩に率先して夙に勤王の大義を唱へ、乃父を毗翼して同じく中興の鴻圖を贊し、身萬難を経て志一誠を存す已に偉勳を成し、又重望を負ふ。今や淪亡す曷ぞ軫悼に勝へん。茲に侍臣を遣し、賻を齎して以て弔慰せしむ

これより先明治九年熊本に神風連の亂あり、長門の前原一誠、之と謀を通じ兵を起して成らず。遂に擒はれて斬らる。翌年、町田梅之進、亂を阿武郡明木に起ししが、數日を出でずして誅せられ、其の黨與また縛に就けり。

今上陛下行幸

明治十八年 車駕山口、廣島、岡山三縣巡幸の事あり。七月二十六日能久親王、伊藤博文等を從へ給ひ、横濱より海路三田尻に着御。勝坂、鯖山、御堀を経て、同二十九日山口に着かせられ、駐紮二日にして同三十日また三田尻に向はせ給ふ。此の間親しく縣廳學校などに 臨幸あらせられ、また孝子節婦を旌表したまひ、錦小路頼徳、大村永敏、福原和勝などの墳墓に祭料を下賜せられたり。縣民皆その洪恩に感泣す。

馬關條約

明治二十七八年戰役の時、清國連戰連敗して、遂に媾和を請ひ、直隸總督李鴻章全權大臣として來朝す。我が全權辦理大臣伊藤博文、同陸奥宗光これを馬關に迎へ、春帆樓を會見場として談判を開始せり。時に明治二十八年三月二十日な

り清國先づ休戦を請ふ未だ諾せず會々二十四日凶漢あり短銃を以つて李鴻章を途上に要撃しこれを傷つく詔して休戦を諾し醫を遣はして懇ろに其の傷を療せしむ爲めに談判を中止すること二旬既にして疥癩瘡ゆ四月十五日兩國全權最後の會見を以つて和議を結ぶ。

日本海大海戦

明治三十七年二月日露の國交破れ兵火相見ゆるや防長二州は頗る要衝の地位に立てり日本海大海戦の際には、大津郡油谷灣の如き我艦船の主要なる假泊港となれり翌年五月二十七日我第三戦隊の旗艦笠置は猛烈なる敵の砲火を受け出羽司令官は笠置千歳を率ゐて油谷灣に入り其の損所の應急修理をなせりと云ふ當日沿海の地は砲聲殷々遠雷の如く家屋爲めに震ひ人々安き心もなかりし決戦既に終り我が軍大捷を得て豊浦大津阿武三郡の沿岸に沈没敵艦の水兵短艇船具等の漂着せしもの頗る多數なりき捕獲艦に其の名を

留むる見島は阿武郡所屬の一村にして萩町を距る二十五湮の海上にある孤島なり。

第九章 文教の沿革

學館の設備

防長二州文運の開發は毛利氏の時に至りて始めて旺盛の域に達せり毛利氏はその先大江世々文學の家たり廣元の後武家となり元就に及びて干戈倥偬の間も心を文事に留め其の詠草春霞集今なほ存す子孫亦皆好學の名あり慶長後萩に治するや時亂漸く定まる後にして國事未だ緒に就かず山田原欽の才學優備を以つてするも唯侍講たるに止まりて學校を興すの意あらざりき然れどもこれより先萬治年間綱廣萬治條目を制定して一藩統治の大憲を確立し後の勁健なる學風亦實にこの中に胚胎せり享保三年に至り吉元始めて文武稽古場を萩城三廓内に創め四年成を告げ名づけて明倫館といふ小倉尙

齋を館祭酒とし、釋菜養老の典を修す、爾來文武の業、日に興り月に盛なるに至れり。

明倫館の興隆

元文年間尙齋逝き、侍講山縣周南代つて館祭酒となる。周南は物門の翹楚、能く藩學を整頓し、學風を發揮して、訓勵怠らず、諸生大に進み、門下秀才に富む、育英に於ける成功は、護園の諸子よく及ぶ者なし。此の時藩主宗廣亦學を好み、屢々學館に入りて業を試み、學生を奨勵す、又甚だ古樂を好み、周南に命じ生徒に樂を肆はしむ、凡そ明倫館の制此の時に大成し、文物の隆、直ちに京都江戸に次ぐべし。周南の後、相次いで館祭酒たりし者、津田東陽、小田村、小田村、山根華陽、同南、濱繁、澤豐城、中村華嶽、山縣太華等の宿儒にして、皆周南の學派を紹述し、其の學風を發揮せざるはなし。天保年間に至り、敬親立ちて、勵精治を求め、文武諸般の改革を行ふ、弘化二年令を下して、萩中央江向の地を相し、學館を改建せしむ。蓋し從來の疊舎は、規模なほ小にして、到底時勢に適せざればなり。嘉永二年正月、重建明倫館成る。聖廟、宣聖殿講堂、演武場、馬埒、練兵場等皆備は

り、主として經學、歴史、制度、兵學、洋學、文章の六科を設け、又習字、算數、水術の技に至るまで、一も具はらざるなく、敬親時に其の別館に臨みて士を奨勵す。別に有備館を江戸櫻田邸内に設け、文武稽古場とし、江戸地方相對せしめ、人才を登庸するや、必ずこれを館内に採る。故に士庶彬々皆學に向ひ、講日の如きは聽衆數千の多きに及べり。その後、なほ屢々改修施設する所あり。文久轉治の後も、本館は其の盛を持續して、學制頒布の頃に至れり。

越氏塾と鴻城明倫館 佐波郡三田尻は、海陸の要衝に當り、往古國司の廳も此の地域の一隅に在りき。近世に至り毛利氏こゝに警固方を置きて、専ら船艦の事を行はしむ。享保年間この地方勝間の人に、河野養哲あり、名は通文、亦警固方の吏なり。人となり磊落不羈、廉潔汚れず、高く節を持す、最も讀書を樂み、遂に家業を棄て、醫となる。然れども醫も亦樂む所にあらず、則ちその居を塾とし、子弟の學業を請ふ者を延く、節儉自ら奉じ、教導道あり、遠近翕然としてこれに歸す。小倉、小田、山根、華陽、小田、村、小田、村、等、嘗てその陶冶を受く、養哲死に臨み、遺囑し

て官に告げ、その家を以つて長く習業の所となさしむ。官亦これを偉とし、命じて其の志を終へしむ。これを越氏塾と稱す。三田尻學校の濫觴にして、校舍は其の後屢々改造し、元治後、文武興隆に際し、同地御茶屋筋に移轉し、擊劍銃陣をも練習す。其の頃名も講習堂と改め、國學明倫館に準す。養哲の後飯田樂軒、吉田愼庵、吉武江陽、吉賀恪齋、今津桐園等、相次ぎてこれを督し、宗藩學校の一にして、維新後に至れり。

鴻城明倫館は文化年間藩士上田鳳陽の創立に係る。鳳陽名は讚明、字は恭述、山口の人にして、常に其郷に學校なく、且つ書籍に乏しきを憂ふ。乃ち慨然志を興し、豪農富商を説諭し、地を中河原に相して、遂に學校を創建し、號して講習堂と曰ふ。こゝに於いて閩郷靡然として學に向へり。萬延元年、藩これを國學明倫館に準す。次いで文久年間長山麓に移轉せり。元治元年、敬親再び山口に移るや、鴻城明倫館と改稱し、以つて萩と對立せしむ。文學寮には中村弼、岡村熊七、赤川又太郎、阪上忠介等、相次いで教授となり、兵學寮は大村益次郎を以つて主管とす。

明治四年七月、政府藩を廢し、縣を置くに至り、明倫館亦二つながらこれを廢め、舊鴻城明倫館の文學寮、算學寮を合せて中學校とす。これ後の山口高等學校、今の山口高等商業學校等の前身なり。

支藩の學校　支藩の學事は長府最も古し、慶長中秀元の府中に治するや、東福寺大照國師を迎へて極樂寺の主とし、儒書を講ぜしむ。然れども其の敬業館を設置せしは、寛政四年にして、藩主匡芳これを廓内裏侍町に創建し、學則を設け、小田濟川を舉げて督學とす。濟川名は泰、字は享叔、贊を明倫館に負ひ、器識宏淵、學館教授となりて夙夜從事し、才俊輩出す。天保二年始めて聖廟を創建し、釋菜を行ふ。濟川の子南岐、其の事を主司す。同時に臼杵鹿垣を招きて教授とす。その後鹿垣の子横坡及び結城確所等相次ぎて學を督し、文武共に行はれて維新後に及べり。

徳山の鳴鳳館は、天明五年藩主就馴、儒臣長沼采石と謀りて城下勢屯に學舎を建設せしに始まる。時に徳山に本城紫巖、役藍泉、青木葵園等の名儒ありて教授

し紫巖、藍泉は同時館祭酒に擢んでらる。弟子大に進み、徳山の文學これより見るべし。天保年間校舎を宇櫻馬場に移轉し、嘉永五年更に興讓館と改稱せり。清末の育英館は天明七年の創立に屬す、當時の藩主政美好文の聞あり、片山鳳翽を聘し、學規を定め、教授を司らしむ。藩儒國島京山、宗藩の儒、佐々木龍原、亦力を盡せり。其の後藩主元世、教を佐藤一齋に受けて、才學富贍、大に文教を興さんとして果さず、弘化二年世を去り、加ふるに財政不振にして、文運一時衰ふ、然れども嘉永癸丑の頃より、文武の講習復大に起りて、慶應明治に馴致せり。

岩國の學館創立は、他の支藩に比して年代頗る後る。然れども吉川家の學事に於ける淵源甚だ遠く、藩祖廣家以來文學を尊崇すること篤し、こゝを以つて藩内碩學世々乏しからず、元祿以前既に儒名天下に籍甚せし宇都宮遜菴あり、遜菴の子圭齋、夙に家訓を受け、兼ねて伊藤仁齋に學ぶ、同時朝枝毅齋、亦碩學にして、岩國の藩士の學に嚮ふ、此の二子最も力を致せり。その後桶口東里、山縣溥泉、三須棘水等出て、貢獻する所多し、然れども未だ學校の創立を見ず。天保年間、

藩主經幹封を襲ぎて好學の聞高し、弘化三年治所の東を相して學館を興建す。聖廟及び文武の講舍悉く具備す、名づけて養老館と曰ふ。玉乃九華を以つて督學とし、二宮錦水、桶口遜菴等教授たり。藩主親ら臨みて先聖を祭る。是に於いて士庶争うて文武に赴き、人才を陶冶せしもの夥多なりき。

諸邑學校 舊藩の時、其の一門老臣も、亦學舍を各采邑に建て、郷曲の文化啓發に力めたり。就中、須佐、益田氏の育英館、右田、毛利氏の學文堂、厚狹、毛利氏の朝陽館は創立最も古く、啓蒙陶冶の蹟も微なりとせず。

育英館の創立は、享保年間領主益田某、其の臣品川勿所を擧げて、子弟に教へしめしに始まる。その後、波田嵩山、山科太室等、佐江文學を司り功尤も多し。嘉永以後、領主親施、累世の遺志を紹ぎて、學舍を増築し、學規を改め、小國嵩陽を援擢して、育英館の學頭とし、又遠く師を聘して、武術を練習せしむ。文武の業彬々して、聲名一時遠邇に馳す。既にして幾程もなく、親施國難に殉し、嵩陽亦次いで歿し、佐江文學漸く衰ふ。慶應二年、明倫館教授阪上忠助聘せられて至り、岡村の子弟

就いて業を受け、學制頒布の頃に至れり。

學文堂は後に文教館と改稱す、遠く寛永五年の創始に係る、文武の稽古所なり、延寶年中、山縣良齋聘せられて、生徒に教授す、正徳享保の間、領主毛利廣正、瀧鶴臺を聘す、鶴臺の門に若月大野あり、亦久しく學を督す、嘉永二年に至り、領主更に大田稻香を聘す、稻香建議して校舎を修築し、これを學文堂と稱す、遠近從遊し、文武蔚然として邑學の最たりき。

厚狹の朝陽館は、享和年間、邑主毛利内藏の學校を興し、市川玄翠を徵して、群臣を教へしめしに始まる、弘化三年、邑主新に學館を其の郡村に興し、玄翠の嗣子玄白に命じて學を督す、是に於いて、生徒益々加はり、一時隆盛を致せり。

私塾 舊藩の時、家塾、寺小屋等は、何人たりとも自由に開設し得たるが故に、藩内個人の私塾も尠からず、寛政の頃、萩に仲東門の樂郡堂あり、門下濟々、一時城下を傾く、嘉永前後に至り、國事方に多端にして、有爲の才を須つこと切なり、此の時に當り、明主の知遇を得て、文武の庶政を恢宏し、一藩の士氣を振作せし

村田清風あり、又夙に慷慨國事を憂ひ、身死すと雖、門下俊豪を出だして、邦家に貢獻したる吉田松陰あり。

村田清風、通稱四郎左衛門、後緞部と改む、松齋はその號なり、人となり弘毅俊爽、其の學定主する所なし、經世を以つて志とす、齊房より敬親に至る四君に歴仕し、毎に要路に在り、天保の末、敬親大に武を羽賀臺に閱す、後又學政を改革し、文教を張る、皆清風の畫策する所に出づ、弘化年間、衰老を以つて三隅の舊居に還り、居宅を以つて文武講習所に充て、聖像を安置し、尊聖堂と稱す、邑の子弟をして入つて講習せしむ、家固より藏書に富む、其の書籍に集散任、天然、永爲、四海賓の印を捺す、清風少壯より老に至るまで、報國の志毫も撓まず、太平因循の故轍を改め、士風を作興し、人心を開發するを以つて自己の任とす、常に曰く、大丈夫天下の事に任ず、古今の事跡に涉り、當今の衆務に通ぜざる可らずと、又曰く、吾が儕聖賢の書を読むに、先づ我が眼光を以つて彼の心腸に射入し、彼我の伎倆を角せんことを思ふべし、初めより彌陀釋迦の塑像を拜する如く思ふ者は、終

に迂儒たるを免れずと、其の教育の法は、専らこれを激勵して發憤せしむるに在り、その過を見るや、叱責怒罵、些も假借せず、年少氣銳の徒、滿腹の議論を抱いて至る者、劈頭一言の下に、其の銳を挫かるゝを常とす。その大度よく人を容るゝと雖、亦甚だ威稜あり。人侮る能はず。身數々艱厄を経て、未だ嘗て君讎を蒙らず。一藩士林の泰斗を以つて仰がれたり。

吉田松陰、名は矩方、字は義卿、寅二郎と稱す。もと杉氏にして、藩の兵學家吉田氏を嗣ぐ。故に松陰亦、叔父玉木正綱、父の高弟、山田頼毅、林靖に家傳の兵訣を授かり、又長沼流の兵書を山田公章に受く。後四方に周遊し、江戸にいて、佐久間象山に従へり。然れども松陰の學問性行に最も裨益せしものは、山鹿素行の著書なりといふ。殊に其の武教小學、武教全書等は、反覆讀破せし所なりき。嘉永癸丑、後、國論沸騰するや、松陰時艱を憂慮して、心嘗て休せず。安政元年、下田の事あり、罪を得て、國に押送せられ、野山獄に繋がる。翌年、出獄の命ありて、松本の家に幽居す。兵學を諸生に講授するを許され、これより藩士就いて業を受くる者多し。

因つてその塾舎を増築し、名づけて松下村塾といふ。久坂玄瑞、高杉晋作等の俊才來つて業を受け、他年廟廊の棟梁も、多數此の矮陋の一小舎に養成せられたり。

知名の儒家并に詩人

昔時大内氏が繁榮を極めし頃、山口に南村梅軒別號離明といふ者あり。義隆の同朋たり。梅軒の名字籍貫詳ならず、或は云ふ、大内氏の舊臣なりと。後土佐に至り、豪族吉良宣經の師となりしが、その終はる所を知らず。天文年中、義隆が、朱子新註を朝鮮に求めたるは、蓋し梅軒の勸誘に由りしならむ。本朝の朱子學を崇尚する者、恐らくはこれを以つて嚆矢とすべし。唯其の事跡の明瞭ならざるを恨とするのみ。

舊藩文學の始祖として先づ傳ふべき者を、宇都宮遜菴となす。遜菴名は三近、字は由的、弱冠京に遊び、木下順菴と共に松永門の俊秀にして、後世二菴分峙の稱

あり柴邦彦の遜 學問該博、資性仁孝にして物と忤はず、著述頗る富み、最も多く諸書に標注して、初學に便す。時人よつて標注由的と稱す。物徂徠の少時上總に在るや、由的の標注を得て讀み、遂に書をよせて、惠海内に及ぶとなす。遜菴嘗て日本古今人物史を著はす。書中中川清秀が記事、幕府の忌諱に觸れて、郷里岩國に禁錮せらる。詩あり、曰く

銷金衆口誠可恐、自古賢君多逐臣、二歲閉門非謝客、一身失道豈尤人、既爲日月籠中鳥、焉若江湖波底鱗、幸有詩書足相樂、窮通榮辱任天真、

後赦に遭ひ、京に在りて教授す。久しくして名益々重く、當時推して和漢の通儒となす。寶曆四年歳七十五にして歿す。

遜菴に稍後れて、萩に山田原欽あり、名は熙、字は舜愈、復軒と號す。幼にして穎悟、學を好む。伊藤坦菴に従ひ、又遜菴に學べり。坦菴の復軒說にいはいはく、山田生熙、字原欽、號復軒、防州人、幼來京師、從學於余生未弱冠、博讀經史、而約通其義、至諸子百家之書、莫不瀏覽、而強記者、實異材也、下と原欽強記天成、詞才湧くが如く、加ふる

に勤勉にして居常律あり、造詣測るべからざりしが、元祿六年歳僅に二十八にして逝けり。

初めて明倫館祭酒たりし小倉尙齋は、幼時原欽に従ひ、後坦菴に學べり、名は貞字は實操、元文二年歳六十にして歿す。資性廉介、公直、生徒を導くに法あり、防長文學は尙齋礎を置き、周南これを大成せるものと謂ふべし。

山縣周南、名は孝孺、字は次公、小字を少助と云ふ。年甫めて十九、父良齋に従つて江戸に至り、護國に入る。時に徂徠古學を唱へ、業未だ大に振はず、獨り周南、安藤東野と一意斯道に従ひ、遂に其の羽翼たり。強學三年、歸つて藩學を督し、寶曆二年を以つて歿す。年六十五、著書に、文集、講學日記、作文初問等あり。資性溫良、雅馴、護國諸子の中に於いて、持論最も平と稱す。居常顔色怡々、宗族輯穆して、少しも間言あらず、其の人物を想見すべし。周南力を經學に盡し、最も國典に精しく、詩賦文章は、餘技と雖、又一家の體を具ふ。少時馬關に在り、韓使と唱酬す。韓使益梅を指して詩を求め、梅開杯を以つて韻となす。周南立所に賦じて曰く

赤水橋頭一枝梅、却從瓶裡趁春開、分明認得東君意、要照嘉賓夜宴杯、

と彼使歎賞措かず、これより先、長藩には既に堀河派の學者あり、周南出づるに及び、藩内靡然として護園の學風に向ふ、其の門下、瀧鶴臺名は長壘、林東溟名は周文、和智東郊名は棟卿、山根華陽名は之清、小田村郷村名は彌八、小倉郷門名は實廉、津田東陽名は士雅、田坂覇山名は長温、仲子岐陽名は山基、窪井鶴汀名は真佐、これを長州十才子と稱す、就中、鶴臺、東溟、東郊を以つて縣門の三傑となす。

鶴臺初め郷に在りて學を周南に受け、後服部南廓の門に遊ぶ、剛健聰敏、力を經學詩文に效し、名聲海内に揚がる、又書を能くし、尤も佛學に精しく、藩の宿僧無隱、無學等の推服する所となる、又醫方に通じ、山脇元飛等と交る、著はす所、文集、癸甲問槎、老子抄等あり、安永三年歳六十五にして歿す、其の門に及ぶ者、徳山の役藍泉を首とす。

東溟亦明倫館にありて及第第一の和あり、歳二十四、故ありて國を去り、京師に

居り、復仕進を求めず、從遊する者多く、復古の學これより京攝に起る、晚年江戸に住し、詩酒豪放、老莊の學を好み、優遊して身を終ふ、著書に、明官古名考、東溟詩稿等數種あり、詩を以つて長所とし、雄渾にして護社の名流を壓するものあり、二十一歳の時、郷に在りて徂徠の死を哭せる詩三首、當時最も稱揚せらる、其の第一第二に曰く

賦得招魂訴下泉、幾回掬淚白雲邊、揚雄奇字元難授、徐福尙書誰已傳、僊客長辭

江都月、文星遙隕武陵天、仲尼去後若君少、五百還須一大賢、

牛門諸子總風流、把手多時半倦遊、東海文章初歸漢、中原禮樂未知周、人空天祿

燈猶挑、春滿護園鳥自愁、風雨朝來天地起、世間長此失吳鉤、

和智東郊亦學問該博、夙に詩文を以つて頭角を現はす、荻生徂徠嘗て賞して、海内の奇才とせり、著はす所、文集、東郊座右記、虛實見聞記等あり、明和二年歳六十にして歿す。

此の時刀圭に永富獨嘯あり、名は鳳、字は朝陽、獨嘯庵と號す、豊浦郡、字倍の人な

り、周南に従學す、後京に遊び、更に海内を周遊し、廣く傑士と交はる。人となり儼奇偉、神彩煥發、人に逼る。嘗て經世を以つて自ら任ず、經學文章に達し、又物産の學を究め、殊に醫術に精しく、大阪に開業して名聲四方に振ふ。諸侯重祿を以つて招けども應ぜず、明和三年歳三十五にして歿す。その著多く散佚して傳はず、獨嘯齋語漫遊雜記二書、今世に行はる。議論跌宕、文章猷勁、一讀人意を強からしむ。長府の儒小田濟川は獨嘯の弟なり。

周南一度學政を整へて後、二州の人材鬱然輩出せりと雖、知名の學者文章家を出だすこと甚だ多からず。これ周南は其の本色専ら經術に在り、而して長藩の學風亦一に勁健にして、實際を主とするに歸せざる可らず。然れども其の儒林詞場に傳ふべき者亦固より尠少ならざるなり。

片山鳳翽、名は則、字は順甫、周防吉敷の人なり。初め帷を山口に下し、後京に遊び、遍く宿儒を訪ふ。人となり、耿介特立、權貴に屈せず、嘗て藩主に侍して書を講ずるに、辯論激切、時務の病利、吏の能否を言ひて假借せず、遂に爲めに讒責を受け、

文化五年、歳六十九にして幽居中歿す。鳳翽、文材雋逸、詩文共に長ず。最も多能にして、擊劍醫方の技も妙處に到れり。著はす所、鳳翽集、齊家談等數多あり。同時山口に有吉高陽ありて、學を瀧鶴臺に受け、經術に長ず。鳳翽と往來切磋せり。

これより先、岩國は宇都宮圭齋、朝枝毅齋ありて、伊藤氏の古學を唱ふ。圭齋名は三的、字は文甫、享保九年、歳四十八にして歿す。毅齋名は世美、字は德濟、延享二年、四十九歳を以つて歿せり。山縣溥泉、桶口東里、同義所等、その學派を承けて著述も少なからず。その詩文は、皆載せて巖山金玉集に在り。

徳山の本城紫巖、名は桓、字は子猛、山根華陽に學び、又瀧鶴臺に従ふ。大に後進を啓發せり。其の友、役藍泉、名は觀、字は道甫、又興山と號す。本姓は島田氏、徳山の修驗教院の住職にして、宗祖の役字を冠して姓とす。人となり篤實、倨らず、護園の學を奉じ、經書に該通し、一家の見を持つ。又詩文に長ず。文化六年、歳五十七にして歿す。著はす所、藍泉集、學範、藍泉一家言、大道公論等あり。交友甚だ廣く、最も龜井南溟と親しみ、管鮑相許す。數十年、寛政三博士の用ひらるゝや、南溟詩を作つ

て藍泉に寄す、中に見彼三助氣揚々の句あり、藍泉見て笑うて曰く、先生不平にして此の言をなすか、以つて後世に示すべきものに非ずと、乃ち裂きて火に投ずといふ、その詩飄逸なるもの、長歌行の第二にいはいはく、

仙人駕黃鶴、翩躚下九天、兩耳垂兩肩、鬚髮何蒼然、迎我崆峒上、迷我緱山巔、投我一玉箱、中有大還丹、服之好顏色、長生壽千年、

周南の後裔なる山縣太華は、名は禎、字は文祥、半七と稱す、明倫館の學頭、又祭酒たること數十年、嘉永五年致仕す、嘗て命を奉じて、重建明倫館記を屬す、著書に國史纂論あり、門に市川玄白等を出せり、同時中村牛莊あり、名は任、字は文淵、初め諱園の學を修め、後程朱を主とす、明治二年歳八十七にして歿せり。

市川玄白は長門船木の人、名は守信、字は仲章、非々と號し、其の居を臥龍窟、又思無邪堂といへり、初め山縣太華に學び、後、江戸に出て、古賀侗菴、佐藤一齋、大田錦城諸家に從ひ、拮据五載、學大に進み、歸つて子弟に教授す、人となり温厚篤實、浮華を喜ばず、尤も二程に私淑し、専らその學を躬行す、遠近景慕し、益を請ふ者門

にみつ、又近代の一碩儒なり、曾て宗藩に聘せらるれども應ぜず、嘉永五年歳五十七にして逝けり。

岩國の玉乃九華、名は惇成、字は裕甫、力を藩學に效し、嘉永四年歳五十五にして歿す、亦初め物氏の學を喜びしが、後程朱に歸せり、九華文章を得意とし、著書風雅はその學問の存する所を見るべし。

嘉永前後學術大に開け、士は文藝に心を寄せて風尚を爲す、右田の大田梁平、名は毅、字は有年、稻香と號す、初め廣瀬淡窓の門に學び、後長崎に出て、清客と唱酬し、又砲術を高島秋帆に學ぶ、經學に深く、詩文亦機軸を出せり、慶應二年歳五十七にして歿す、岩國の桶口選菴、二宮錦水は造詣専ら、經學に在りと雖、またよく詩文を屬せり、同じ頃岩國に香川午谷、防府に今津桐園、同秋庵、萩に楊井三希、安道芝齋、土屋蕭海、玖珂に釋月性等もあり、三希、通稱は孫太郎、別に靜齋、又青坡と號す、久しく江戸の藩邸に役し、尤も藏書に富む、芝齋は三希の弟にして、經學に精しく、却つて書名に掩はれたり、土屋蕭海名は根、字は松如、通稱彌之介、安藝の

坂井虎山に學び、又江戸に遊びて、良齋、息軒諸子に問ふ所あり、還つて明倫館教授に擧げられ、次いで侍講に進む、最も文章に長ず、良齋嘗て稱して吾が黨の領袖とす、蕭海殊に吉田松陰と善し、村田清風の歿するや、松陰獄裏より書を蕭海に寄せて、其の傳記を修せんことを囑す、元治元年歳三十六にして病歿す、
釋月性は周防遠崎の人、字は智圓、清狂と號す、少くして肥豐の間に遊學し、又去つて上國にゆき、拙堂、虎山等、當時天下の名流と相唱酬する十七年、詩名大に揚がる、先輩激賞して、靈一、活然の流亞となす、かつて其の郷をいづるに臨み、埋骨何期墳墓地、人間到處有青山、の句、人口に膾炙せり、然れども、月性徒に詩名を博するを以つて屑とせず、夙に海防を以つて憂となし、法を講ずるに、必ず其の意を寄す、至誠惻到、聲淚共に至る、聽者咸激せざるはなし、藩老益田、福原諸氏最もこれを愛し、數々延いて縱談せしむ、聲名遠近に響すしく、呼んで海防僧と云ふ、著はす所護國論あり、其の詩精練奔放、忠義の旨を失はず、作詩に曰く
作詩不欲爲尋常之詩人、放吟滿腹吐經論、飲酒不欲爲尋常之酒客、一醉胸中躍

兵戰近歲西邦啓、小戎遂使鯨波及大東、沿海傳言蠻舶見、要衝藩鎮議防戰、我居方外志難酬、詩酒清狂消杞憂、安得袈裟代甲冑、如意指揮防外寇、擊碎鯨鱸海底

沈、一戰絕彼觀銳心、不效滿清和戎議、肯許犬羊割土地、
安政五年四十二歳にして病んで歿す、その長門に在るや、村田松齋、土屋蕭海等と相識る、月性歿して蕭海其の傳を屬せり、

陽明學者 前に述べしが如く、長藩の文學は、護國若しくは堀河の學派にして、後に朱子學も行はれたれども、姚江の學は未だ絶えて其の流派を酌む者なかりき、近代に至りて、岩國に栗栖天山、東澤瀉の二人あり、陽明に尸祝して聖學の正宗とせり、天山名は靖、字は子共、曾て昇平校に學び、歸つて養老館に教授す、澤瀉と意氣相合す、時に昇平の餘弊、士氣振はず、天山、澤瀉と共に諸生を激勵し、大に企畫する所あり、然るに其の爲す所過激にして、常典に觸れ、共に南島に流さる、天山時を憤り、自ら禁ぜず、逃れて岩國に歸り、所思を同志に訴へ、絶命の詞を作り、屠腹して死す、時に慶應二年なり、

澤瀉名は正純、字は崇一、天資俊邁、文章を好む。明治元年赦されて郷里に歸り、帷を下して教授す。後塾を鎖し、諸生を謝絶し、易を讀んで樂となし、以つて晩年を了す。其の著、燈心録等十餘種あり。

吉田松陰かつて學を佐久間象山に受く、故に其の學の系統は姚江と關係あり、自ら王學の眞往々吾が眞と會すといへり。門下の高杉東行も亦王學を好みたりき。

歴史家

歴史家としては、野史の著者飯田忠彦を白眉とす。

忠彦姓は源、字は子邦、徳山藩士、里見兼門の子なり。幼より聰明拔群、既に歴史に通じ、兼ねて武藝を修め、爵として成人の如し、擢んでられて藩主の近侍となる。文政元年故ありて致仕し、去つて河内に遊ぶ。八尾の富豪、飯田某、其の人となりを受し、終に請うて養子とす、仍つて其の姓を冒す。爾來勉めて懈らず、學大に進む。嘗て我が國中古以來、朝廷の史局廢し、上下の系譜錯亂せるを慨し、これを諸史に考へて、諸系圖十八卷を撰す。又大日本史の續篇を輯するに決し、四方に奔

走して、史料二千部を蒐集し、拮据三十八年を経て、始めて其の業を終ふ。命じて野史と云ふ。書する所、明德年間にはじまりて文政に至る、凡そ二十一世、四百二十餘年、體例一に大日本史に倣ふ。史實富贍、記事明快、後世を益すること著大なり。忠彦曾て時事を論じ、罪を獲て江戸の獄に入る。後赦されて深草の里に屏居す。萬延元年、櫻田の變、これに連なるを以つて吏に拘へられんとす。憤懣して自殺す。時に年六十三。

國學の振起并に歌人

長藩に於ける國學の振起は、漢學に比して頗る後れ、近藤芳樹が紀州より還りて門戸を張る頃までは、國學の事ほとんど言ふに足らず。然れどもこれより先、和歌に名ある者は世々乏しからず。延寶中、萩に安部春貞あり、歌學を好みて吉川惟足に學ぶ。又藩主の命を以つて、萩、八江名所の和歌を詠す。子孫世々連歌の家となる。元祿の頃、岩國に梅月堂宣阿出づ。香川氏、名は景繼、初めは儒學を修め

しが、後京都に住し、清水谷實業につきて歌を學ぶ、傍ら佛典を究め、剃髮して眞阿堯眞と稱す。歌名大に揚がり、今西行と呼ぶ。享保二十年九十三歳にして逝けり。著はす所、草庵集、蒙求、諺解、富士一覽記、陰徳太平記あり。宣阿の孫、景柄（後中）と號す。亦和歌を能くす。子なきを以つて養子せり。これを長門守景樹となす。父子の間和せず。終に義絶して更に伏田氏の子を養ひ家を襲がしめ、景嗣といふ。景樹猶ほ香川氏を稱するを以つて、香川家こゝに於いて二流となれり。景樹の門に熊谷直好あり。

熊谷直好、通稱は助左衛門、岩國の藩士にして文事を好み、和歌に長ず。屢々上京して師景樹の教を受け、遂に當時の名家に列し、薩人、八田知紀と共に桂門の二傑たり。後故ありて國を去る、去るに臨みて詠あり。

世の中を思ひ定めし朝より雲と水とにゆく心かな

大阪に家居し、文久二年歳八十一にして歿す。著はす所、法曹至要抄注解、梁塵後抄、古今集補注、歸國道の記等あり。浦の鹽貝、同拾遺を其の歌集とす。直好に學び

し者は岩國に熊谷直輔あり。

萩には享保の頃、坂時存あり、官途に入つて能吏と稱せらる。又甚だ和歌を嗜み、其の頃漢様のみを模倣する時に方り、清輔の古事を尋ねて、同志と尙齒會をはじめ、時存が

君が代に残さまほしきものとはともに積れる齡なりけり

と詠めること、寄居歌談に見ゆ。天保以後、歌人の輩出漸く盛にして、萩に楊井松雄、靜間三積、冷泉古風、布施御墻、安戸眞激等の入あり。防府に弘正方、鈴木直通、同高輦あり。近藤芳樹も其の頃萩に來りて始めて國學を講ぜり。

靜間三積、通稱は衡介、楊井松雄に學び、後に本居大平に従ふ。當時國學の先進を以つて推さる。又藏書に富み、曾て南朝の事蹟の分明ならざるを慨き、新葉集を校正し、未だ稿を終はらずして歿せり。

冷泉古風、通稱は護一、大内氏の臣、冷泉隆豊の後裔なり。古風、又石竹舎主人と號す。少時頻りに武事を練磨せしが、後病を患ひ、武技を事とするを得ず、慨然節を

折つて讀書に志し、殊に國學を講じ和歌を修む、刻苦數年業大に進み蔚然として名家となる。業を門生に授けて諄々倦色なく、閒雅自適高士の風あり、安政元年齡五十四にして歿す。著はす所、石竹集、石竹日記、喫茶養神論、御狩の記、及び雜著若干卷あり。

宍戸眞激、通稱九郎兵衛といひ、後に左馬之介と改む。藩老宍戸氏の一族なり。官に要路に當り、甲子の變國難に殉す。時に歳六十一人と爲り、重厚、藩の典故に精しく、歌文を善くし、鴉浮巢翁と號す。その歌集、鴉の浮巢は小篇と雖、才藻蘊蓄を見るべし。近藤芳樹これに奥書して

(上略) 三十とせあまりのむかしおのれ萩城にて古學を唱へそめしに眞激こ
とにありたちて斯道をたすけものしたりきその後殿につかふる人のすめ
らぎをたふとび外國をしりぞくる大和魂をかためしは眞激にはじまれり
といはんもしひごとならじわかかりしほどよりづしやかなる志を立てし
さまかいなでならて常に洞春公の代の文どもを廣くあさり求めつゝ家々

の系をあきらめふりにし跡をかうがへ後のあかしともなりぬべくなしお
けること多くおほやけざまに用られしかたのつかさもたかくすゝみて世
のおぼえことなる有識なりしかどもすればいさどほろしささまのなげ
さしつゝいはゆる慷慨の士ともかゝるをやいふらんとおもふばかりの人
になんありける

そのかみをおもひわたせば長橋にかよふ心の今もたえせぬ

とよめるもさるかたの思をもらせるなるべし云々

といへる、亦以つて其の人と爲りを想見すべし。

弘正方、通稱平五郎、三田尻に居る、最も國史に精し、水門集、江氏水源、松崎天神鎮座考等を著はす。鈴木直道は和泉と稱す、松崎天神の社官にして、國典を研究し、語學に精しく、その子高輅も家學を受けて和歌を能くせり。

近藤芳樹は近世國學の大家にして、周防の人、初めは田中氏、晋一郎と稱す。贊を靜間三積に取り、後いで、國學を本居大平に受け、律令有職を山田以文に學ぶ。

毛利敬親召して明倫館の教授とす、弟子大に進み、防長國學に新紀元を爲せり、明治八年宮内省に仕へ、文學御用掛に任ず、九年十一年の行幸に供奉し、十符の菅薦、陸路の記を記し、又皇后宮の仰によりて、明治孝節録を著す、明治十三年歳八十にして歿せり、歌文に長じ、寄居百首、寄居歌談、其の他の著あり、最も律令有職に精しく、其の著、大祓執中抄、標注令義解校本、標注職原抄校本等は、斯道に益する所大なり、其の他著述甚だ富み、未だ歎詞に上らざるも、尠からず、芳樹の子と芳介とす、初め佐甲但馬守久棟と稱す、後芳樹の養子となれり、足代弘訓に學びて一家をなす、性溫厚、氣慨あり、七卿の長門に下るや、京師より隨ひて萩に到れり、明治の初年宣教小博士となり、松尾大宮司より稻荷宮司となり、明治三十一年歿せり。

維新の前安部春貞の後裔に惟貞ありて、學を本居大平に受く、其の頃北條氏華、檜崎景海、松岡經平、勝間田盛稔晩に稱す及び國老國司親相等もありて、皆近き頃の得難き歌人なり。

蘭學

長藩は嘉永以後、明倫館の科目に洋學の一科を加へて、蘭學の修習を奨めたり、これより先、天保年間、斯學の泰斗坪井信道も亦本藩に聘せられて教授を司りしことあり、藩人の就いて益を受けしもの多かりき、嘉永後、明倫館の西洋學師範又は役員たりし人々には、能美隆庵、田原玄周、松島剛藏、青木周弼等あり、皆本藩の醫家より出て、造詣深く、洋學の普及に力を效せしこと頗る大なり、田原玄周は安政年間、西洋學師範役に擧げられ、當時の學者名士就きて業を受けし者多く、吉田松陰の如きもその一人なりき、松島剛藏は學を坪井信道に受け、後長崎に遊びて洋人に従ふ、其の力を本藩の海軍に盡せしこと、武術の沿革に説くべし。

青木周弼、名は邦彦、大島郡の人なり、醫方を能美友庵に學ぶ、幼にして識見あり、日夜刻苦學大に進む、友庵その器を知り、これをして長崎に遊ばしむ、周弼乃ち長崎に至り、和蘭の醫シーボルトに師事し、業成りて同地に開業す、治術頗る奇

功あり、人以つて神醫とす。藩主敬親その名を聞き、召し還して侍醫とす。又醫學館役頭となす。治術精妙、當時大先生と呼ぶ。周弼よく海外の事情に通じ、時務に明なること醫術の上に出づ。敬親延きて屢々問ふ所あり、その藩内に種痘法を施し、硝子を製造せしめたるは、皆周弼の建言に由れり。後、贈位の典あり。嘉永安政の際、久坂玄機及び松村太冲ありて、二人共に蘭學に於いて精通相匹敵す。維新前後に至りては、夙に蘭學以外の洋學に通ぜし者多かりしも、今一々擧げず。

久坂玄機、名は眞字は靜、天籟と號す。長崎に遊び、蘭學を修め、傍ら兵制に及ぶ。又詩賦を能くし、借月性と意氣相投じ、交情尤も深し。嘗て敬親命じて海防の事を策せしむ。時に玄機篤疾に罹りて、蔭に在り、命をさして厥起、寢を廢すること數夜。對策數千言を陳ね、幾もなくして逝けり。その著述翻譯數十種ありて、家に藏す。志士久坂玄瑞は玄機の弟なり。

第十章 武術の沿革

長藩は烈祖元就の偉績を紹きて、夙に關西の雄藩たり。時運昇平に屬すと雖、車行吉日、未だ曾て偏廢せず。こゝを以つて、韜略劍技の名家も亦世々乏しからず。享保の頃、北川汝陽出づるに及びて、講武の事益々熾盛に赴けり。

北川汝陽、名は堅僞、小平二と稱す。少くして大志あり、心を戰略に潜め、北條、山鹿、由井諸氏の兵法を窮め、孫吳に出入し、書百餘卷を著はし、近世師家の誤を正す。又家傳の劍技を修め、益々練修して、遂に一家の流を立つ。是に於いて、弟子大に進み、門に遊ぶ者一千餘人に及ぶ。藩主金を賜ひて褒賞し、更に稽古場を建設し、子弟を教育せしむ。汝陽人となり、倜儻にして氣概自ら許す。嘗て山縣周南に従ひ、徂徠の學を聞き、心に會する所あり。經術を以つて、武事を潤飾し、曰く文武一途に歸すと。門下英豪の士多し。北川氏これより世々擊劍の家となる。

明倫館の武學は、擊劍に平岡、北川、馬來、内藤の四家、槍術に小幡、岡部、横地三家あ

りて其の師範役たり。兵學家には吉田、大西、多田の三氏あり。天保年間藩主敬親立ちて大に文武の業を張り、盛んに演武の舉あり。次いで沿海外虞を傳へ、講武の業益々起る。又時運の推移に隨ひて、大に兵制を改革し、洋式を用ゐるに至る。當時山田公章、來原盛功等其の唱首たり。

山田公章名は又助、愛山と號し、又含章齋、玉江釣徒等の號あり。武を嗜み學を好む。兵學を清水赤城に學び、其の濫輿を窮め、藩主に用ひられて最も力を海防築城に效す。又造艦鑄砲の事を管し、萬延二年其の督する所の軍艦庚申丸成り、これに乗じて赤間關に航す。後復命を以つて横濱に赴き、壬戌丸を買ふ。公章屢々樞要に參して、畫策する所多く、甲子の變國難に殉せり。當時長藩が天下に率先して洋式を採用し、後年兵鋒精銳の礎を造りしは、公章等の盡力多きに居る。長藩の海軍局を三田尻に設けたるは、文久元年にして、松島久誠其の頭人となる。久誠通稱は剛藏、韓峰と號す。蘭學を坪井信道に受け、藩侍醫となる。人となり豪爽不羈、慨然志を立て、長崎に遊び、洋人に就いて航海術を修め、勵精數年に

して歸り、獻言して海軍局を開き、其の業を講ず。航海を以つて名ある者多く、其の門に出づ。甲子の變、久誠國難に殉す。

萬延元年、兵學家の泰斗大村益次郎擢用せられ、兵學教授となり、次いで軍務を執るに及び、兵制駁々として面目を一新せり。

益次郎名は永敏、初め村田藏六と稱し、後大村に改む。周防の人にして幼より學を好み、漢籍を廣瀬淡窓に學び、又洋學を緒方洪庵に學ぶ。郷に歸りて醫を開業せしが行はれず、終に志を兵學家たるに決し、獨學勵精、夙に泰西の兵書を涉獵し、我國の兵制西歐の軍備に及ばざるの遠きを知り、大に發明する所あり。人となり明敏沈毅、議論識見共に卓絶、モルトケ將軍の風ありと稱せらる。嘗て幕府の蕃書取調所の教授となりて、貢獻多かりしが、木戸孝允の推薦により、文久二年本國に召し還され、明倫館教授となる。有名なる戦闘術門の著は此の際に成れり。門生陶冶の績も大に擧がる。この時閩藩多事、甲子の變に次ぎて外船の馬關砲撃の事あり、四境戦争亦次いで起る。益次郎この間、軍務掛となりて、蘊蓄を

實際に施すを得、武具行陣皆其の式制を一新せり。四境の役、石州口の軍を督し、部署鮮明、忽ち石見を定む。王政復古の後、兵部大輔となり、將に大に聖代に盡さんとして、明治二年九月不幸兇刃に斃る。時に歳四十七。
是より先、岩國に有阪長爲、右田に大田梁平等ありて、亦深く兵術に通じ、力を當時に效せしもの尠からず。有阪長爲は通稱を淳藏といふ。父は吉川家の砲術家にして、長爲その家傳の十七流を受け、以つて不足となし、博く他國の士に交はりて研究する所あり。長崎に出で、高島秋帆に従ふ。嘉永後海防の議大に起りて、西洋火技の利世に知られ、長爲諸藩に延請せられて力を盡せり。安政二年、歳七十二を以つて歿す。

第十一章 美術工藝の沿革

刀工及び鐔工

防長の刀工は、二王及び左安吉の流派を以つて著しとす。鎌倉時代、周防に二王

清真といふ者、刀法に一派を開く、これを二王の初代とす。其の子清平、孫清綱皆名あり。清綱より同銘三代相次ぐ。子孫相傳へて大内氏の末造に至れり。その一門の長門に住する者もありき。本朝鍛冶考左安吉は、本國筑前にして、正平年間長門府中に住す。左文字を以つて銘とす。因りて左と稱す。又大左ともいへり。其の子三人、顯國最も名手と稱す。子孫業を傳へて慶長の頃に及べり。
舊藩時代に至り、長門は最も鐔を造るに巧にして、長門鐔の名世に聞ゆ。享保年間藩主吉元、彫工河治友久、同友周に命じて鐔を造らしめ、これを幕府に獻ず。幕府その精巧を賞して銀を賜ふ。鳳曆年間、鐔工中井善助友恒といふ者あり。鐔工河治左兵衛友恒の子にして、無比の良工なり。傳世の刀法に新意を加へて益々長門鐔の聲譽を博せり。

繪畫

雲谷派

天授の美才もて、雲谷の畫風を創めし雪舟は、備中赤濱の人、姓は小

田名は等揚といふ。幼時その父井山寶福寺に投じて僧とす。長じて京に入り、如拙周文を師とし、又鎌倉建長寺の玉隠永興に従つて禪學を修む。永正年間山口に入り、四明山に登りて天童第一座に班す。明に在る三年、時の能畫李張の筆蹟を見て以つて學ぶに足らずとし、獨り山水を觀て切磋怠らず、妙技益々熟す。明の君臣歎賞し、勅して宮殿に畫かしむ。文明元年歸朝の後、又山口の舊庵に居りしが、後石見に赴き、文龜二年大喜庵に寂す。雪舟の畫は妙を天性に得て、古人の蹤跡を逐はず、渾然として自ら一家を成す。山水を長所とし、人物花鳥これに次第す。好んで水墨を用ひ、概ね意を寫して形似を專にせず。筆力剛健、奇思縹緲、山水畫家として古今に獨歩す。弟子周德、惟器と號す。師の讓を受けて雲谷庵主となる。周德の弟子等薩、亦粗豪雄健の筆を揮ひ、剃髮して雲谷庵第三世を冒す。雲谷の畫派等薩に至つて中絶す。

天正年間、毛利輝元雪舟の筆意を得たる者を求めて肥前の人原直治を得たり。

直治これより舊跡雲谷庵に居り、容膝等顔と號す。雪舟の畫法を學んで、水墨又淡彩の畫を作る、氣韻頗る高し。子孫世々雲谷を氏とし、毛利家に仕ふ。等顔の子二人あり、等屋、等益といふ。等屋安藝の福島氏に仕へしが、其の子等的に至りて復本藩に仕へ、子孫畫を業とす。等益宗家を襲ぎて三子あり、等與、等爾、等哲といふ。長子等與、等與の子等璠、皆名手と稱す。等璠の後は等叔に至りて、畫風狩野派に變ず。等爾の後は等直に至りて、儒家となり、等哲の子孫代々畫を業として明治に至れり。或はいふ、等哲は長谷川氏にして雲谷氏にあらずと。

狩野派 長藩に於ける狩野派の畫家は、大樂朴水を嚆矢となす。朴水、初め狩野永真に學び、後に業を養朴常信に受く。これより先、寛永年間、常信の門人笹山養意も亦毛利氏へ召出されしことあり。古畫備考其の筆跡往々今に存す。朴水の子探玄、父の業をつぎて法橋に叙せらる。寶曆年間、長府に狩野察信あり、古永徳の後裔といふ。察信に榮洲、松林の二子ありて、亦父の畫風を學ぶ。晩近に至り、狩野の流派を以て、靈妙の筆を揮ひ、明治美術界に革新の光明を與へし一偉

人あり、これを狩野芳崖となす。

狩野芳崖、名は雅道、字は貫甫、勝海と號す。芳崖は晩年の號なり。長府の人、父は諸葛晴阜と云ひ、毛利氏の繪師にして、木挽町狩野の晴川院養信に學びて、狩野氏を賜ひ、仍つて狩野董信といへり。資性豪放、俠氣あり、繪畫の外、塑像鑄金をも善くし、多能の人なりき。芳崖亦頗る父の風あり、年少江戸にいて、勝川院雅信に學ぶ。前後十餘年、橋本雅邦と共に同門の獅子王と呼ばれる。資性逡邁、天成の才を揮つて、屢々古格に戻る。其の師これを怒ると雖、又私に服する所ありて、詰責を加へず。時恰も海内紛擾し、時勢漸く轉ぜんとす。文久の初年、芳崖國に歸り、筆墨を擲ちて、身を俗事に委ね、維新後は業を失ひて、生計に窮し、久しく畫事を廢するに至れり。明治十年意を決して東京に出づ、されど美術界は衰微この時に極まりて、有爲の才も施すに所なし、赤貧洗ふが如く、辛酸名狀すべからず。明治十五年十七年の繪畫共進會に出品はしたれども、世評紛々たるのみ、不遇憐れむべし。然るに米人フエノロサ、芳崖の畫を見て、感に堪えず、親しく來り訪うて、畫事

を談じ、一見舊知の如し。これ抑々芳崖が世に知られし初めにして、深く美術の趨勢を達觀し、自家の責任を覺りて自ら奮ふ所あり、フエノロサ等と共に斡旋して、東京美術學校の開設を見るに至りしが、惜しいかな、開校前數月、明治二十一年歳六十一を以つて歿せり。芳崖は常に技を世界に闘はず意あり、其の長ずる所、人物殊に宗教畫に存す。筆力意匠共に勁拔にして、傳彩沈厚、氣品の高さこと甚だし。明治の新日本畫は、芳崖を以つて本流の源とし、その感化注いで後進畫家に及べるなり。

南畫家其の他 南宗の畫風を學びて名ある者、三田尻の人、矢野筈山あり。筈山名は淳、字は子淳、別に竹舌山民、留雲瘦齋と號す。その畫は仲澹にして、所謂文人畫の趣に富む。弘化二年歿せり。就いて學びし者を林晴、釋公壽とす。公壽、半雲と號し、同地光明寺の住なり。林晴、通稱は真人、百非と號す。山水を能くし、畫亦蒼古にして、出藍の技あり。又山鹿流の兵書に通ず。門人に、林停雲、佐伯圭山、伊藤匪石等あり。

別に四條派に南宗の畫風を加へて、一家の妙境を開き、畫名天下に遍き者を小田海僊とす。名は王瀨、字は巨海、通稱を良平といふ。長門下關の人にして、染工の家生まる、人となり豪宕、幼より畫技に耽り、初め吳春に學びて其の筆意を窮め、南豊と號す。後専ら元明の遺法を窺ひ、刻苦多年、大に得る所あり、號を百谷とし、更に海僊に改む。京に在りて當時の名流と交はり、尤も頼山陽と善し。嘗て共に九州を遊歴し、還つて京都に居る、聲名籍々、畫を請ふ者常に門に滿てり。文久二年、歳七十八にして歿す。海僊は四條派より文人畫に移れるを以て、其の技練熟して、山水人物花鳥皆佳ならざるなく、水墨設色共に巧にして、臨摹にも長じ、近世の一名家となす。其の門に遊ぶ者、京都の中西耕石、長門の羽様西崖、周防の大庭學僊を巨擘とす。

羽様西崖、名は師古、通稱宗四郎、好んで花卉翎毛を畫き、筆力傳彩、別に一家の妙技を具へ、又名家たるを失はず。大庭學僊亦能く師の畫風を守りて、一時聲名を博したりき。

西崖の門に松浦松洞あり、名は知新、字は無窮、温古又松洞と號す。阿武郡松本市人にして、幼より畫を好み、且つ吉田松陰に従つて畫を讀む。又憂世の士と交はり、國事に奔走す。文久二年、久坂義助等と京都に入る、時事を慷慨して狂するが如く、遂に粟田の山に入りて自刃す。時に歳二十六、嘗て松陰の囚はれて江戸に送らるゝや、諸友松洞をして其の肖像を寫さしむ、今世に傳はる所の松陰像これなり。

夙に丸山派の畫を學んで、今應舉の名を博せし者を森寛齋となす。名は公肅、字は子容、別號を畫三昧齋と云ふ。萩の藩士石田氏の出なり、少くして大阪に出て、應舉の高弟森徹山の門に入る。徹山其の技を賞して、義子とし、旗幟を京都に建てしむ。資性忠厚、勤王の志深く、言皇室に及べば毎に感泣す。幕末紛擾の際、本藩の爲めに盡し、かつて死生の間を経たり。維新の後、醜然として俗事を擲ち、清貧に安んじて畫技に従事し、同志と後素如雲社を結び、後進を琢磨す。その後畫運復興の世となりしも、此の時名家多くは謝して、京攝の間、應舉の正派を傳ふる

者寛齋あるのみ、こゝを以つて聲名益々籍甚せり。明治二十三年初めて帝室技藝員の設置あるや、寛齋其の撰に當る。二十七年六月歳八十一を以つて逝けり。寛齋悉く應擧の妙趣を咀嚼して筆致稍々堅く、巧に山水花鳥を畫きて氣品最も高し。

享保年間佐々木縮往と云ふ者あり、字は洸真、別に玉肅堂と號す。經學を以つて儒員に列し、業餘丹青を弄す。其の畫、明人の遺法を學んで、未だ十分ならずと雖、苦心の作は、按排設色の見るべきものあり。寛政の頃山縣鶴江あり、吉敷の人に於て、名は英、通稱は俊平、一に縣英といふ、亦書畫を善くし、長崎に至り、清客、沈南蘋、張秋谷等と交はれり。美禰の人、菅江嶺は縣英に就きて學び、後業を岸駒に受け、遂に諸派を綜合して一種の畫を作る、甚だ氣韻あり。嘉永五年歳九十一にして歿す。

陶器

防長の陶窯は、傳説によれば佐野焼尤も古しとす。記録上にては、延喜式に見ゆる長門瓷器の事古けれども、その窯の在りし所いづれなるか今定め難し。永正年間山口に入幡窯ありしことも諸書に見ゆ。又吉敷郡陶の陶焼一に足は起原甚だ遠く、正治二年の記録にも見ゆといふ。陶の地名も往時陶器を製したるより起れるなり。

佐野焼田一に 往古神功皇后の新羅征伐より凱旋の際、佐波郡佐野村に着玉祖神社にて祭祀を行はせらるゝに當り、同地澤田長をして土器を造らしめらる。これ佐野焼の創始にして、子孫相傳へて陶工を業とし、今に至れり。

末田焼一に 天明八年、佐野村の内田善右衛門なる者、同郡末田の土質陶器に適するを認め、宇堀越に來り、一の陶窯を築きて斯業を創む。領主毛利氏土地を與へてこれを奨勵す。然るに時勢の非なるに會し、寛政五年衰替其の極に達して、廢業の止むなきに至りしが、翌年其の二子來つて再興を謀り、經營幾多の困難を凌ぎ、漸次隆盛に赴くを得たり。其の子孫業を繼承し、今日に至る。

萩焼一 文祿征韓の役に朝鮮の陶工李勺光なる者我が師の虜する所となりて大阪に来る、秀吉これを毛利輝元に預く、輝元因つてこれをして長門の椿郷松本の中倉に居らしめ、唐人山名の樹木を窯薪に充て、陶器を造らしむ、これを萩焼の祖とす。又所々の古窯を検せしめて再興す、子孫山村氏を稱し、天津郡深川窯の祖となる。李勺光の弟李敬亦兄に招かれて歸化す、助八と改名し、後、坂高麗左衛門の名を賜ふ。松本に居り陶器を製す、その品高麗の章登と稱する者に倣ふ、質緻密ならず、釉色淡薄なる白黄なり、當時煎茶の技大に行はれ、世人これを貴重す、稱して古萩といふ。子孫業を傳へて今に至れり。

小畑焼 寛文年間、大和三輪の人源太左衛門休雪といふ者ありて諸國を遊歴し、深く製陶の業を究め、來つて椿郷東分村の小畑小丸山の麓に窯を開けり、子孫その業を傳へ、八代泥介に至り、大に改良を施し、今日に至れり。高麗焼を合はせて松本焼又萩焼とも稱することあり。

深川焼 天津郡深川村湯本の字三ノ瀬にありて製造す、他國にてはこれを

も萩焼といへり。毛利輝元、陶工李勺光をして、古窯趾を検せしめて、再興せしもの、一なり。爾來繼續して今に至れり。

須佐焼 慶長征韓役の後、朝鮮の陶工某來朝し、阿武郡須佐村に留まり、領主益田氏より土地薪材の給與を得て創始せるものにして、今に至り陶土を稱して、方言唐人泥といふ。爾來子孫繁殖して、居る所を唐津といひ、其の器を古須佐と稱す。餘業今に及べり。

小月焼 慶應二年、清末藩主其の臣藤崎惣介をして京都より職工を聘し、字宮ノ尾に築窯して、摺鉢、盞等の日用品を製造せしめしに始まる。維新後は、惣介其の工場を譲り受けて業を繼續す、其の子孫亦家業を繼ぎて改良擴張する所あり、近時に至りては益々良好の成績を得て、盃、花瓶、茶器等の製造を始め、其の結晶釉製器物は最も新奇のものなり。

漆器

往昔大内氏の時には、山口の工業頗る發達したる中に、漆器の製造も盛に行はれ、これを大内塗と稱す。朱青漆及び白密陀を以つて精細の模様を畫く、裏は木地すり漆なり。主として盃盆を作り、稱して大内盆、大内盆といふ。毛利氏の時に至りても、其の業に従事する者多く、その製作高も尠からざりしと見え、風土注進案に

椀類凡一萬四千五百人前此代銀凡貳拾八貫四百貳拾目 内拾七貫目漆木地代 殘拾壹貫四百貳拾目手取 云々と記せり、今も其の遺業をつぐ者あり。

第二編 地理

第一章 總說

本縣は、東は瀬戸内海をへだて、四國の伊豫に對し、東北は島根縣石見國廣島縣安藝國に接し、西北は日本海南は周防灘に面して、福岡縣豊前國、大分縣豊後國に對す、極東は大島郡諸島、東經百三十二度三十分にして、極西は、豊浦郡蓋井島、東經百三十度四十七分)に至り、極南は熊毛郡八島、北緯三十三度四十三分)にして、極北は阿武郡見島、北緯三十四度四十八分)なり。

第二章 面積及戸口

本縣の面積は三百八十四方里にして、戸口は明治三十九年末の調査によれば、現住戸數貳拾萬八千貳百參拾貳戸、現住人口百參萬九百五拾五人なり。今戸口の累年比較を擧ぐれば左の如し。

年次	現		住
	戸數	人口	
三十九年	二〇八二三二	一、〇三〇、九五五	四・九九
三十八年	二〇六〇三二	一、〇二五、七〇一	四・九七
三十七年	二〇五一三八	一、〇二〇、三〇五	四・九七
三十六年	二〇四九七九	一、〇一〇、九一六	四・九三
三十五年	二〇八二四三	一、〇二三、九七二	四・九一
三十四年	二〇九三三六	一、〇一七、〇七八	四・八六
三十三年	二〇七五三一	一、〇〇七、七二六	四・八六
三十二年	二〇一七五四	九九五、二四六	四・九三
三十一年	一九四三二〇	九七五、四七一	五・〇二
三十年	一九三四七六	九六九、〇〇三	五・〇一

第三章 地勢

本縣は、地形東西に延び、南北に縮まり、山脈縦横に連亘し、概して高原性を帯ぶ。その中部、北部の地帯に於いて、殊に然り。その海岸線は、北東の一帯を除く外、悉く海灘に面するを以て、延長三百餘里の長きに及び。

一、海 灣

本縣の周防灘に濱する所は、瀬戸内多島海に接して、屈曲に富み、その日本海に面する所も、亦出入多く、岬灣交々起り、大小島嶼その間に點綴す。周防灘方面は、最も港灣に富み、安下庄灣、久賀港、柳井津港、上關港、笠戸灣、徳山灣、三田尻灣、大海灣、秋穂浦、小郡灣、下關港等あり。就中、安下庄灣は大島郡にあり、南面して灣内頗る濶く、且、水深くして艦船の好避泊所とす。久賀港、柳井津港は共に繁華なる要津なり。上關港は往昔有名なる港なりしも、今は衰頽して當年の繁榮を存せず。水深は四尋餘あり。笠戸灣は灣頭に、下松、徳山灣は徳山、三田尻灣は三田尻、大海

灣は大海。秋穂浦は秋穂、小郡灣は九尾等の港を控へ、船舶常に入出せり。就中徳山港は五尋乃至八尋の水深を有し、艦船の良避泊所とす。三田尻港これに次ぎ、近傍の要津にして、水深五尋餘あり。山口に接近するを以つて、船舶の出入貨物の集散、従つて多し。下關港はその水深は三尋乃至十二尋、關西屈指の大要津なり。

日本海方面の主要なる港灣は、西に油谷灣あり、中間に深川灣、三隅灣あり、東方に萩灣あり、萩灣は越ヶ濱半島によりて、東方に灣入し、狐島、中ノ臺、鶴江臺の、その中に伍列して、各臺間に支澳二三を造り、就中小畑港は北風を避けて水深く、底質錨泊に佳良なり。三隅灣は、青海島と陸岸との間にありて、灣口東に開き、大島嶼爰に羅列すと雖、其の間可航水道ありて、灣内に通ず。灣内は甚だ濶く、内外の二港に分れ、外港は通浦とし、内港は仙崎港とす。港内水深く、艦船を碇泊すべし。油谷灣は、響灘方面に於ける最好の灣入なれども、灣口西に開きて冬季の西風を受け、且つその中央以東は淺灘なるを憾とす。然れども、其の西北の小澳、

大浦は水深く、港口亦廣きを以つて、船舶の錨地となすに適せり。

二山脈

山陰山陽兩道の脊梁をなす中國山系は、東北より來りて、周防、石見の天然の境界をなし、遂に石防長三國の交界點に至る。之を寂地山脈と名づく。寂地山四、四五五尺をその最高峰とす。この山脈は、また幾多の小山脈を分岐し、就中南走して、藝防の境を爲すものを羅漢山脈と名づけ、安藝の多島海に入りて盡く、羅漢山(三、九二〇)その最高峰なり。其の西に石城山脈ありて、都濃、玖珂、熊毛の三郡の境上を南走して、室津半島に達し、飯野山脈、またその西に連りて、佐波川、錦川の分水界をなせり。その寂地山脈より、一支北に延びて、長門、石見の國界を爲すもの、これを徳佐ヶ峰山脈と名づけ、徳佐ヶ峰(三、三七九)を以つて最高とす。寂地山脈の主脈は、漸次西南に向ひて、方便山脈となり、起伏蜿蜒、防長二國の天然境界を劃し、終に、厚狹郡宇部の岬に達して海に入れり。西方便山(二、四七五)を以つてその最高峰となす。

方便山脈より北に分岐して阿武郡の西境を劃するもの之を鯨ヶ嶽山脈といひ此の山脈の中途西に折れて大津郡の南境を西走するものこれを桂木山脈と稱し桂木山(二、四四八)花尾山(二、三一〇)一位ヶ嶽(二、二八〇)等の高峰その中にあり桂木山脈の南には大なる石灰岩層ありて丘陵の狀を爲すこれを秋吉臺とす。

又一位ヶ嶽に起りて一支豊浦郡の東部を南走するものを下山山脈といひ下山(二、四七八)を最高峰とすその西に拘留孫山脈ありて拘留孫山(二、一〇八)鬼ヶ城山(二、一二八)等の高峰其の中に峙てり。

長門の北方にて東西に亘れる一の火山脈ありこれ蓋し白山火山脈に屬するものにして笠山其の中央に位し圓錐形の火山なり笠山はその噴出物の量より推すに曾て甚大なる火山作用の此の地に活動せしを知る然れども今は所謂熄火山となりて僅に昔の名残を噴火口の四近に留むるのみ笠山の東方に羽賀臺長澤臺物見ヶ嶽(二、六四九)等の火山臺あり西には六島大島相島尾島青島肥島羽島樺島あり。

海島高山その部に登ゆ 雨乞山等あり。

三、河 流

本縣の河流は寂地山脈桂木山脈等を分水界として南周防灘に注入するものと北日本海に朝宗するものとの二あり。

周防灘方面の河流の大なるものを錦島田佐波榎野厚東厚狭吉田の諸川とす。錦川は源を都濃郡の西北隅なる鮮ヶ嶽に發す其の流路著しく屈曲するを以つて特色とすはじめ東南に向ひ次いで著しく東北向して玖珂郡の西北部に到り更に東南に向ひ岩國を経て海に朝す又岩國川の稱あり。流程二十七里許縣内に於ける最長河なり佐波川(一五里)は防長石三州の交界點附近に發し上流は岸高き峡谷を流れ西南流して宮市の西を過ぎ個々の砂洲を擁して海に入り堀以南凡そ七里舟筏を通ずべし。榎野川(八里)は源を防長の國境に峙てる高羽ヶ嶽に發し西南流して宮野一の坂小鯖の諸溪流を合せ名田島の南に到り小郡灣に入るその河口附近の低地は佐波川の河口と同じく最も桑滄の

變を經たるものなり。
日本海方面の河流にして、流程の最長なるものを阿武川(一八里)とす、源を物見ヶ嶽の北陰に發し、南西に流れ、次いで北西に轉じ、生雲、藏目喜、佐々並、明木の諸溪流を併せて下流に至り、二派に分る。右なるを松本川とし、左なるを本流川とす。ふいと、萩町を載せたる三角洲をその間に作り海に入る。舟筏の便少なからず。

四、瀑布

(高サ十丈以上)

瀑名	所在地	高	幅
延命ノ瀧	大島郡久賀町	一〇〇	一
寂地ノ瀧	玖珂郡高根村	一〇八	一
鳴比羅ノ瀧	同 高森村	一四三	〇五
金比羅ノ瀧	佐波郡小野村	一〇〇	七
金鷄ノ瀧	吉敷郡山口町	一六〇	一八

重石ノ瀧	同 仁保村	一三〇	三
布瀧	美禰郡 眞長田村	一八〇	三
男瀧	同 大田村	一三〇	三
樺ノ瀧	同 同 村	一五〇	四
大瀧	同 赤郷村	一六〇	四
大瀧	大津郡 三隅村	三〇〇	一
魚切ノ瀧	同 同 村	二四〇	〇九
蛇淵ノ瀧	同 同 村	四八〇	二七
魚切ノ瀧	阿武郡 生雲村	一〇〇	〇六
道永ノ瀧	同 阿武郡 富村	二〇〇	一八
扇子落ノ瀧	同 阿武郡 川上村	一〇〇	一
釜ヶ瀧	同 徳佐村	三三〇	?
男瀧	同 福賀村	一八〇	一
女瀧	同 同 村	一〇〇	〇九

五、湖沼

本縣には天然の湖沼の大なるものなく、左に掲ぐるものは大抵地形を利用し、人工を以つて構成したる池沼なり。

町以上池湖表

名稱	所在	東西	南北	周囲
長澤池	吉敷郡 大錢道村	一〇、 <small>丁</small> 九 <small>間</small>	五、 <small>丁</small> 四 <small>間</small> 七	一、 <small>丁</small> 一〇 <small>間</small> 、 <small>丁</small> 一〇 <small>間</small>
黒谷池	吉敷郡 井關村	六、〇〇	四、三〇	〇、 <small>丁</small> 三、 <small>丁</small> 一〇
常盤池	厚狹郡 宇部村	二〇、〇〇	二六、〇〇	三、〇〇、〇〇
青海湖	大津郡 仙崎村	六、〇〇	三、二五	〇、一八、 <small>丁</small> 五

六、原野

縣内は到る處山嶽起伏して平野の著大なるものを缺けり。然れども河川の末流近傍に於ける沖積耕地の頗る洞開して廣袤數里に亘る防府平原の如きものあり。防府平原は、北は佐波川の中流域に接し、西は榎野川下流なる小郡平原と連なりて、最も曠濶なる平面を成し、米穀の收穫多大なり。その他周防灘沿岸にては、東に、夜市、富田、末武、田布施、錦諸川の下流域、西に厚東、厚狹、吉田諸川の下流域に於いて各起伏少なき小平原を有す。北海岸にては、萩町附近、三隅、深川、粟野等に於いて、平衍なる廣地を有せり。

第四章 地質

甲、水成岩類

最古の岩層なる始原層は、本縣に於いて、玖珂、態毛、大島三郡に亘り、稍々廣く存在せり。岩石は主として花崗片磨岩より成り、黒雲母片磨岩なども認めらる。ま

た所々石灰岩の被覆する所あり。

次に古生層の本縣の地質を構成するは、所謂秩父古生層と稱するものにして、玖珂、熊毛、都濃、佐波、吉敷、美禰、厚狹の各郡に亘り、凡そ東北東より西南西の方向に延びて、廣瀨の地域を占む。この地層を構成する主なる岩石は、輝岩、石英、千枚岩、石英岩、硬砂岩、粘板岩、輝綠凝灰岩、硅岩及び石灰岩にして、其の下層の岩石は、外觀著しく結晶片岩に類して、結晶質を帯び、剝性を有するもの多し。以上岩石の累層は、かつて廣大なる區域を占めしも、所々花崗岩の迸發ありてこれを切斷し、或は石灰岩の成生ありてこれを被覆したり。

石灰岩は、其の分布甚だ廣く、殊に美禰郡に於いては、北東より南西に亘りて、長さ五里、幅約二里を有する石灰岩の露頭を現はし、廣瀨なる臺地をなす。これ所謂秋吉臺にして、岩層中に、珊瑚、石蓮蟲等の化石を含む。又大理石の良材を産するを以つて名あり。

中生層は、厚狹、豊浦二郡に於いて、廣大なる地盤を被ひ、延びて美禰、大津、阿武の

三郡に亘り、別に都濃郡に小區域を占む。その中、比較的前期に屬するもの^所三^所層^所紀^所は、厚狹郡の厚狹、埴生の間に現はれ、主として、頁岩、砂岩の累層より成りて、所々に無烟炭を含有し、山野井附近にては、植物化石を埋藏し、里俗これを忍草石^{しのくさいし}と唱ふ。前述の層と、秩父古生層を被ひ、厚狹、豊浦、美禰、大津の諸郡を経て、萩町附近に達する中生層^{中生層}は、^{從來これ}赤間關^{赤間關}硯石^{硯石}統^統と稱せり。其の下部、頁岩、砂岩、疊岩の累層にして、豊浦郡の西中山附近に現はれ、頁岩中にアンモン介の化石を埋藏せり。其の上部亦、頁岩、砂岩、疊岩、輝綠凝灰岩、角礫岩等より成りて、時に石灰岩を夾み、又數條の無烟炭の介在するを特徴とす。かく無烟炭を介在する中生層は、大嶺、伊佐附近を廻りて擴がる。又、輝綠凝灰岩の厚狹郡の森廣、平沼田に産するものは、青紫兩色、又は紫褐色を帯びて、有名なる赤間關硯石の原料に供せらる。新生代の初期なる第三紀層は、主として大津郡の北と、厚狹郡の南とに現はれ、主要の岩盤は、砂岩、頁岩、疊岩等にして、大津郡にては、其の互層中に木葉の化石と、石炭の薄層とを含み、岩質固けれども、厚狹郡のものは甚だ粗鬆にして、累層

の間、亦個々の炭層を夾みて、小野田の炭田を現出せり。
 新生代第四紀の舊期に成りし洪積層は、主として、赤土、砂礫粘土の四種より成り、これ亦、かつて廣大なる地域を領せしが、流水これを削磨し去り、現今は僅に、海岸若しくは平原の所々に平坦なる累層をなして存在するのみ。本縣の南部にては、小月附近、阿知須の北方、宮市及び徳山の東方等によく擴布し、北部にては、深川附近及び萩の東方に現はれ、山間にては、須々萬徳佐等によく發達して、或は花崗岩上に座し、或は古生層等を覆ふ。
 地質上最新の沖積層は、柔軟なる泥土、砂、又は砂礫の雜合より成りて、海濱或は河畔に接する低地をなし、現時もなほ間斷なく、沈積成生しつつあるものなるが、本縣に於いて其の區域の大なるものは、佐波川に延縁せる低地にして、これに次ぐを、阿武川、榎野川、吉田川等に沿ひて出來たる沖積地とす。

乙、火成岩類

古期の噴出岩中、花崗岩は、古生層或は中生層を貫きて迸發し、山塊又は岩脈となり、周防の大部、長門の厚狹、豊浦、阿武、各郡に現出して頗る廣濶なる區域を劃す。これに黒雲母花崗岩、角閃花崗岩の二種ありて、後者は其の分布普からず、共に建築石材として廣く使用せらる。玢岩は主として中生層を貫きて噴出し、岩脈若しくは、山塊をなし、萩附近及び豊浦郡、佐波郡の北部等に現はる。その他、石英斑岩、閃綠岩、斑糲岩、蛇紋岩等も、亦所々に岩脈又は岩株となりて現はるれども、いづれも分布廣からず。

縣内に於ける火山岩は、石英粗面岩、角閃安山岩、玄武岩の三種を主なりとす。石英粗面岩は、分布最も廣濶にして、阿武郡の大部を覆ひ、東は周防、石見の境界山脈を構成し、西は豊浦、大津、美禰各郡に亘り、山口附近に於いても、古生層を貫きて盛に現出せり。石質硬軟の中和を得て、石材に使用せらる。角閃安山岩は、所々小區域をなして噴出し、都濃郡に於いて、金峰山、熊ヶ岳周防小、及び嶽山等の峰巒を造れり。亦石質施工に易し。玄武岩は、主として長門の北海岸及びその海上

の島嶼に現はれ、就中萩の北一里に位する笠山は、山骨玄武岩より成れる一の
熄火山なり、笠山近傍に於いて、この岩石の黒色にして孔隙あるものは、越ヶ濱
石と稱へ、萩町にて石燈籠の如き細工に使用せらる。玄武岩の豊浦郡の北西神
田下村附近に現はるゝものは節理よく發育し、里俗これを俵石と呼べり。

第五章 鑛泉

現時縣内に於ける温泉の湧出地は、湯田、深川、俵山、川棚の四箇所あり、皆此の地
方に普く頒布する火山岩の裂罅より湧き出づる通常湧温泉なり。

名稱	位置	泉質及 温度	成分	泉源及 浴槽
湯田温泉	古敷郡下宇野 令村湯田町	鹽類泉 淡黄色無臭鹹味 温百十度	亞見加里性反應、成分 亞見加里、矽酸、硫酸、 基、硫酸、矽酸、加爾	數箇所

深川温泉	大津郡深川村 湯本	單純泉 淡黄色無味敗臭 温九十一度	弱亞見加里性反應、成 分亞見加里、矽酸、 矢亞、鐵、硫酸、 矽酸、礬等	泉源二箇所 禮湯温湯と 稱す浴槽三
俵山温泉	大津郡俵山村 湯町	單純泉 淺黄色無臭無味 温九十三度	弱亞見加里性反應、成 分亞見加里、矽酸、 矽酸、礬等	泉源二箇所 眞猿湯新湯 と稱す浴槽
川棚温泉	豊浦郡川棚村 湯町	鹽類泉 淡褐色微濁無味 温九十一度	微亞見加里性反應、成 分亞見加里、矽酸、 鐵、亞見加里、矽酸、 礬、炭酸等	泉源數箇 所健湯最 盛

此の外、低温度の鑛泉は、厚狭郡の持世寺、都濃郡の湯野等に在りて、花崗岩の罅
隙より出づ。殊に前者は、昔時厚東氏の所領なりし頃、熱泉湧出したりと傳ふ。

第六章 氣象

温度 防長二國は、本州の西端に位して、比較的緯度に横はるのみならず、三
面海を繞らすを以つて、海洋の影響を受くること大なり、従つて氣温も亦概し

て中和を得たり。冬季に於ける縣下南部西部の海岸の氣温は、東海道及び紀南の海岸と殆んど相同じきこと、冬季等温線圖の示す所なり。然れども、これを精査すれば、各地によりて多少の變化あるを免れず。概して言へば、普通の法則に隨ひ、海岸は溫和にて、内地は寒暑共に稍々強く、氣温の最低なる時は、毎年二月にして、最高なる時八月なり。今表によりて各地氣温の一斑を示さむ。

最高最低温度表 (明治三十八年度)

船木	見島	萩	須佐	徳佐	二月	八月
(一) 四、四	三、三	一、〇	(一) 一、三	(一) 三、〇	三、七	七、七
三田尻	下關	正明市	御堀	大田	二月	八月
(一) 一、四	二、三	一、五	(一) 一、二	(一) 〇、六	六、三	六、三
小松志佐	高森	岩國	鹿野	徳山	二月	八月
一、三	(一) 一、九	(一) 〇、五	(一) 三、六	(一) 〇、六	三、九	九、二
二七、四	二九、〇	二九、四	二六、八	二九、二		

表中數字の上に(一)を付するは氷點以下の示度なり。

雨量 縣下に於ける降水量も、亦これを全國の上より見れば殆んど中位にあり。而して彼の對馬海流は、多量の濕氣を送り、又東西に連亘する中國山脈は、凝結作用に影響するを以つて内海方面と、日本海岸地方とは、その間降水の量に多少の差異を生ずるを免れず。即ち内海方面は、一年を通じて晴朗の天氣割合に多く、日本海岸地方は雨量稍々過多なり。季節より言へば、夏季は縣下各地を通じて大差なきも、冬季は北部に降雪最も多し、概して毎年六月と七月とは、降雨最多にして、所謂梅雨の候をなし、陰霖數月に亘るも、一月及び十一月は雨量最小なるを見る。

風向 我が國は夏季に於いて南東の季候風吹き、冬季は北西風吹くを通例とす。本縣地方も亦此の圈内を脱せず、而して此の季候風交代の時、所謂二百十日の頃には、屢々颶風の襲來を蒙ることあり。

第三編 名所舊蹟

(甲) 周防

第一章 吉敷郡

山口町

山口町は周防國西北隅にあり、東方便山に上る口なるを以つて名くといふ。同山は、續紀聖武天皇天平二年三月の條に、周防國吉敷郡達理山とある者にして、古來銅を出すを以つて名あり。壽永の初、源頼朝平氏を伐ちし時、州の望族大内滿盛功あり、周防權介に任ぜられ、子孫職を襲ぎ山口に治す。北條氏の末、六世の孫弘幸守護となり、建武中、足利尊氏に屬す。子弘世に至り、長門を略取し、勢稍盛んにして初めて當地の繁榮を開けり。弘世の子、義弘武勇にして、足利義滿の寵を受け、六州の守護となり、西國に冠たる勢力を以つて、明及び

朝鮮との交通勘合の事をも掌りしかば、山口は更に一層の繁榮を致せり。數世の孫義隆の代に至り、大内氏は其の盛運を極め、山口の繁榮其の極に達せり。山口の地たる、東西北に山脈を負ひ、樞野川の其の間を流るゝあり、南方一部平野の開けたる狀、京都に髣髴たる者あるを以つて、當時西國に於ける小京都なる稱呼ありしといふ。當時の古圖を按ずるに、市街の廣袤、現時の數倍に達せし者の如し。天文二十年陶晴賢の反逆によりて、大内氏滅亡し、斯くて一時繁榮を極めし山口も久しく衰頽せしが、文久年間藩主毛利敬親、萩城に僻隅にして尊攘の事に不便なりしを以つて、茲に移りしより、稍繁榮を挽回し、現時山口縣廳、歩兵第二十一旅團司令部、歩兵第四十二聯隊、地方裁判所、區裁判所等あり。殊に山口高等商業學校、山口縣師範學校、山口中學校、農業學校、山口高等女學校、私立鴻城中學校、私立山口國學院、其の他公私の諸學校ありて、學生の集まる者數千、爲に此の地の繁榮を維持せり。然れども、この地物産豊ならず、加ふるに鐵路の敷設なく、交通不便なるを以つて、縣廳所在地とし

て不振の狀態に在り。山陰道は字、堅小路より分れ、長門國阿武郡を経て石州津和野に達す。龜山園は市街の西邊に在り、南に平蓮寺山、北に春日山相並びて一連の丘陵をなし、總稱して長山といふ。

恩德碑

山口町字糸米に在り、故贈從一位木戸孝允の碑なり。公嘗て居を當地に占めたる縁を以つて、其の死に臨み、故宅山林の當地にある者を擧げて、村民に與へ、子弟の學資に充てしめたるを以つて、村民相謀りて是を建つ。

太神宮

山口町字龜山

龜山の西北六町許に在り、天照太神外六柱の神を祭る。永正十七年大内義興の創建なり。

所藏

- 一、後柏原天皇及び正親町天皇の勅額
- 一、高嶺太神宮御鎮座傳記 一卷 永正十七年閏六月下旬注之。

法泉寺の舊跡

山口町 字龍

兵部卿師成親王の墓と傳ふるもの及び大内政弘の墓等あり。兵部卿師成親王は後龜山天皇の皇弟なり。堺の役大内義弘を助けらる。義弘敗るゝに及び周防に下り吉敷郡上宇野令。法泉寺に落飾し、惠梵と稱せらる。應永七年二月なり。

天文二十年八月、陶隆房反して山口を襲ふ。二十八日義隆法泉寺に入りて拒がんとせしが、賊兵の來り犯すに及び、長門に走る。

郷社多賀神社

同上

天文年中大内義隆創建、祭神は伊弉諾尊なり。

洞春寺

山口町 字香山下

臨濟宗なり。元龜元年安藝國吉田に創建し、毛利氏の菩提寺なりしを、萩町に移し、其の後藩主の當地へ移轉の際、更に從ひ移りし者なり。現時育兒院を同寺内に設く。

所藏

一、天正二十年征韓役陣中制札

一、絹本着色維摩居士像一幅 傳顏輝筆 國寶甲種三等

香山園

洞春寺の北に隣る。毛利家の墓地にして、敬親、元徳二公の墓あり。明治三十三年開園せらる。園中梅樹多く、極めて清潔にして遊覽に適す。

勅撰碑

香山園内にあり。明治二十九年一月、今上陛下故毛利敬親の偉勳を懷ひて、建てしめ給ひし者なり。

瑠璃光寺

山口町 字山根

創建は遠く文明三年にあり。禪宗にして僧須益を開山とす。陶弘房の創建にして初め仁保村に在りしを、元祿三年現地に移したり。此地もと香積寺のありし所にして五重塔は舊香積寺のものなり。當地有名の古建築物にて、特別

保護建造物に属す。四百年前の建築に係れり。

郷社 八阪神社

山口町字 堅小路に在り、素盞鳴尊、奇稻田姫命、三女神、五男神を祭る。正平二十四年大内弘世、堅小路に創建せしが、元治元年毛利敬親高嶺タカノより現地に移す。毎年陰暦六月七日より七日間大祭を執行す。

築山神社

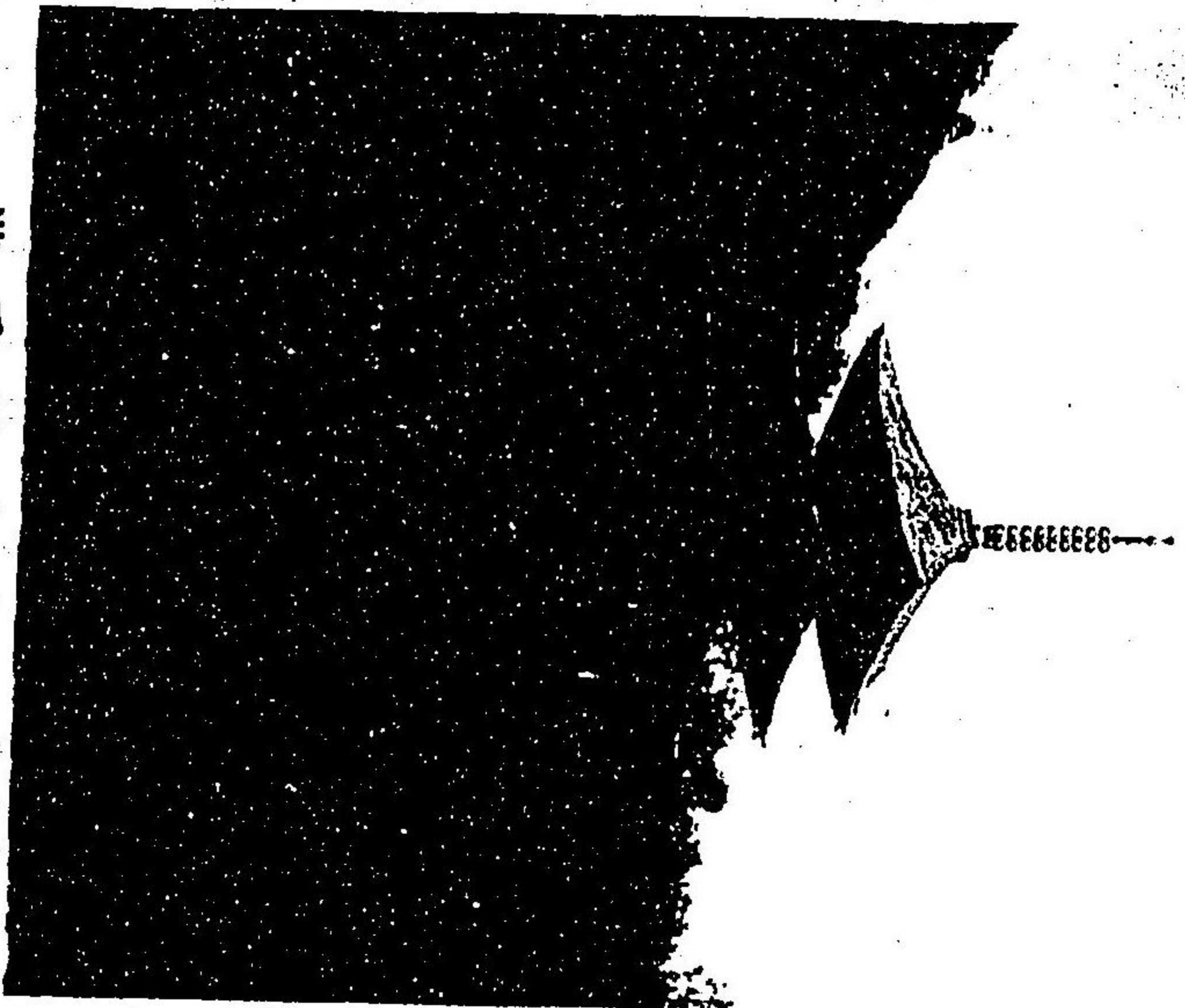
山口町字 堅小路

大内義隆を始め、大内氏代々の靈を祭る。初め毛利輝元多賀神社境内に建立せしを、明治二年毛利敬親今の地に移す。明治廿二年朝廷より特に祭料百圓を下賜せらる。

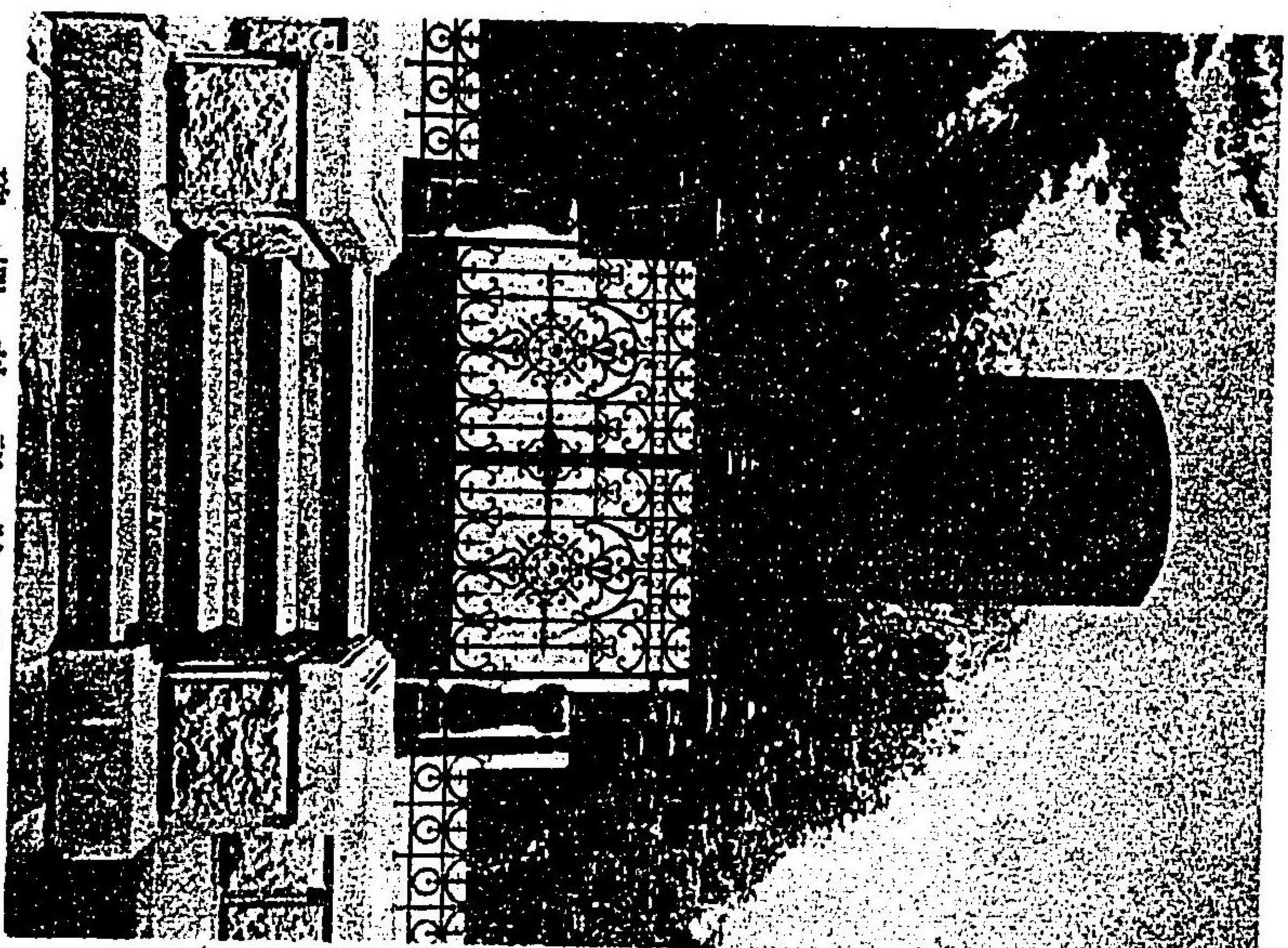
築山館址

大内氏の館址なり、今の八坂築山兩社附近の地なりといふ。天明二三年の頃までは池の形も残りしとぞ。

西國に下りし時大内京兆築山にて一座興行の時此の所のさまをつ



塔 重 五 寺 光 瑞



碑 撰 勅 親 敬 利 毛

かうまつるべき由所望侍りしに

池は海梢は夏の深山かな

宗 祇

雲谷菴

山口町
字野田

畫人として有名なる僧雪舟が、寛正二年に廬を結びて、住居せし遺跡なり。

野田神社

山口町
字野田

縣社にして明治六年九月の創建なり、毛利敬親、同元徳を祭る。

二ツ堂の梅

山口町大字上宇野令の山中に在り、梅樹溪流を夾み、花時清爽の氣人を撲つ。

金鷄ノ瀧

山口町大字上宇野令一の坂川の上流にあり、高さ十六丈、幅一丈八尺、頗景致あり。

神蓮寺 將軍屋敷

山口町字江良に在り、創建年月明かならず、明應九年、足利義植、大内氏に寄り

し際、居館となりしを以つて此の邊の地を俗に將軍屋敷といふ。もと神光寺といひしを、明治年間平運寺と合せて今の名に改む。神光寺は今の寺地の前にて、今は八幡宮の

左側なり、故に將軍屋敷は今の兵營内なり、

今八幡宮

山口町大字上宇野令

もと、宇治皇子を祀りたる古社へ、大内政弘下宇野令村朝倉の八幡宮を移し祀りし者なりといふ。

所藏

一、天文十四年名籍

龍福寺

山口町大殿大路にあり。曹洞宗瑞雲山と號す。大内滿盛の創建にして、最初宇白石に在り。義隆の時奏して勅願所とし、堂塔巍々たりしが、後火災にかゝり、弘治三年、毛利隆元、義隆の菩提所とし、現地に移す。現地は大内氏居館の趾なればなり。門内に在る豊後石は、大内氏の盛時、豊後の大友氏より寄送したる

庭石なりといふ。

所藏

一、弘治三年下賜の繪旨

一、大内義隆畫像

古熊天神

山口町古熊

大内弘世の創建にして、初め北小路に在り。元和四年十二月毛利秀就現地に移す。

袖解橋

小郡街道より山口町への入口にあり。傳説に大内氏の盛時、分國より山口に出る侍共、狩衣指貫等の露紐の括りを解き、身繕ひせし所なるを以つて名くといふ。

田邊玄齡

旅人の橋の名にも袖ときて

水に姿をうつしてや見し

本國寺

日蓮宗、圓満山と號す。山口町道場門前町に在り。正平年中大内弘世の創建なり。蓮歌師宗祇宗長等山口滞在中の宿所なりしといふ。

高峯城址

或は鴻峯に作る。山上古城址あり。弘治二年春大内義長毛利氏の兵を防ぐが爲に築きし者なりといふ。今猶石垣の跡を遺せり。

初瀬觀音

宮野村に在り。大内氏の盛時創立せられ。初め元初瀬に在り。堂塔伽藍壯麗を極め、遊覽の勝地なりしが、永祿十二年大内輝弘の亂に兵燹に罹り、後今の地に移せり。寺傳によれば、本尊十一面觀音は、琳聖太子の百濟より齎し來りし者なりとぞ。其の地眺望好きを以つて山口十景の一に數へられ、初瀬の晴嵐とて名あり。

明人趙秩詩あり(應安三年來朝)

非烟非霧翠光迷 谷口雲連日影低

都道嵯峨山色似 依稀疑是洛陽西

常榮寺

所在同前。寺號屢改廢あり。最初常榮寺と號し、永祿七年毛利元就、隆元の創建にかゝり、藝州吉田にあり。普光禪師(名は惠心)を開山とせり。慶長の初め、山口町大字、上宇野令、國清寺と合して一とす。國清寺は應永年中大内盛見の創建にかゝり、僧慶頼を開基とす。文久三年現地に移し、在來の妙壽寺と合併して興國寺と號す。明治元年更に當寺を潮音寺、妙壽寺を興國寺と改め、一寺兩名となりしが、同二年七月興國寺號を廢し、同廿一年九月更に潮音寺を常榮寺と改む。

當寺の庭園は、もと大内氏の別業にして、雪舟の築きたるを以つて有名なり。泉石の配置、今猶當時の面影を留めて歴然たり。

所藏

- 一、勅書 二通 一は元龜元年正親町天皇より、開山に正燈普光禪師の號を賜はりし物。一は天正三年正親町天皇より、開山に佛智大照國師の號を賜はりし物。
- 一、勅額 二面 一は常榮廣利禪寺と題し、一は祈禱と題す、共に正親町天皇の勅題なりといふ。
- 一、正親町天皇御扇 永祿三年正月、毛利元就御即位の資を獻ず、惠心使命を奉ず、天皇惠心を勞して、下賜せられしもの。
- 一、靈元天皇御宸筆 一通
- 一、大内盛見入道徳雄畫像 一幅
- 一、足利義輝の教書 二通
- 一、古文書 數十通、大内盛見、毛利元就父子三人、其の他、大内、毛利、織田、徳川諸家の狀。

其の他種々あり。

仁壁神社(三)の宮

宮野村に在り、表筒男命、中筒男命、底筒男命、味鉏高彦根命、下照姫命を祭る。創建の年月詳ならず、式内當國十座の一なれば、其の古き事推して知るべし。村名も蓋し是によりて名けられし者ならん。もと宇宮の前今の地より東北二十餘町に在りしを、堀河天皇長治元年今の地に遷さる。古は神田も多く、社殿も壯麗を極め、大内時代より周防三の宮に列せしが、數回の兵燹にかり、其の規模大に縮小し、以つて現時の状態に至れり。明治六年縣社に列せらる。

所藏

- 一、假面 一、傳垂仁天皇御寄附
- 一、太刀 三振 毛利家寄附
- 一、獅子頭尾 各一、毛利輝元寄附

一、掛物 一軸 大内義弘筆

一、同 一軸 毛利輝元筆

一、古文書 一通 大内盛見裁許狀

清水寺

宮野村にあり、平城天皇大同元年の創建なりといふ。古代は堂塔宏壯にして、殊に大内氏の盛時、盛見之を修造し、領主屢々茲に遊びしといふ。毛利氏に至り、秀就、重就、吉元三代に之を改築せり。境内に老櫻あり、花時杖を曳く者多く、清水の晚鐘は山口十景の二に數へらる。明人趙秩詩あり。

暮雲疎雨欲消魂 獨立西風半掩門

大内峯頭清水寺 鐘聲驚客幾黃昏

重石

仁保村大字、下郷に在り。奇巖峭立、恰も四個の箱を重ねたるが如し。高さ十餘

犬鳴瀑

間、瀑水其の下を繞り、巖上に立つ時は神骨爲に寒し。仁保村、大字、上郷に在り。瀑水斷崖を直下し、高さ十二丈、幅三丈、激沫絮を翻し、奇觀を呈す。俗に傳ふ、昔一人の行脚あり、過つて瀑水に落ちて死す。其の携へし所の犬悲鳴して、遂に主に殉す。故に此の名ありと。

乗福寺

大内村御堀に在り。正和元年、大内重弘、本村字寺、下に創建。後毛利輝元、今の地に移す。後醍醐天皇、建武二年、勅願寺たるべき繪旨を賜ふ。足利尊氏一國一宇の三重塔を本寺に建て、寺川を寄附し、七堂伽藍は、今の地より奥なりけるが、永正の末年、火災ありて、悉く焼失し、今は全く當時の像を留めず。

所 藏

一、後醍醐天皇の御繪旨

其の他種々あり。

琳聖太子之墓 大内重弘之墓 大内弘世之墓

大内村乗福寺境内にあり。琳聖太子の墓は九重塔、他の二つは五輪塔なり。

上田鳳陽の墓碑

同上に在り。嘉永六年十二月歿す。

氷上山廣隆寺

大内村大字御堀に在り。天台宗にして、延暦寺末に屬す。推古天皇の二十一年、百濟國の王子琳聖太子歸化して創建し、延暦廿三年宗祖傳教大師歸朝の時、興隆寺と號す。境内三千四百餘坪、四方山嶽を繞らし、風景頗る深邃なる處、釋迦堂、妙見堂、客殿、庫裡等あり。古へ大内氏の盛時には、其の累代の祈願所にして、寺坊の數、百に餘りしが、天文年間陶氏の亂に兵火にかゝりて焼失し、寛永九年再興せられ、更に毛利氏の祈願所となり、稍々舊觀を復せしが、明治維新後大に廢頽し、明治十年現地に移されたり。

所藏

一、琳聖太子の冠

一、張思恭筆 釋迦、文珠、普賢の三幅對

一、大内多々良氏譜牒

一、法華經版本 文明延徳の頃の彫刻にして、元龜、天正の頃に補ひたる者、八卷全備し、所謂大内版の祖なりといふ。

其の他、横笛、劍、假面、應永十一年本堂供養願文、大内氏時代の裝束等あり。

義少年碑

同村長野八幡宮の入口に在り。明治三十五年の撰文なり。今同碑文によりて事蹟の大略を記すべし。

二少年一は松原清介、一は常田角左衛門といふ。元祿中、藩士益田氏の陪臣作間某、此の地を領し、賦課過酷にして、人民其の重に堪へず、寶永七年遂に亂を起す。村中二少年あり、慨然として衆に代り、之を宗藩に訴ふ。酷吏追放

せられ、人民蘇生の思あり。法に越訴する者は死刑に處す、二人因つて刑せらる。清介年二十一、角左衛門年十九、時に正徳元年十一月廿六日なり、村民痛哭し、墓を建て、歲時祭奠を擧ぐ云々。

月光山泰雲寺

小鯖村、字、鳴瀧に在り。曹洞宗にして、應永十一年大内盛見の創建、開基は眞染禪師なり。師字は石屋、薩摩國伊集院の人にして、初め同村、ウツキダケ字、葦谷(現地より東方山中)に堂宇を建て、開雲寺と號せしが、大内侯參禪の不便なるより、永享元年今の地を相して移したる者なり。後大内氏累代の菩提所たりしが、大内氏の滅後、慶長十四年毛利輝元、小早川隆景の十三回法忌の爲め、更に寺領を加へ、泰雲寺と改めしむ。隆景の法名黃梅院殿泰雲紹閑大居士たるを以つてなり。其の後寛永五年伽藍悉く燒失し、今の伽藍は同七年の再建にかゝる。防長五刹の一なり。

所 藏

一、當麻曼多羅釋迦牟尼佛坐像 作者不詳

一、觀音立體塑像 丈五寸 作者不詳

一、宗祖承陽大師眞蹟

一、十六羅漢像 唐禪日大士筆

一、文安以後の僧籍 十六冊

一、古文書十九通

一、香合 宗祖承陽大師宋國より傳來せし者なりといふ。

一、桐形香爐 豊太閤明人に命じて作らしめし三個の一といふ。

鳴瀧の瀑布

泰雲寺の傍に在り。古へ主山の瀧と稱したる由、開雲誌に見えたり。水流直下百尺、瀑水、岩を傳へて奔騰し、飛沫四邊を掠む。鳴瀧と稱するは水勢激湧して、其の響遠く聞ゆるに、よるといふ。岩石の廣さ百疊に餘り、瀑水と共に寺内の壯嚴を添ふ。

法幢山禪昌寺

同村、字、鯖山、御除地に在り。曹洞宗の巨刹にして、應永三年大内義弘創建し、開山は慶屋定紹大和尚なり。當時は七堂伽藍巍然として、僧房の數多く、防長二州に於ける曹洞宗第一の巨刹にして、七百餘員の僧徒常に集まり居しといふ。爾來天明文政、兩度の災に罹り、漸次伽藍減少し、以つて現時の状態に至る。然れども境内廣く、堂宇の數多く、庭園は幽邃閑雅にして、飛泉あり、盆池ありて、縣下屈指の大檀林たるを失はず。日本洞上聯燈錄に當寺開山の事を記して曰く、

定紹字は慶屋、能登の人、俗姓は長氏、光禪明峰に投じて出家受戒し、明峰の寂後、加賀大乘寺、徹山に師事する事多年、印可を受け、後に周防に遊化し、鯖山の勝地に、法幢山禪昌寺を創建して、大に太守大内義弘の歸依を受く。應永十四年六月二十日寂す。世壽六十九。臘四十三云々。

願山十境

定紹

松門幽邃路旋轉	苔封華表護禪風
溪橋修竹遮岩瀑	山市畫屏對晚鐘
房繞龜峰南谷外	仙望獅洞石船中
分成十境非強喚	本有金剛一古叢

所藏

(寺記)

一、禁札及び榜示 多々良義弘、中務少輔尾張守周防介義隆、多々良朝臣義長、備中守輝元等の判の者。

小鯖八幡宮

同村、字、櫻陰に在り。社格は郷社にして、應神天皇を祭り、仲哀天皇、神功皇后を配祀す。創建の年月詳ならざれども、寛弘長和の間に於いて、宇佐より勸請せし者なりといふ。其の創建年月の古き事と、武門崇敬の淺からざりしとは、文安五年十二月大内教弘、永祿三年毛利隆元、同年十二月毛利輝元、同十年九月

毛利輝元、天正十年、毛利輝元の社領證判書等によりて見るも明かなり。本社
また鳥居の側に、貞治六年の古碑あり。貞治は足利義詮の時代なり。

所 藏

一、狛犬 作者不詳

二、挿畫縁起 二卷 大内氏の家臣相良遠江守自贊自筆して寄附せし者と

すよ、

佐波山隧道、美由伎松

山口町より防府町に至る途中、鯖山峠あり。吉敷、佐波兩郡界をなす。山甚だ高
からざれども、交通の衝に當るを以つて、明治十九年、隧道を開鑿して、車馬の
往來に便す。長さ二百八十一間、傍に

美由伎松あり。明治十八年、今上天皇陛下山口へ行幸あらせられし際、佐波
山峠馬上御通過、麓にて御乗換の爲め、暫時御駐輦遊ばされし處なり。後年世
人其の跡を追懷せんとて松を栽ゑ、碑を建て、題して美由伎松といふ。美由伎

は御幸の意なり。

朝倉八幡宮

下宇野令村、字朝倉に在り。清和天皇の御代、宇佐八幡を山城國男山へ遷し給
へる時の行宮にて、それより當所に祭れりといふ。後大内政弘是を崇信して
山口に分祀せり。今八幡宮是なり。

湯田温泉

正親町天皇の御代、發見せられし者と傳へ、同村、字湯田にあり。鹽類泉にして
僅に亞爾加里性反應を呈す。効驗の著しきと、通路の便なるとによりて、浴客
常に絶えず。

龍泉寺

同村、字前町に在り。大同元年、僧空海の創立。慶長九年、眞言宗を眞宗に改む。大
内時代二度の兵燹にかゝり、大に頽敗せりといふ。文久三年、七郷西下の際、東
久世通禧壬生基修、四條隆誦の三卿、一年餘滞在せし所なり。

所 藏

- 一、空海諸國行脚の鐵鉢
- 一、佛像一軀 空海作

赤田神社

吉敷村字赤田に在り。祭神大己貴命外二座。養老元年の創建。元慶二年六月從五位下を授けらる。周防の國四の宮なり。

龍藏寺、鼓ヶ瀧

吉敷村、宇瀧河内に在り。僧行基の建立にして、其の以前役小角の來錫せし遺跡なりといふ。境内瀑布あり、鼓ヶ瀧といふ。水量多からざれども、岩石の奇誇るべし。一の瀑、高さ八丈四尺、二の瀑、高さ一丈一尺、三の瀑、高さ五丈五尺。吉敷川に注ぐ。

平清水八幡宮

平川村、大字平井にあり。境内に平清水とて旱霖に水量増減なき池あり。依り

て社號となれりといふ。祭神は應神天皇外四柱にして、大同四年宇佐より分靈して、創建したる者なり。今の建物は四百年前のものにして、隨神は應安六年九月五日の銘あり。

西向寺

同村、大字黒川にあり。寛永十八年の創建にして、本願寺派の眞宗なり。

所 藏

- 一、阿彌陀如來立像 丈一尺五寸、傳、聖德太子作
- 聖德太子四天王寺を建立せし餘材を以つて、千體の佛像を作り、諸國に分ちたる一なりと傳ふ。

小郡町

本郡南部の中央に在り。圖書編及び登壇必究等には翁哥里と記せり。此の地山口への衝に當るを以つて、海外にも其の名聞えたる地なり。名産に榎野元結あり。中國一般に其の名聞ゆ。往昔大内義隆、榎野濱の別館にて紙を拵りて

米粉を塗り、髪を結びしを、里人見習ひて製し始めしといふ。

孝子太郎吉の碑

小郡町字仁保津に在り。太郎吉は農夫にして家元より貧しく、父母の外に二人の弟妹あり、弟は病身なりしかば、太郎吉は獨力にて家計を營み、父母に孝養を盡し、弟を撫育し、剩へ赤貧者には施與する事を好みたり。年頃になりて、人妻を迎へん事を勧められど、他人を交へなば、父母の心を傷むべしとて、應ぜざりき。此の事官に聞えて、賞を賜ふ事二十五度に及べりといふ。明治二年、年八十一にて死す。村民碑を建て是を表す。

梅ヶ崎

嘉川村、字相原、樵野川の河口にあり。眺望の佳なるを以つて稱せらる。

立歸り春や來ぬらむ梅ヶ崎

今川 丁俊

ちりにし花と見ゆる波かな

北方八幡宮

井關村、字北方に在り。天平勝寶三年、宇佐八幡宮を分祀したる者。西岐波村八幡宮の條參見。

丸尾崎埠頭及び燈臺

東岐波村に在り。埠頭は今より八十年前、岐波村里正、部坂倫卿、周防灘通行の船舶をして風濤の難を避けしめん爲めに、私財を擲つて作りし者なりといふ。長さ百二十間餘、高さ三間、根脚の水底にある者十二間にして、頂二間あり。其の構造は長石植組法と稱せらる。者縦横に大石を積疊し、其の根基を護る。是を歐洲に求むるに、露國ペートル河口の某砲臺と、其の建築法を同じくすといふ。倫卿更に私財を投じて、燈臺を作る。高さ三間、舟人之によりて安し。村民之を徳とし、其の没後、毎年祭典を擧げ、今に至つて例とす。

八幡宮

西岐波村、字山村に在り。天平勝寶三年、宇佐より分祀したる者にして、もと井關村、北方八幡宮と同社にして、東岐波村、字古尾に奉祀したる者なりしが、大

内氏の時代南北兩社に分ち、本社を南宮とし、井關村のものを北宮とせしなりといふ。

住吉神社

同村、字床浪にあり、昔和氣清磨勅を奉じ、筑紫へ下向の時、周防灘に於いて颶風に逢ひ、風波鎮定の祈願をなし、靈驗著しかりし神靈なりといふ。今地名を床浪といふは是に基くとぞ。

皇后石、鳴石、潜り岩

名田島村、字斧島に在り、皇后石は周圍凡そ五六十歩、傳へいふ、昔神功皇后三韓征伐の時、御船を繋ぎ給ひし故に名くと、古は潮水此の邊まで來りし事明かなり、傍に一つの岩あり、打てば鈴々と鳴るを以つて鳴石と名く、又一つの岩窟あり、潜り岩といふ。

旭山眞照院

秋穂二島村の中央に在り、旭山の山腹に位す、南方は眼界開け、一眸の中周防

灘を隔て、遙に兩豊の山岳を眺め、景色絶佳なり。

旭山招魂社

眞照院後の山頂にありて、眺望は前者に優る。維新前の志士の墳墓あり、久坂玄瑞の墓亦此の内に列す。

久坂玄瑞、名は通武、玄瑞は通稱なり。後義助と改む。家世々醫を以つて毛利侯に仕ふ。父兄早く没し、醫を業とするを好まず。兵を吉田松陰に學ぶ。松陰大に其の才を愛じ、目するに藩内第一流の少年を以つてし、女弟を以つて之に妻はす。通武年二十、芳野金陵の門に學び、古今の大勢に通じ、時勢の日に非なるを見て、慨然として尊攘を以つて己の任とし、高杉晋作等と謀り、共に力を合せて其の志を成さんとす。或は奇兵隊長となりて、馬關の先鋒となり、洋艦を撃退し、或は七卿を奉じて、難を長州に避けしむ。伏見の變大に奮戦して、彈丸に中り、終に免るゝ能はざるを知り、自割して死す。時に年二十六。明治二十四年四月正四位を贈らる。

八幡宮

秋穂村宇宮ノ且に在り。縣社に列す。社傳にいふ、嵯峨天皇の頃、異賊數々秋穂浦に寇す、國司之を奏せしかば、傳教大師に勅し、宇佐八幡宮を分祀せしむ。當時二島の海汀に鎮座す、依つて二島八幡宮と稱す、後數百年、炎上の事あり、大内盛見の時今の地に移すと、種々の所藏あり。

鑄錢司の古蹟

陶村に在り。嵯峨天皇弘仁三年始めて本司を置かれ、朱雀天皇の天慶三年に至る百十九年間繼續せしが、同年十一月七日の火災後廢止せられたるなるべし。本司は初め字司家に置かれたるを、後に瀧上山に遷されたり。續日本後紀承和十四年二月乙未、周防國鑄錢司言、遷立司家東方瀧上山、許之。遂伐樹木云々と見ゆるにて知るべし。本村はもと鑄錢司村と一にして、村名も數度變更ありしが、今は鑄錢司の古蹟は陶村に、陶の古蹟は鑄錢司村に残れり。さては鑄錢司の村名を初め、司家、政所、銅座、鑄錢坊、錢庫、得錢錢床、かぢやが床、など

本村及び鑄錢司村の地名は古の鑄錢司に關係ある者多し。又高さ六尺、横五尺四寸、厚さ四寸の立石の残れるは、蓋し鑄錢司の入口に建てたる標石ならんといへる説、信すべきが如し。

正護寺

同村に在り、臨濟宗萬松山と號す。陶弘政の創建。永祿十二年大内輝弘の亂に兵燹に罹り、多年中絶せしを後に再興せし者なり。

陶越前權守弘政の墓

正護寺の境内にあり、五輪塔なり。陶氏は大内氏より出づ、弘政の父弘賢初めて本村を領して、陶氏を稱す。弘政に至り、都濃郡富田に移る。貞治年間の人なり。

大村益次郎墓 同神道碑

大道村大字臺道にあり。

長澤池

鑄錢司村及び大道村に跨る。今を距る二百六十年前、代官東條九郎右衛門の作りし者なり。灌漑の便大なるのみならず、風景甚だ佳なり。

繁枝松原

大道村、字繁枝に在り。往古砂防の目的を以つて植ゑられし者なり。此の地砂白く、松緑にして遊覧に可なり。

孝婦石川阿石之碑

同村、字岩淵觀音堂の上り口に在り。全文左の如し。

いしは此里の女なり。家食しくて朝夕の烟もたてがたかりしかば夫なりはひのために旅にゆきてかへらずいし獨身姑の足なへの病にいたづけるを盡は背あひて寺に詣て夜はいだきてかはやに行しめなど手弱女の力にたへ難き事をばしつゝ、雨もり風あるゝ窓のもとに麻績糸くりて年あまたへにけりその行ひ官府に聞えてみつぎを免し物を賜へるみうつくしみおぼろげならず終に夫はこれをつたへさゝひとの國より歸り來

てもろ共に孝養を盡しけりかくてふたりの親みまかりける後に民籍にはたぐひ稀なる氏をさへ賜りていとゞ家の門を旌はせりこれ弘化丙午の年になん有ける隣にくまと云女あり石が行にならひ親に仕る事まめなりけりあはれ石が徳孤ならねばたゞ熊女のみならず推およぼさば東いは國山を極め西豊浦の海をつくして人の子人の妻たらん者皆めてまねびぬべくこそ

いは淵の底さへ照りてしつく玉いしとはいははじあはれその玉

元治元年秋七月

藤原宜寸撰

第二章 佐波郡

防府町

右へ周防國府を置かれし地なるを以つて名く。明治二十一年、市町村制發布せらるゝに及び在來の東佐波令、西佐波令の兩村、及び宮市町を合せて佐波

村とし、三田尻町、三田尻村、新田村に野島を合せて三田尻村とせしが、明治三十五年一月更に兩村を合せて防府町とせり。山陽鐵道は此の地を過ぎ、三田尻驛は同鐵道の樞要の地に當り、南には三田尻港を控へ、船舶常に輻湊するを以つて、頗る繁盛なり。

三田尻港は古來周防の要津にして、古書に往々あらはるゝ處なり。豊後風土記に「纏向日代宮御宇天皇、欲誅玖磨贈噉、行幸於筑紫、從周防國佐婆津發舟、而渡泊海部郡宮浦」と見え、景行紀に「到周芳婆磨時、天皇南望云々」と見え、仲哀紀に「參迎周芳沙廢之浦云々」と見ゆる、何れも皆此の地をいへるなるべし。

酒垂公園

一に天神山公園といふ、傍に松崎神社あるを以つてなり。公園は丘陵の半腹に據り、眼下防府町の全景を望み、遠く三田尻灣を隔て、向島を眺め、灣内の汽船帆船の走る有様より、汽車の鐵路を進み來る状態に至るまで、何れも公園の景趣を添ふ。